魔法少女リリカルなのはStrikerS ～蒼き復讐者～

草柳翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～蒼き復讐者～

【Ｎコード】
Ｎ１７２１Ｏ

【作者名】
草柳翼

【あらすじ】
ミッドチルダとは違う世界「セインティア」の辺境の村でごく普通の生活をしていた青年「エイン・ウィンゲル」は五年前のある事件をきっかけに、一人の魔道師を探す事になる。
彼が魔道師を探す理由は「復讐」。
彼が魔道師を探す理由は？　そしてその復讐の結末は……

プロローグ　始まりの日（前書き）

注意！！　本作品には原作のあるキャラを敵に回します。そういうものが苦手な方は
戻るを押してください。

プロローグ　始まりの日

俺が黒い翼を持つ魔術士の一味を追うのには理由がある。
［復讐］
その魔術士たちによって俺は多くの大切な物を失った。
その日から俺の人生は変わった。あの魔術師たちを殺す為、全ての時間を費やしてきたと言ってもいい。
あの時は何も出来なかった、何一つ守れなかった自分が嫌で、ただ強くなる為に。
今でも時々思うことがある。
あの時、あの魔術師たちと出会っていなければ、俺は平凡な人生を送っていただろうと……
そう、あれは五年前の春の出来事であった。

「……めよ。……よ、……の息吹」
微かに聞こえた声によって俺は目を覚ました。
「全く、人が気持ちよく寝ている時に、一体誰だよ」
それにしてもよく寝たものだ。昼間の久しぶりに剣の稽古を真面目したおかげ（せい）で、いつもより気持ちのよい昼寝を満喫できたので、たまには真面目にやるのもいいのかもしれないな。
目も覚めたことだし、俺は体を起こし木の枝から降りた。まだ寝ぼけているのか、危うく着地に失敗して、盛大にこける所だった。
「やけに涼しいな。寝る前はこんなに寒くなかったはずなのに……」
日が沈みかけ、辺りが少し暗くなってきているが、春にこの寒さは異常だ。体の震えが止まらない。
「とりあえず、一度村に戻ってみるか」
真っ暗になってから森を抜けるのは、幾ら森を知っているとして

も危険だし、迷ったら大変だ。それに、この寒さの事も気がかりだ。
一番重要なのは何と言っても腹が減った。今日の晩飯は何だろうな？　俺の嫌いな物じゃないといいけど。
そんな事を考えながら、俺は足早に村へと向かった。

「これは一体……」
村に着いた俺の目に映ったのは余りに、衝撃的で、現実離れした光景だった。
村が凍りついていたのだ。
木も、家も、家畜も――
そして、人間も。
「なんや。まだ生き残りがおったんか」
空から不思議な口調の少女が降りてきた。
少女は年は十四歳くらいで、白い帽子を被り、騎士の甲冑を模したような服を着ていた。
背中には堕天使の様な漆黒の翼を生やし、手には魔術師が使うような杖と本を持っていた。
「村を凍らせたのは、お、お前なのか……」
恐怖を感じたものの、何とか俺は少女に話しかけることが出来た。いくら魔術師だからと言って町中を凍らせるなんて事出来るのであろうか？　もしかしたら、他にも仲間の魔術師いるのか？
「そうや。わたしが一人でこの村を凍らせた」
「い、一体何の為に？」
「私にはやらんといかん事がある。これを集めて、大切なあの子を蘇らせないといけないんや」
少女の手には、とても小さな赤い水晶が握られていた。死んだ人を蘇らせるなんて、そんな事できるのか？
「でも、これを集めてられることを知られる訳には行かない……村の人同様アンタにも死んでもらわんとな！！」

少女は杖を俺に向け、杖に魔力を集束し始めた。一人で町を凍らせるくらいの魔術師の攻撃だ。逃げようとしても恐怖（と寒さ）で体は動かない。
「ブリューナク！！」
杖から放たれた、数発の魔力の弾が俺に襲い掛かる。
「くっ……」
俺は思わず目を閉じた。どうせ体は動かないし、防御したところで無意味だし。
俺の十四年の人生もここで終わるのか。こんな事ならもっと昼寝しておくんだったな……。
「何でや！？　何で私の魔法を受けて無傷なんや！！」
目を開けてみると、驚愕の表情を浮かべる少女の顔があった。
「あれ？　何で……俺は生きているんだ」
少女も非常に驚いていると思うが、一番驚いたのは俺自身だ。確かに俺は杖から放たれた魔法を食らった。それなのに、傷一つ無いのはおかしい。まるで俺の体に当たった瞬間に魔力が消滅したような感覚。
「アンタ一体何者なんや？　魔力を無効化するなんて、そんな事出来る人間いるなんて聞いてない！！」
彼女は明らかに動揺にしていた。そりゃそうだ、俺だってさっき始めて知った。
それからも同じような魔法攻撃をしてきた。しかし、同じように俺に傷を負わす事出来なかった。
少女は見た目には武器になるような物は持っては無い。つまり攻撃手段は魔法攻撃のみ。俺の魔力無効化能力（仮名）があらゆる魔法を無効化できるかは分からないが、もしかしたら――
この瞬間俺の中の少女に対する恐怖は、怒りへと変わった。村を無茶苦茶にしたこの魔術師の少女をもしかしたら、倒す事で出来るんじゃないかと、そう思った。
俺はゆっくりと剣を抜きながら少女の方に向かっていった。そし

て、力を込めて少女に切りつけた。
「嘘やろ。シールドごと……」
少女は三角形の魔方陣のような障壁を作り出したが、まるで障壁は紙のように真っ二つに切り裂かれ、消滅した。どうやら俺の力は持っている武器にも作用するようだな。
少女の右手は、さっきの攻撃を回避できなかったのか、大きな傷があり、そこからは、血が流れ落ちていた。
「俺はお前を許さない。町を凍らせ、人を殺し、俺の睡眠を妨害した！！」
少女に止めを刺そうとした瞬間――
「主はやてに手を出したからには、覚悟は出来ているのだろうな？」
振り下ろした剣は何者かの剣によって阻まれた。
俺の攻撃を受け止めた剣士は見た目十九歳くらいで、赤い髪を後ろに束ね、騎士の着るような甲冑を着ていた。
「シグナム遅い！！　危うく殺されるところやったわ」
謎の魔術師改め、はやてと呼ばれた少女は少し怒り気味に、赤髪の剣士シグナムに言った。
「申し訳ありません。まさか、主がここまで苦戦しているとは思ってもいなかったもので」
シグナムは申し訳なさそうに深く頭を下げた。
「お前もあの魔術師の仲間なのか？」
「魔術師？　そうかこちらの世界ではそう呼ばれているのか、そうだ。私の名はシグナム。主はやてに仕える守護騎士の一人だ」
こちらの世界？　何を言っているんだ……正直信じられないのだが、でも、はやての聞いたことの無いような口調。そして、シグナムの持つ剣。なんて説明したらいいか分からないけど、俺の住んでいる世界の技術ではこんな剣は作れないだろうと思った。
「シグナム気をつけてや。ソイツは魔力を無効化できる。防御魔法は無意味や！」
「確かにそれは厄介ですが、安心ください。一般人に遅れを取る守

護騎士ではありません」
はやての言った事を何事も無かったように聞き流し、俺の顔を見て言った。
「戦う前に聞いておこう。お前の名は？」
「エイン・ウィンゲル」
俺の名前を聞き終わると、シグナムは剣を構えた。
「主はやてに傷を負わせた罪。その命で償ってもらう！！」
正直に言ってしまうと勝てる気はしない。剣で防がれた瞬間から感じていたが、俺なんかより数十倍は強い。だが、俺は戦わなければならない。自分の命を守る為、そして、村を凍らせた魔術師を倒すために。

「そちらから来ないなら、こちらから行くぞ！」
先に仕掛けてきたのは、シグナムの方だった。間合いを一気に詰めての強烈な一振り。間一髪で回避する事が出来たが、それにしても、なんていう威力だ。振り下ろされた剣が当たった場所は大きくえぐられていた、もし、当たっていたら、怪我どころの騒ぎではない。最悪命を落としてたかもしれない。
「かなり危ないところだったが、次はこちらから行かせてもらう！」
正直に言ってしまうと、今の一撃を見て、足が震えてきた。だが、弱気になったら……確実に殺られる。
俺は地面を蹴り、一気にシグナムとの間合いを詰め、ありったけの力を込めて剣を振り下ろした。
「何！？　速い！！」
さっきの攻撃で力は凄まじいのは分かった。だが、スピードの方はそこまで脅威ではない。しかし、後一歩の所で俺の斬撃は鞘によって阻まれた。
「っち……決まったと思ったのだがな。まさか鞘で受け止められるとは……」
「確かに、今のは危なかった。だが、テスタロッサと比べれば、大

した事は無い」
テスタロッサとは誰かは知らないけど、きっと恐ろしく強いのだろうな……
「しかし、魔導師でも無いのに、よくそこまで戦えるな。一般人だと思って見くびっていた。きっとお前ならはきっといい騎士になれるだろうが……」
俺は直感的に感じた。シグナムは決めにかかるつもりだ。近くにいると危ない。
俺はとっさにシグナムから離れた。
「行くぞ。レヴァンティン！」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ！！』
剣が喋った！？　といつもなら驚くところではあるが、そんな余裕がある訳が無い。遠くてよく見えないが、剣の一部が開き、そこから筒状の何かが排出された。
次の瞬間、シグナムが剣を振り上げると、持っていた剣は幾重にも分裂した。刃と刃同士は太い糸のようなもので繋がれていて、まるで蛇のように自由自在な動きをする。そして、その刃は俺をめがけて襲い掛かる。
「まずい！！」
回避を試みたが、あちこちに切り傷を負ってしまった。何とか致命的なダメージは受けていないものの、反射的に剣でガードしてしまったのか、剣は刃のところがぽっきり折れてしまっていた。
「はぁぁ！！」
連結刃の攻撃によって雪が舞い上がり、視界が悪くなった所から現れたシグナムの強烈な蹴りを食らい、俺は数メートル先の木に激突した。
「くそっ、ここまでか……」
頭を強く打ったのか、体が動かない。それに、意識が朦朧としてきた。今度こそ本当にダメかもしれない……
「安心しろ。すぐに楽にしてやる」

シグナムは俺の心臓の辺りをめがけて剣を突き刺そうとした瞬間――
「エ、エインさん……」
村の入り口の前に1人の少女が立っていた。少女は走ってきたのか、息が大きく乱れていた。
俺は彼女の顔を見て目を疑った。なぜから、彼女がここに居るはずが無いのだから……
「ナタリー……なぜここに」
ナタリーとは年の同じだった事もあり、小さい頃から一緒に遊んでいた幼馴染みたいなもので、エメラルドの様に美しい緑色をした、少し弱気な印象を持つ垂れ気味の瞳。艶やかな金色の髪。村には若者が少ないから何とも言えないが、俺は彼女はとても素敵な女の子だと思っている。性格もちょっと天然な所もあるけれど、誰にでも優しい。そんな彼女に俺は特別な感情を抱いていたのかもしれない。しかし、ナタリーは1ヶ月前に魔術を勉強する為に、遠くの町に行ったはずなのだが。
「久しぶりにお休みをもらったので、村の様子を見に来ようと思って……」
休みができなら、たまには顔を見せに来とは言っていた事を思い出した。でも、よりにもよって最悪のタイミングだ。
「シグナム。まずはあの少女から先に始末するんや！」
はやてはナタリーを指差し、シグナムに命令した。
「はい。我が主」
シグナムはナタリーのいる方へとゆっくりと歩き出した。
「させない！」
俺は体を無理やり動かして、シグナムの方に全力で向かった。しかし、スピードはさっきの半分も出ない。
頼む、間に合ってくれ！
「何だと！？　いったい何処にそんな力が……」
間一髪の所でシグナムの剣を折れた剣でなんとか受け止めた。長くは持たないが、1秒でも長くナタリーが逃げる時間を稼がなけれ

ば！！

「俺の事は気にせず、ここは俺に任せて逃げろ！！」

ナタリーをこんな所で死なす訳にはいかない。

いつも昼寝ばかりしている俺とは違う。ナタリーは魔術を使う素質がある。勿論、俺にはそんな素質があるはずが無い。その力を使って沢山の人を幸せにしていきたいと、村を出る時にそう言っていた。

「い、嫌です……」

しかし、ナタリーは一歩も動く気配は無い。

「何故逃げないんだ！？　ここに居たらお前も……」

それでも、ナタリーは動かない。今の俺にはお前を守る力なんて残って無いのに……何で俺なんかの為に。

「そんな事言わないでください……私だってエインさんが死んでしまうのは嫌です。だから、私も一緒に戦います！」

俺はナタリーに声をかけようとしたが、彼女の真剣な、涙を浮かべる目を見て、絶句した。

「そうかぁ、アンタにとってはこの金髪の少女が何よりも大切なんやな。なら……」

さっきまで上空にいたはやては降りてきて、悪魔の様な邪悪な微笑みをし――

「目の前でその大切な人を失ったら、どんな顔をするんやろうね？」

はやては本を開き、目を閉じた。

「や、やめてくれ」

はやては俺の聞こえないのか、それとも聞こうとしないのか、淡々と呪文を唱え始めた。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」

明らかにさっきの魔法とは魔力の量が違う。あんなの受けたらひとたまりも無い。

「ナタリー！！」

俺は彼女の前に立とうと動こうとした。しかし、シグナムよって

阻まれ――
「主の邪魔はさせない」
シグナムの拳を受け、俺は凍りついた地面に倒れた。地面は予想以上に冷たく、俺の体力を徐々に奪っていった。
「エインさん！！」
ナタリーの声が微かに聞こえた。声のするほうを見た。しかし、右目がまるで霧がかかったかの様にぼやけている。さっき木にぶつかったのが原因なのか……
「石化の槍、ミストルティン！」
角形の魔方陣周りから六本、中心から1本の合計七本の光の槍が放たれた。
ナタリーは丸い魔法障壁を作り出すが、防ぐことは出来ず、槍の当たった部分が徐々に石の様になっていった。
俺の方にも槍は向かって来た。魔力無効化の力が働いたのか、俺の体は石化せず槍は触れた瞬間消滅した。
「エ……インさん……」
ナタリーの体は完全に石になり、そして、粉々に砕け散った。
それが俺の見た彼女の最後の姿であった。

「どうや？　今の気持ちは」
俺は声が出せなかった。頭の中が真っ白で何も考えられない。考えたくない。
「主どうします？　どどめを刺しましょうか」
村を失い。家族を失い。そして、大切な人を目の前で殺された俺にとって、自分の命などもうどうでもいい。
いっそこのまま死ねれば楽なんだろうな……みんなにも会えるだろうし。
「せやな。このまま殺してもいいんやろうけど……もうコイツは心も体も完全に壊れてしまったやろうし、多分このままほっといても

死ぬやろうし、万が一生き残っても、何も残って無いやろうし」
自分でも助からないのは分かる。どの道俺はどう転がろうと死しか待っていないのだから……
「そうですね。では、帰りましょうか？」
はやてたちは空へと飛び立った。俺は呆然とそれを眺めていた。そして、すぐに見えなくなった。
その後に訪れたのは、何とも言えない虚無感。胸にぽっかりと大きな穴が開いたような気分だ。
「はぁ……」
俺は息をついた。これは、全てが終わった安心のため息。
「悲しすぎると涙も出ないものなのか……」
今まで起きた出来事を拒絶しているのか、それとも俺の心が冷たいだけなのか……
「はぁ……」
二度目は深いため息をした。これはナタリーを守れなかった自分への後悔のため息。こんな事ならもっと自分を鍛えておくんだったな。
「やること無いし、寝るか……」
あたりは真っ暗で寝るには丁度いい。まぁ寒いけど。
俺は目を閉じた。もう永遠に目覚めなくてもいいと、そう思うながら……

プロローグ　始まりの日（後書き）

プロローグにしては少し長すぎるような気もしますが……
感想、意見などがありましたら、書いていただければ幸いです。

1章　束の間の時間（前書き）

大分時間がかかってしまいましたが、何とか2週間以内に完成できました……

1章　束の間の時間

・ミッドチルダ北部臨海第八空港到着ロビー　午前十時十五分

「ここがミッドチルダか……」

飛行機から降り、ロビーに出た。服装がこの世界の服装と違うのか、視線が少し気になる。

「全くサファイアの奴は何処に行ったんだろうな」

さっきまで一緒にいたはずだが、あれほど一人で行動するなと言ったのに……

数分ほど空港内を探すと、ケーキ屋の小ケースの前に立っている十歳位の青髪の少女を見つけた。

「サファイア。一人であまりうろうろするなと言わなかったか？」

俺の声に気づいたのか、サファイアは俺の方に振り向いた。

「あっ！　エインさん。ねぇ見てくださいよ。このケーキとっても美味しそうですよ～」

サファイアは小ケースに入っているショートケーキを指差しながら、にこにこした顔で言った。

「……お前、俺の話聞いているのか？」

コイツがそういう奴だとは、一年以上の付き合いだから分かってはいるが、まぁ一応は言っておく。

サファイアは甘い物。特にケーキの事となると、我を忘れ、夢中になり、その間は人の話なんて殆ど聞きいてやしない。本当に困ったものだ。

「そうですね。ショートケーキも美味しいですけど、チーズケーキも美味しいですよね～」

次は目をキラキラさせながらチーズケーキのある方を向いた。お前の頭にはケーキ以外の事は無いのか。

「……サファイア」

俺は呆れながら、サファイアに声をかけた。
「はい？　何でしょう」
サファイアは不思議そうに首をかしげた。
「あまり一人で行動しないでくれ」
「ご、ごめんなさい。すっかり忘れてました」
何度も頭をぺこぺこと下げるサファイア。
「……次からは気をつけてくれよ」
「はーい」
本当に分かっているんだろうか。正直なところとても不安だ。
「それより、エインさん。ここでケーキ食べて行きましょうよ～♪」
「昼飯も食べるんだから、あんま沢山食うなよ」
実は俺もケーキを眺めていたら食べたくなっちゃたんだよなぁ。
「は～い♪」
俺はサファイヤとケーキを食べた。サファイアはとても楽しそうで、その満面の笑顔を見ていると、見ているこっちも幸せな気分になってくる。
結局のところ、俺はケーキを一つ（モンブラン）食べ、サファイアは五個（ショートケーキ、チーズケーキ、苺のタルトなど）を食べた。
サファイアの奴ケーキ五個も食べたが、昼飯の事忘れて無いよな……非常に心配だ。
ケーキを食べ終わった俺たちは空港を後にした。

「ケーキ沢山食べて、と～ても幸せだよ～♪」
心から満足した表情をしながら、スキップしながら俺の数メートル前を歩くサファイア。
「前見て無いと危ないぞ」
俺の言葉が耳に入っていないのか、サファイアは右から曲がり角を曲がってきたピンク色の髪の少女がいる事に気づく気配は無い。

「あっ！！」
「えっ！？」
俺は声をかけようとしたが、間に合わず、サファイアはピンク色の髪の少女と衝突した。
「だから、前を見ていろと……」
ピンク髪の少女は何とかバランスを保つ事が出来たが、サファイアは後ろに倒れ、地面に頭をぶつけた。俺はその様子をただ呆然の眺める事しかできなかった。
「キャロ！？　大丈夫？」
ピンク色の髪の少女と同じ年くらいの赤髪をした少年が歩み寄ってきた。
「エリオくん。私の方は大丈夫だけど……」
ピンク髪の少女キャロがサファイアの方を見た。サファイアは倒れたまま、動かない。もしかして気絶してる？
俺がサファイアの所に行こうとした瞬間――
「エリオ、キャロ。一体何があったの？」
俺と同じくらいの歳（十九歳）くらいの金髪の少女が二人の前に歩いてきた。
「あ、フェイトさん」
「私とその子がぶつかって……」
キャロが金髪の少女フェイトに状況を説明した。
「キャロ、気をつけてないとダメだよ！」
フェイトに叱られ、申し訳なさそうな顔をしているキャロ。ケーキを食べて完全に浮かれた気分でいた
サファイアに問題がある訳であって……
「いや、今回の場合はそっちには非は無い。悪いのはコイツだ」
出て行くタイミングを失い、空気のように存在感の無い俺。このまま眺めていてもしょうがないしそろそろ行くか。
「あなたは？」
驚いた表情をして、フェイトが俺の方を向いた。

「まぁ……何ていうか、コイツの保護者みたいなもんだ」
厳密に言うと違うんだが、まぁ面倒なので省略。
「え！？　僕はてっきり兄妹かと思っていました」
「私もです」
エリオとキャロが口をそろえて言った。確かに髪の色も同じだし、よく間違えられるんだよなぁ。
「サファイア。いいかげんに目を覚ませよ！」
目を渦巻きのように回しているサファイアの体を上下に揺らした。

「……エインさん」
数十秒後サファイアは目を覚ました。まだ、頭がぼ～としているのか、目が半開き状態だ。
「大丈夫？　頭ぶつけっちゃったみたいだけど？」
フェイトが心配そうにサファイアの顔を見つめた。その瞬間サファイアは目を開けた。
「あ、あ、あの……そ、その……」
サファイアは顔を茹でたエビの様に真っ赤にして、俺の背中の後ろに隠れてしまった。
「あっ……」
その様子を見て目を丸くするフェイト。まぁ気持ちはよく分かる。
「悪いな。コイツは人見知り結構激しいんだ」
出会った当初の時は俺も散々苦労させられたものだ……
「そうなんだ。ごめんね驚かせちゃって」
フェイトはサファイアを微笑みかけた。この人から達人的なオーラを感じる……様な気がする。
「あ、あの、心配してくれて、あ、ありがとう……ございます」
サファイアはフェイトに対して小さくお辞儀をした。（俺の背中の後ろから首だけ出してだが）
初対面の人にサファイアが話しかけるのって、実は初めてなんじゃないか？

「じゃ、俺たちこの辺で。サファイアの事ありがとな」
俺は一礼し、この場を去ろうとしたら――
「あの、私たちこれから昼食にするんですけど、一緒にどうでしょうか？」
……そういえば昼飯何処で食べるか決めてなかった。俺ミッドチルダに来たのはじめてだし。
俺はフェイトのお言葉に甘え、一緒に昼食を食べる事にした。

「お二人は異世界から来たんですね」
「ああ、少しこの世界に用があってな」
勿論その内容を教える事は出来ないがな。
「あの、よろしければ、エインさんの住んでいる世界について教えてもらえませんか？」
エリオがとても興味津々に尋ねてきた。
「実は殆ど知らないんだ。俺が住んでたのは、かなり田舎だったからな。それに色々と、いそがしかったし」
「そうなんですか……残念です」
とてもがっかりした表情のエリオ。
「着きましたよ。ここです」
そんな感じで会話をしていると店の前に着いた。
フェイトに案内してもらった店は洒落た、カフェテリア風のお店だった。
「いらっしゃいませ～。何名様でしょうか？」
店に入るとウェイトレスの人が出迎えてくれた。
「五名です」
「では、席にご案内いたします」
俺たちはウェイトレスに連れられ、窓際のテーブルに座った。
あんまり、こんな感じでサファイア以外と食事する事はとても少ないから、

結構緊張する。
「こう言うお店ってはじめてなんですか？」
落ち着かない俺を気にしたのか、フェイトが話しかけてきた。
「ああ、あまり外食はしないからな」
とりあえず俺はメニューを見た。正直何がいいのかさっぱり分からん。隣のサファイアの方を見と、なにやら真剣な顔でメニュー眺めている。
「サファイア。メニュー決まったか？」
全然決まらないので、サファイアに聞いてみる事にした。参考になるか怪しい気もするけど……
「え～と、モンブランと、オレンジタルトと、このチョコレートパフェっての～！」
「全部デザートじゃないか！！」
あれだけケーキ食ったのにまだ食べるのか……
「サファイアちゃんだめだよ！　ちゃんとお肉とかお野菜も取らないと」
メニューが聞こえたのか、フェイトはサファイアを軽く叱った。
「分かりました。ケーキはやめて、他のにします……」
サファイアは少し残念そうにメニューを選びなおした。
「さて……俺も考えるか」
そんなこんなで俺たちはメニューを決めた。
「いつもはご飯はどうしているんですか？」
料理が来るのを待っていると、キャロが聞いてきた。
「殆ど俺が作っているが……」
「エインさん、とっても料理上手なんだよ。それにケーキも～」
あの事件以来、殆ど一人で暮らしてきたから、料理が出来ないと色々不便だし……（ケーキはサファイアがせがまれて、渋々習得したんだけどな……）
「そうなんですか！？　エインさん」
非常に驚いた表情でエリオがこっちを向いた。

「よくも悪くも普通レベルだよ」
特にこだわって作るわけでも無いし、よく普通って言われるくらいのレベルだしな。
「おまたせしました」
数十分すると、料理が運ばれてきた。
「わぁ～♪　とっても美味しそうです」
運ばれてきた料理（サンドイッチと野菜サラダとチョコパフェ）を見て、サファイアは目を星の様に輝かせた。
「確かに、上手そうだな」
とりあえず、俺が住んでいた世界でもあるような物を頼んだ。（スパゲッティと海草サラダ）
「それじゃ、冷めないうちに食べようか」
フェイトの一声で皆食べ始めた。
「美味しい……」
はっきり言って俺がいつも作っている料理とは全然違う。
「冷たくて美味しいです～♪」
隣のサファイアは顔をキラキラさせながらチョコパフェを食べていた（もう他のものは食べ終わっている）
「お口にあってよかったです」
フェイトはほっとした表情で言った。
「こんなんだったら、皆も連れてくればよかったかなぁ……」
「でも、色々とやる事がのこってるから……私たちも本当は遊んでる場合じゃないんですけど、特別に　私たちだけお休みもらえたから……」
実はこの人たち、結構忙しいかったのか。何か気使わせっちゃったかな。
「キャロちゃんたちって、今まで何をしていたんですか？」
「私たち機動六課っていう部隊に所属していたんですよ。フェイトさんが部隊長のライトニングって
言う部隊に。でも、昨日で試験運用期間が終わって解散になった

んですよ」
キャロが説明してくれた。きっと、この隊の心の優しい人なんだろうな……そういえば、アイツも部隊を作っていたと聞いたが、まさかな……
「そうなんですか。皆さんすごいですね」
こんな感じに会話をしていたら、時間は一時間以上経っていた。
俺たちはそろそろ店を出る事にした。

「あの聞いてもいいですか？」
店を出たところでフェイトが訪ねてきた。
「ん？」
「皆さんはミッドチルダにどれくらいいるんですか？」
どれ位いるなんて考えてなかったな。でも……
「多分、そんなには長くいないと思う」
目的が終わったら、もうここにも用は無いからな。
「そうなんですか。ちょっと残念です」
「エインさんお元気で」
「サファイアちゃん。今日は楽しかったよ～」
フェイトたちはそう言って右の方へと向かっていった。
「皆さん有難うございました～」
サファイアはフェイトたちが見えなくなるまで手を振っていた。
「さて、俺たちも行くか。サファイアどこか行きたい所はあるか？」
今日くらいはサファイアの好きにさせてあげないとな。
「そ、それなら――」

「エインさん。とっても夕日が綺麗ですね～」
昼飯を食べた後、ウィンドショッピングをしたり、アイスを食べ

たりした。そして、最後に来たのは空港近くの海だった。
「ああ。確かにな」
俺は心のそこから綺麗だと思った。サファイアは今までに無いくらい真剣な顔でこっちを見てきた。
「エインさん。今日は一日ありがとうございました」
「お礼をいうのはこっちの方だ。今日までありがとな」
今まであんまりこんな感じに二人でどこかに遊びに行く事は少なかったな。もっとそういう時間を作って上げればよかったと思う
「エインさんやっぱり――」
「サファイア！」
俺はサファイアの声を遮って言った。
「何です？」
「これだけは言わせてくれ。こんな事につき合わして、本当にすまなかった」
出来ることならサファイアには平和で、幸せな生活を送らせてやりたかった。
「そ、そんな。私だってエインさんに出会ってなければ……」
サファイアも色々と辛い日々を送ってきた事は俺も知っている。それを知っていて、なお、俺はコイツの力を借りなければいけない。そうしなければ、俺の目的は達成されないだろう。
「そろそろ行くぞ。サファイア」
辺りも大分暗くなってきし、そろそろ行動に移すか。
「は、はい」

今日は四月二十九日。
五年前に黒い翼を持つ魔導師はやてと赤髪の剣士シグナムに村襲われ、全てを奪われた日。
あの時は何も出来なかったけど、今の俺なら……
アイツらを「復讐」できる。

1章　束の間の時間（後書き）

果てしなく復讐とは程遠い内容になってしまいましたが、次からはちゃんと復讐の話になります。

後、設定のミスにより、事件が起きたのを、四年前から、五年前に変更します。

今後、このようなミスの無いようにしていきたいと思います。

誤字、脱字などがありましたら、報告の方お願いします。

2章　復讐の始まり（前書き）

かなり間が空いてしまいましたが、最新話です。

2章　復讐の始まり

「ここに奴が……」
俺たちがたどり着いたのは城の様に大きな建物であった。
「やっと着きましたね」
サファイアも何時もとは違い、真面目な表情をしていた。
「いいな。サファイア。建物に入ったら俺の後ろに隠れていろ。後、緊急時以外に絶対に攻撃はするな。分ったか？」
ここまで連れてきてしまった以上、サファイアを守らなければならない。それに、俺はコイツを戦わせたくない。
「はい。分りました」
「分ったならいいが、そろそろ行くぞ。サファイア」
こんな所にいても時間の無駄だし、早く行動に移さないとな。
「はい！！」
俺たちは建物の中に入った。何があろうとも俺はアイツをこの手で殺す。

「意外と警備は手薄だな」
警備の魔導師を数人倒しながら進んで行った。
建物の中は広く、綺麗に清掃されている雰囲気であった。しかし、部隊と言うには余りにも殺風景であった。まるで部隊が解散して、次の所に明け渡すかのように……
「薄暗くて、少し怖いです……」
そういえば、サファイアは暗い所苦手だったな。少し涙目になってるし。
「大丈夫だ。俺が付いているよ」
そんなやり取りをしていると、目の前に赤髪の少年エリオが立っ

ていた。服装は昼間の時と変わっていないが、表情はあの時とは違い真剣な表情をしていた。
「エ、エインさん。どうしてこんな所に……」
エリオはかなり驚いた表情をしていた。もちろん、俺だって驚いている。まさか昼間一緒に食った奴の一人と会うとは思っていなかったしな。って事はもしかして――
「なるほどな。お前たちが所属していた部隊はアイツの部隊だった訳か」
部隊に所属していると言う話を聞いてもしかしたらと思ったが、まさか本当に当たってしまうとはな。
「アイツって……エインさんがこの世界に来た目的って一体何なんですか！？」
「お前のところの部隊長八神はやてを殺す事だ」
俺はそのためだけに五年間生きてきた。
「はやて部隊長を……一体なんで！！」
「俺はソイツによって村を滅ぼされ、俺ともう一人以外殺された。その中には俺の大切な……」
その後も俺は色々とあった。何度も命を絶とうともした。でも、俺は生きてきた！　復讐の為に。
そうでもしなければ生きてこれなかった。そう、復讐こそが俺の生きる意味であり、俺が存在する理由なのだから……
「はやて隊長がそんな事する訳がありません。きっと何かの間違いです！！」
いや、間違える筈が無い。確かにアイツは八神はやてだった。堕天使の様に黒い羽。騎士の鎧を模した服、茶色の短い髪、そして不思議な口調。名前を知ったのは最近だが、村を襲ったのは確実にコイツだ。
「通してはくれないか？　別に俺のターゲットはあくまで八神はやてであって、その他の奴には興味は無んだけどね」
正直な所、俺としても無駄な戦いはしたく無いしな。

「それは出来ません。はやて隊長は僕の大切な仲間です。傷つけるのは誰であろうと僕は許せません！」
エリオの表情は険しくなった。こうなってしまった以上戦うしかなさそうだな。
「仕方ないか……行くぞ。サファイア」
背中に隠れていたサファイアが俺の隣へと歩いて来た。
「はい」
「サファイアさん。貴方まで……」
エリオは驚いた表情をした。それを見て、サファイアは顔色一つ変えずにエリオに話しかけた。
「エリオくんには分からないと思うけど、私はエインさんの為だったら何だってします。エインさんは私の唯一のロードなのだから……」
そう言うとサファイアは俺の方へと振り返り、手を差し出して来た。俺はその手を握った。
「「ユニゾンイン」」
手を触れた瞬間、サファイアは徐々に透明になっていき、最終的には見えなくなった。
「サファイアさんがユニゾンデバイス……」
術者と融合し、その力を発揮するデバイス――ユニゾンデバイス。こちらの世界にもあるかは知らないが俺はこの力を借りなければ――
「ああ、そうさ。時間も余り無いことだし……来い！」
俺が右手を空に上げると、突如空間に裂け目が出来た。そして、そこから翼竜の形をした機械が俺の手の方に飛んで来た。俺はその機械を手で捕まえた。
「ブルーウィング。セットアップ」
『マスター認識。ユニゾン確認。ブルーウィング・ブレイドモードセットアップ』
俺の体は青色の光に包まれた。光が晴れると、服装は青を基調とした服装に変わり、体は濃紺のマントで包まれていた。右手には長

さ六十ｃｍくらいの刀が握られていた。
「ストラーダ。セットアップ！！」
『Ｓｅｔ　ｕｐ』
エリオもデバイスを起動した。服装は赤い服の上に白いジャケットを羽織っていて、手には大きな槍を持っていた。
「さて……お互い準備も出来た事だし、始めるか」
お互いに距離を取り、デバイスを構えた。
「エリオ・モンディアル。貴方を倒します！」
「エイン・ウィンゲル。悪いが、ここからは本気で行かせてもらう」
俺は胸のポケットから取り出した眼鏡を掛けた。

「はあぁ！！」
先に攻撃をしてきたのはエリオの方だった。槍を大きく振り、衝撃波を起こして攻撃をしてきた。
俺は衝撃波を回避しながら、距離を縮めていった。
「もらった！」
刀で切りかかるが、かすることも無く、軽々と回避されてしまった。
「予想以上に手強いな……」
その後も何度か攻撃を試みたが、全て避わされてしまった。逆にエリオからの攻撃は素早く、正確でギリギリのタイミングで回避する事が多かった。一応、俺の羽織っているマントは強力な対魔法コーティングがされているけど、近接相手ではそんなに役に立つ物では無い。
それに、今後の戦闘の事も考えると、あまりこのマントに頼る訳にもいかないしな。
「エインさんもうやめましょう。これ以上戦っても……お願いです。投降してください！」

確かに今のまま戦った所で勝つ事は出来ないだろうけど――
「悪いけど、それは出来ないな」
辛い状況ではあるが、こんな所で諦める訳にはいかない。
「そうですか……ストラーダカートリッジロード！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』
エリオはカートリッジをロードし、槍を前に構えた。黄色い色の三角系の魔方陣が足元に現れ、魔力の増大を感じる。この攻撃を受けたら、ひとたまりも無いだろう。しかし、今のスピードでは回避する事は出来ないだろうな。
「こんな所で使うつもりは無かったが、仕方ない……ブルーウィング・ウィンドカートリッジロード」
『ウィンドカートリッジロード確認。高機動モードへ移行』
俺はマントの裏のポケットから緑色のカートリッジを取り出た。ブルーウィングの柄頭の部分がスライドし、俺はそこにカートリッジをロードした。その瞬間、体は羽の様に軽くなった。
「行けぇー！！」
『Ｍｅｓｓｅｒａｎｇｒｉｆｆ！』
槍の穂の辺りにある噴射口から魔力を放出し、その勢いでエリオは俺を目掛けて一直線に突撃してきた。
俺も回避を試みるが、成功するかどうかは――
「一応成功したみたいだが……」
俺は突撃を回避できた。正直な所結構際どいタイミングではあったがな。
エリオは俺が回避した後も止まらず、そのまま壁に激突した。まるで大砲が発射したかのような轟音が響き、その周辺に粉塵が舞い散った。
「いてて、まさか避わされるなんて……」
粉塵が晴れると、エリオは頭をおさえていた。よほど強くぶつかったんだろう。
「いや、こっちもかなり危なかった。数秒でも遅れていたらと思う

と、ぞっとするよ」
カートリッジをロードし、素早く動けるようになったとはいえ、あの攻撃を避けるのは結構しんどい。こんな事なら最初から使っておくべきだったな。
「さて、休憩は終わりだ。行くぞブルーウィング」
『了解』
壁にぶつかって怯んでいる奴を奇襲するのは流石に気が引ける。それに、相手もまだ本気を出しているか分からないし、俺としては出来る限り慎重に戦いたい。
「気を取り直して行きましょう。ストラーダ！」
『ＯＫ！！』
多分ここからが本当の勝負だ。気を引き締めていかないとな。

「旋風衝波！」
オレは刀を素早く振り、衝撃波を起こした。
その衝撃波はエリオ目掛けて真っ直ぐ、高速で飛んでいった。
「ストラーダ！」
『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』
目にも止まらないスピードで衝撃波を回避し、エリオは壁を蹴りオレの方へと向かってきた。
「ストラーダ。フォルムツヴァイ！！」
『ＯＫ！！　ｍｅｉｎ　Ｍｅｉｓｔｅｒ』（了解。マスター）
エリオはストラーダを力を込めて振り下ろしてきた。デバイスの形状は二つだった噴出口が四つになっていた。
「くっ……」
何とか刀でガード出来たけど、刀身の部分が少し欠けてしまった。まぁ一応ブルーウィングの刀身は液状金属で出来ているから、時間がたてばに元に戻るんだけどな。
オレは素早くエリオから距離を置いた。流石にあのスピードでは

動きを完全に読む事は出来ないだろうし、このままでは、戦況はかなり厳しいだろう。さてどうしようかな……

その後もエリオはソニックブームを駆使し、迅速に移動しながら攻撃をしてきた。その間俺は殆ど防戦一方だった。壁や地面を使っての移動。待てよ！　なら、まだ手はあるかも知れない。

「旋風衝波」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

やはり、ソニックブームを使って来たか。まぁここまでは予想どうりだが……

「もう一発！」

オレはブルーウィングを反対の手に持ち替えて、もう一度衝撃波を放った。

「えっ？　曲がった！？」

エリオは意表をつかれた表情をした。俺はエリオが向かうであろう壁の位置を予測し、そこを狙うように衝撃波に細工をしておいた。まぁ普通なら出来ないだろけど、ウィンドカートリッジの力を使えば可能だ。

エリオは衝撃波の動きを対処する事が出来ず、衝撃波はエリオの体を切り裂いた。

「予想は的中したみたいだな。だが、まだ終わりだと思うな」

俺は落下して来るエリオを刀で切りつけた。

「……ストラーダフォルムドライ」

『Ｆｏｒｍ　Ｄｒｅｉ．　Ｕｎｗｅｔｔｅｒｆｏｒｍ』

傷ついたエリオは再びデバイスの形状を変化させた。さっきのフォルムとは違い噴射口と石突から金色の突起物が出ている、高速戦闘用には見えないが一体何をしようとしているんだろうか？

「ストラーダ行くよ！！」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

また高速移動を始めたエリオ。さっきと比べるとスピードは落ちている。

「これなら行け――」
ると思ったが、部屋を縦横無尽に駆け回り、狙いが定まらない。
「フルスピード！」
エリオはさらに速度を速めた。
「消えた？」
あまりの速さに俺はエリオを完全に見失った。一体どこに行った……
「上か！」
エリオはストラーダを大きく振り上げていた。尖端部には電流が発生していた。
「サンダーレイジ！！」
ストラーダを思いっ切り地面に叩き付けた。
「何っ！？」
直撃は何とか避けれたものの、周囲にも電撃が走った。このマントが無ければただでは済まされなかっただろう。少し布が焦げたような匂いがする。
戦いが始まって十分。そろそろ終わりにしたいところだが……
「ストラーダカートリッジロード！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』
エリオがストラーダにカートリッジを数発ロードした。多分大技が来る。当たれば確実に終わりだ。
「ウィンドアクセラレイション」
『加速開始』
俺はエリオから大幅に距離を取り、ブルーウィングを鞘に収めた。そして、周りに薄い風の膜を作った。
この一撃で確実に決める！　ミスは許されない。
「疾風一刃！」
「紫電一閃！！」
お互いに技を繰り出した。

『加速終了』
「ふぅ……何とか決まったな」
技の特性上相手との距離が遠いほど加速がつくから、距離を取っていれば、多分俺が負けていただろう。
「僕の負けです……」
ストラーダは真っ二つになり、エリオは魔力を使いすぎたのか、疲れたのか分からないけど気を失い、床にゆっくり倒れていった。
「さて。先を急ぐか……」
正直じっとしていてもしょうがないし、さっさとアイツを仕留めたい。
「えっ！？　エインさん……エリオ君！！！」
俺が部屋を出ようとすると、ピンク髪の少女キャロが目の前に現れた。隣には小さな白い竜が飛んでいた。
「もしかして……エリオ君を倒したのって、まさか……」
俺は無言で首を縦に振った。
「どうして！？」
俺は何も喋らなかった。
「ケリュケイオンセッ――」
キャロはデバイスを起動させようとしたが、俺はその前に刀で切りつけた。
「安心してくれ。峰打ちだ」
キャロはその場に倒れた。生身の人間を切るのは気が引けるし、（峰打ちでも結構危険なのだが、かなり手加減しておいたから大丈夫……なはず）多分すぐには目覚めないだろう。
竜の方はどこかに行ってしまったみたいだが、まぁ気にする必要は無いだろう。
「今度こそ先に進むか」
まだ、赤髪の剣士もいるだろうし、もしかしたら、フェイトとも戦わないといけないかも知れない。

「でも、邪魔するなら誰であろうと……」
復讐を選んでしまった以上、俺はこうするしかないのだから……

3章　過去の誓い（前編）（前書き）

長くなりそうだったので、今回は2つに分ける事にしました。

3章　過去の誓い（前編）

エリオとキャロを倒した俺は八神はやてを探しに先へと進んだ。それにしても、入った時と比べると警備の魔導師が多くなってきている気がする。

「一体どこに隠れているんだ」

焦ってはいけないと分かっているのけど、でもな……

「落ち着かないな」

あの戦いの後から色々と考えていた。復讐の為とは言え、俺は二人の子どもを斬った。誰が相手であろうと、邪魔をする奴は倒す。そう決めた筈なのに、心が少し揺らいでしまう。

エリオの場合は正式な勝負だったから仕方が無い。しかし、キャロの場合は違う。生身の人間を斬った。罪悪感は無い訳ではない。もっと他の方法を考えれば良かったと今は思う。

このままでは、俺はもしかしたらアイツ以外を――

「何迷ってるんだ。俺は……」

いかん、いかん何を考えているんだ。こんな考えでは、次の戦いがあった時に負けてしまう。

『エインさん、どうかしましたか？』

頭の中にサファイアの声が響いてきた。緊急時以外は魔力節約の為に眠っていてもらっている。本当は起きていてもらった方がいいんだけどな。

「何だ。起きたのか、サファイア。いや、俺は何時もどおりだが」

俺はサファイアに心配させないように平然を答えた。本当は悩んでいるけどね。

『あ、はい。戦いも終わったようですし、お話しようと思って……ごめんなさい。エインさんも今はそんな気分じゃないですよね……』

少し落ち込んだ口調に変わった。まぁ、辺りに人気配がないから

大丈夫だと思うけどな。実は俺としても、話でもして気分転換したい位だ。
「別にいいよ。暇だしな」
『ほ、本当ですか！？』
サファイアの嬉しそうな顔が想像できるくらいの声だった。もしかしたら、寝ている間、結構寂しかったのかもしれないな。
『エインさん。私と出会った時の事覚えてますか？』
サファイアはいきなり昔の事を聞いてきた。
「ああ、覚えているよ。まさか、外を見たら傷だらけお前が倒れてたんだからな」
忘れもしない二年前の冬の出来事。ちょいと用事があって外に出たら、傷ついた青髪の少女が倒れていた。そんな事忘れようとしても忘れられる物では無い。
『覚えててくれたんですね！』
さっきも言ったけど、こんなインパクト特大な事忘れられる奴の方がどうかしていると思う。
「それだけじゃない。お前を追って来た奴を倒すために、俺はお前をユニゾンしたよな」
その時、俺は武器を持っていなかった。数日前にちょっとしたミスで刀を折ってしまった。
刀はすぐに修理に出し、その日に出来上ったと連絡があった。俺が刀を取りに行こうと思ったら、サファイアが倒れていた。
サファイアは遠く研究施設から一人で逃げ出してきたらしく、数分後には追っ手が来た。後から知った事だが、俺はその施設に行った事があったらしい。
俺はサファイアを見捨てる事も出来た。別にその時はサファイアと知り合いでもなければ、助けるメリットも無かった。でも、それは出来なかった。したくなかった。
『あの時は、正直とっても怖かったです。私とユニゾンした人は暴走したり、私の魔力に耐え切れなくて全員死んでしまいました……

でも、エインさんがそう言ってくれて、とっても……嬉しかったです』

最初はユニゾンしようとはしなかったが、最終的にはユニゾンし、成功した。

その後は慣れないながらもブルーウィングを使い、何とか追っ手を追い払った。

「まぁ成功したから良かったけど、今思うと、かなり無茶したと思っているよ」

もし失敗していたら、俺は死んでいただろう。しかし、していなかったとしても、多分俺は追っ手に殺されていただろう。武器を持っていない俺はそこ等辺の一般人と大差の無いくらいのレベルだからな……

『でも、エインさんがローダーでなってくれて良かったです。あの時に捕まっていたら、私はきっと処分されていたと思います。その後も、私を人間みたいに扱ってくれて――』

「サファイア。人の気配がする」

まだ会話を続けてやりたいところだが、残念だけど、ここで終わりだな。

『は、はい。分かりました』

サファイアは再び眠りについた。一体誰だろうか？

「六課を襲撃しに来た奴がいると聞いたが、まさか、本当に一人だとは……」

目の前に現れたのは濃いピンク色の髪をした二十歳の位の女性だった。俺はソイツの事を知っている。忘れられる訳が無い。

「貴様は……」

五年前に八神はやてと一緒に村を襲った剣士シグナムだった。服装は違っているが、容姿は五年前と変わっていなかった。

「まさか今度はお前とはな。まぁいい……」

俺の予想では、フェイト、または、知らない奴と思ったが、ここでシグナムと会うのは少々予想外だ。
「今度と言う事は先に行ったエリオとキャロを倒したのはお前なのか？　フリードが戻ってきたから、まさかとは思ったが……」
フリードと言うのはキャロが連れていたドラゴンの事だろうか？
もしかしたら、あの竜が俺の侵入を知らせに行ったのかもしれないな。こんな事なら、あの時に倒しておくべきだったな。
「ああ、そうだ。安心してくれ。少し眠ってもらっているだけだ」
「そうか……でお前の目的は何だ？」
目的？　そんなもの言うまでも無い。分かっているくせに……
「八神はやてを殺す事だ」
「機動六課に恨みでもあるのか？　それとも、誰かの差し金か？」
俺は別に六課とか言う組織に恨みがある訳でも、誰かに頼まれてここに来た訳では無い。この口ぶりからすると、もしかして――
「俺の顔を忘れたのか！？」
眼鏡を外し、シグナムの方を真っ直ぐに見た。あの時は眼鏡を掛けていなかったから、分からなかったのかもしれないしな。
「いや、初めて見る顔だが、どうかしたのか」
シグナムは不思議そうな顔でそういった。そうか、そういう事か……
「……お前らにとって俺は忘れ去られるほどの存在って訳か。俺はお前らの事を忘れる事は出来なかった。なのに、お前はっ！」
俺もあまり短気では無いが、これには流石に堪忍袋の緒が切れた。
「いや、お前が何を言っているのかよく分からないのだが、一体何があった？」
まだ白を切るつもりか。何処まで人をコケにすれば気が済むんだ！！
「なら、思い出させてやる！　五年前の今日、お前と八神はやてが俺の住んでいた村を氷漬けにし、村人を殺された！　俺はお前と戦ったが結局負け、大切な人を……だから、俺はお前らを許す訳には

行かない！！」
　その後も色々と辛いことはあった。寧ろ、この後が本当の地獄だった。
「そうか……そんな事があったのか。だが、それは、はやてのやった事ではない。なぜなら、五年前の今日はミッドチルダ北部臨海第八空港の火災があ――」
「もうお前の言葉は信じないし、これ以上お前と話す事は無い」
　俺は再び眼鏡を掛け、ブルーウィングを鞘から抜いた。
「言っても分からんか……それに、そちらもやる気みたいだしな。レヴァンティン、セットアップ！」
『Ｓｅｔ　ｕｐ！』
　シグナムもデバイスをセットアップした。服装はあの時と同じ騎士をモチーフした服。そして、手には大きな剣レヴァンティンを持っていた。
「エイン・ウィンゲル。シグナム、お前を抹殺する！」
　本来は殺すつもりは無かったが、気が変わった。
「剣の騎士シグナムと炎の魔剣レヴァンティン参る！！」
　今回はただ倒すだけでは無い。確実に仕留める。

「くっ……中々やるな」
　俺はブルーウィングで切りかかった。エリオの時は手の内を調べていたのと、魔力節約の為、最初から全力では戦わなかった。
「言っただろ。殺す気で行くと」
　それに今回は殺さないようする必要は無い。だから、今出せる本気の力で戦える。それに、俺はシグナムとは一度戦った事がある。よほどの事が無い限りは大丈夫だ。
「レヴァンティンカートリッジロード」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』
　シグナムはレヴァンティンにカートリッジをロードした。来るの

か！？　あの技が。
「はあぁ！！」
俺の予想とは違い、シグナムはレヴァンティンで切りつけてきた。だが――
「当たらなければ問題は無い」
前の時もそうだったが、シグナムの攻撃は確か当たればタダでは済まない。だが、スピードはそれほど脅威ではない。スピードの面ではエリオの方が速い。
その後、俺はシグナムの斬撃を回避しつつ、その隙を突いて攻撃をしていった。
「建物内でこの技は使いたくなかったが……仕方が無い。レヴァンティン！」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ！！』
やはり、使ってきたか。だが、俺はこの瞬間を待っていた。
「ブルーウィング。ウィンドアクセラレイション」
『加速開始』
俺は薄い風の膜を作り、一気に加速した。目標は通路の隙間。あそこに入り込めば……
「頼む、間に合ってくれ！」
策は考えたが、成功するかは、また別の問題である。
『加速終了』
俺は無事に目的の場所までたどり着くことが出来た。辺りには砂煙が舞い散り視界は悪くなった。この状況ならシグナムも俺の安否を確認する事は出来ないだろう。
「ブルーウィングバスタモード」
『モードチェンジ承認。バスターモードへと移行』
俺がそう言うと刀だったブルーウィングが大型ライフルの形状に変わった。
「シュート」
俺はシグナムのいる位置を狙って、引き金を引いた。その瞬間、

ブルーウィングから銃口から魔力で作られた弾丸が発射された。
「何っ！？」
弾丸はシグナムの頬をかすった。その部分からは鮮血が滴り落ちた。
「ちっ、頭を狙うつもりだったのにな、やはり、射撃は難しい」
剣術の練習は前からやっていたから、得意ではあるが、銃の練習はサファイアと出会って少しして始めたから、百発百中とはいかないか……
「まさが、デバイスが銃になるとは予想外が。だが、いいのか？そんな所にいて」
確かにこの位置では格好の的になってしまうだろう。しかし、逆に連結刃の動きは真っ直ぐにしか動かせない。自由自在に動くよりは遥かに避けやすい。
「別に問題は無い。さぁ来いよ！　俺は逃げも隠れもしない」
連結刃は確かに厄介ではあるが、一つ弱点がある。それは、剣での防御が出来ない事だ。万が一、鞘で防がれる事を考えても、あれなら――
「その余裕からすると、何か考えがあるようだな。なら、こちらも全力で答えなければ、ベルカの騎士の名が廃る。行くぞレヴァンティン！」
『Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ！！』
シグナムはレヴァンティンに鞘をくっ付けて弓を作った。連結刃だけで無く、弓にもなるのか！？
「疾風――」
ブルーウィングを刀形態に変え、シグナム目掛けて一直線に走った。しかし、少しの遅れが、相手に時間を与えてしまった。
シグナムはレヴァンティンに二本のカートリッジをロードした。
「翔けよ。隼」
『Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ！！』
レヴァンティンから放たれた弓は俺を目掛けて飛んできた。隙間

に入ってしまった以上、回避は不可能。それに、俺は防御魔法を使えない。

「くそっ！　ここまでか！！」

弓は俺に当たった瞬間に爆発し、その衝撃で俺は外へと放り出された。

3章　過去の誓い（後編）（前書き）

何とか、期限内に完成させる事が出来ました。

3章　過去の誓い（後編）

俺は騎士団によって病院に運ばれた。あそこで助けて貰えなければ、俺は確実に死んでいただろう。しかし、中には俺の魔力無効化の力を手に入れようと、俺を実験動物の様に扱おうとしていた奴もいた。それに、俺の事を快く思っていない奴も多かったしな。

一番辛かったのは、もう一人生き残った、ナタリーの妹のアルシアとのトラブルだった。その時のアイツは姉が死んだショックで精神が不安定になっていて、よく俺につかかってきた。日を追う後に内容はどんどん過激になっていき、最終的には俺を殺そうとしてきた。

俺は色々な事に耐えられ無くなり、病院を抜け出した。今思うと、情け無い話だ。辛いのは俺だけでは無いのに……

「俺は一体……」

確か爆発に巻き込まれ、外へ吹き飛ばされた筈だが……それにしてもおかしい。アレだけの高さ（二十m位）から落ちて無事なだけでも驚きなのに、擦り傷一つ無いのは不自然だ。一体何が――

「エインさん。起きたんですね」

サファイアは俺の方を振り返って、嬉しそうな顔で言った。少し息が荒いみたいだが、一体どうしたんだろうか？

「余所見をしているとは、随分と余裕だな」

シグナムはサファイアを切りつけてきた。サファイアはその斬撃を青色の魔方陣で防いだ。まさか、サファイアはシグナムと戦っているのか！？

「サファイアもしかして、俺が気絶している間ずっとアイツと戦っていたのか？　それと俺が無傷だったのはお前が……」

もし今言ったものが本当ならこれはまずいな……

「あ、はい。でも、ほんの十分程度です。後、エインさんが怪我してないのは、落下した時にユニゾンを解除して、私が魔術で……」
ほんの十分って……シグナム相手にそれはかなりキツくないか！？　まぁ、話は変わるが、サファイアが助けてくれたなら無傷なのも納得できる。
「すまない……俺のミスでお前に戦わせてしまって。ここからは俺一人でやる。お前は休んでいてくれ」
サファイアもさっきの戦いとかで魔力を消費しただろうし、休めば少しは魔力も回復するだろう。それに、サファイアが戦っているのも、俺のミスのせいだ。俺が挽回しなくてどうする？
多分、シグナム相手ならデバイスを使わなくても、本気で行けば何とかなるだろう。ただ、空を飛ばれると厄介ではあるが……シグナムは飛べるのであろうか、そこが一番重要な点だ。
「デバイス無しとは……ベルカの騎士も舐められた物だ」
まぁ、普通ならそう思うだろうな。だけど、戦って後悔するのはお前の方だ！
「エ、エインさん、それはまだ……」
「なら試してみるか？」
俺はサファイアの言葉を遮って言った。俺にはあの能力がある。防御魔法は無意味だ。ただ、あっちの攻撃が当たればこっちも終わりだけどな。それに俺の能力を見ればシグナムも俺の事を思い出すだろうしな。
「ブルーウィング。俺の――」
俺がブルーウィングを呼ぼうとした瞬間、何かが高速で飛んできた。
「シグナム！　何なんだよ。この状況はっ！！」
飛んできたのは、三十ｃｍ位の濃い赤色の髪をした少女？がだった。その少女は妖精に似た容姿をしている。どことなくサファイアに似ている気がする。
「アギト！？　どうしてお前がここに……」

この口ぶりからすると、コイツはシグナムの仲間なのかもしれないな。予定は変更し、少し様子を見た方がよさそうだな。
「え！？　どうしてって、今結構ヤバイ状況なんだろ？　聖王教会も正体不明の敵に襲われてるし、まぁ、そっちの方はスターズの奴らが何とかしてくれるさ！　でも、六課本部も大丈夫かと思って駆けつけたんだよ！　何でか知らないけど、そっちと通信が取れなかったから心配で……あ、でも、まだ隔離施設から出れるのは後になるだろうけど、今回は事態が事態だけあって特別にってギンガが許可してくれたんだ」
なるほどな。他の場所も襲撃を受けている訳か。アギトの話を聞くからには、もしかしたら、この建物事態の警備は何時もと比べれば、手薄って事なのか？　後、気になるのは、連絡が取れないって所だ。俺はそんな細工をした覚えは無いし、サファイアはそんな事出来ない。聖王教会とやらを襲撃してる奴がこっちにも何か細工したのか……
まぁそんな事はどうでもいいがな。俺は俺自身の目的を達成するまでだ。
「アギト。少しお喋りが過ぎるぞ。目の前に敵がいる」
正直こちらとしては、非常に有難い情報だ。
「情報提供感謝する。これで、こっちも本気でやれそうだ」
多分、残りは三人。まだ魔力を使っても大丈夫みたいだな。
「はぁ？　あんたみたいなヘナチョコメガネがシグナムに勝てる訳無いじゃん！　ユニゾンデバイスのアギト様が来たんだ。あんたなんかケチョンケチョンだ」
「アギト。あまりコイツを甘く見ると痛い目を見るぞ」
サファイアと似た感じの正体は、アギトもユニゾンデバイスだったからか、こっちの世界の奴は小型状態が普通なのであろうか？
まぁどうでもいい事だが。
「さて、行くぞ。サファイア」
「あ。はい。それに、アギトさん！　エインさんはへなちょこ眼鏡

なんかじゃありませんよ。私たちが勝った、その言葉取り消してください！！」
サファイアが珍しく強気だ。同じユニゾンデバイス同士対抗意識でもあるのか？
「はっ、上等じゃねぇか！　どっちが上か白黒付けようじゃんかよ！！　烈火の剣精アギト。この力あんたに託す！！」
「お前とのユニゾンか……久しいな。こんな形でなければ心躍る戦いになったであろうが……」
アギトの力は未知数だが、慎重に行きたいところだが、タイムロスも結構あるし、ここは――
「サファイア。時間が無い。ここはお前の力使わせてもらう！」
「行きましょうエインさん。蒼穹の翼サファイア。全力で力を貸します！」
４人は同じタイミングに声を出した。
「「「「ユニゾンイン！」」」」
シグナムは、髪はオレンジ色になり、背中には炎で作られた四枚の羽がある姿になった。
「来い！　ブルーウィング」
俺は空間の裂け目から出てきたブルーウィングをキャッチした。
「セットアップ。バスターモード」
『マスター認識。ユニゾン確認。ブルーウィング・バスターモードセットアップ』
俺の服装は前回と同じくマントを羽織っている。ただ、外見はシグナムとは違い、一切変わってはいない。武器は前の戦いで使った大型ライフルを最初から使う。
「さて、行くか」
『はい。エインさん』
俺は眼鏡を外し、マントの裏のポケットにしまった。サファイアが起きているなら、これは不要だ。

「さっきより射撃の精度が上がっている……」
前の戦いでは狙いが大きく外れてしまったが、今回は大体狙い通りの位置に当たっている。これも、サファイアのお陰だ。
「当たってはいるが、弾かれる事が多いな」
『そうですね。あっちもユニゾンしてるから、パワーアップしてい てもおかしくはありません』
サファイアの言うとおり、シグナムもアギトとユニゾンしている。全体的に強くなっていて当然だ。流石に、ウィンドカートリッジでは厳しいか……
『シグナム。相手の攻撃はヘナチョコだ！　一気に接近して決めちゃおうよ！！』
「アギト。接近は禁物だ！　あれで行くぞ」
『え！？　でも、シグナムなら行けるって！！』
「残念だが、剣術では私はアイツに負けている。きっと、アイツは今後の事も考えて、手を温存しているだろうな」
やはり、ばれていたか。隠し通せるとは思っていなかったが、まぁ、別に知られたところで問題は無い。
『なら、了解だ！　シグナム』
シグナムの周りから火の玉が現れ、俺の方へと飛んできた。あれだけの量をどう対処する……
『大丈夫です。エインさん。私たちならいけます！』
そうだよな。一人の時では不可能だったかもしれないけど、サファイアと一緒なら……
「ブルーウィングガンモード」
『モードチェンジ承認。ガンモードへと移行』
ブルーウィングの形状は変わり、二丁の拳銃になった。流石にバスターではあの数を全て打ち落とすのは無理だからな。だから、ここは連射性に優れたガンモードを使う。
「全て、撃ち落とす！」

俺は一つ一つ、確実に火の玉を拳銃形態のブルーウィングで撃ち、消滅させた。
『ウソだろ……全部落とされるなんて』
「これには私も驚いている。アギト。アレを使うぞ」
接近戦を挑んでこない。まさか、あの弓を使うつもりだろうか？
あの技は一度見たから、対策は可能だ。だが、しかし……
「サファイア、万が一の場合は頼むぞ」
『分かりました。エインさん』
さて、どう来る。さっきの事もあるし、最悪の事態は想定しておく必要はある。
『たぎれ。炎熱！　烈火刃！！』
レヴァンティンが炎に包まれた。さっきの戦いでは使われなかったが、これはアギトの力なのか？
「行くぞ！　レヴァンティン」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ！！』
シグナムは連結刃形態を使ってきたか。だが、これは逆にチャンスにもなる。しかし、一体何をしようと言うのだ。
「剣閃烈火」
魔力の大きな増大を感じる。さっきの判断は間違いだ。今は攻めるタイミングではない。
「サファイア。魔法障壁を」
『了解しました。障壁展開します！』
これを防ぎきった後、一気に決めれば――
『「火龍一閃！」』
シグナムは炎を纏ったレヴァンティンを大きく振りかぶり、叩きつけるように振り下ろした。
「ブルーウィング。ブレイドモード！」
俺は咄嗟にブルーウィングを刀形態に変え、受け止めた。それにしても何て威力だ。魔法障壁を四重に展開し、ブルーウィングで防いでも、体中傷だらけだ。マントはボロボロになり、もう使い物に

ならないだろう。それに、防いだ衝撃でブルーウィングの刃の部分が完全に砕けてしまった。もう修復は来ないだろう。これは予想外だ。しかし……

「火龍一閃さえも受け止めるか……だが、そのデバイスではもう戦えまい」

『アイツ一体何者なんだ……でも、もうおしまいみたいだな』

シグナムは連結刃を元に戻しつつ、そう言った。確かにこのままでは戦い無いと思われるだろうな。

「いいや、まだ戦える。サファイア。アレを使う。防御は頼んだ」

『わ、分かりました』

俺はブルーウィングからウィンドカートリッジを抜き取り、胸のポケットから黄色のカートリッジを取り出した。

「ライトニングカートリッジにチェンジ。それと、ガンモードに変更する」

『ライトニングカートリッジロード確認。強襲モードへ移行。形状をガンモードに変更』

これを使う以上、長期戦は出来ない。次で確実にしとめる。

「何て、威力だ。さっきとは全然違う」

俺はブルーウィングでシグナムを連続で狙い打った。さっきは弾かれたが、今回はいけそうだ。

『シグナム。このままじゃ撃ち抜かれるぞ』

「分かっている」

バリアにも亀裂が少しずつだが、出来てきている。そろそろだな……

「バスターモードに変更」

俺はブルーウィングをバスターモードに変更した。少しガンでは力不足みたいだしな。

「出力最大。シュート！」

ブルーウィングから発射された魔力の奔流はバリアを破り、シグナムを直撃した。
「何！？　体が動かない」
ライトニングカートリッジはただ、威力が高いだけじゃ無い。当たった対象に動きを封じる事が出来る。その気になれば完全に動けなくさせる事も可能だ。ただ、その代わり、魔力消費は多くなってしまうけどな。だから、さっさと終わらせたい訳だ。
動けなくなったシグナムは浮力を失い、落下してきた。地面に接するくらいタイミングを狙い――
「ブレイドモード！」
俺はブルーウィングの形状を刀に変えた。刃の部分は魔力で生成した。あまり効率のよい方法では無いが、この際仕方ない。
「雷刃一閃」
俺は地面を蹴り、落下地点まで走った。そして、ブルーウィングでシグナムの腹部を貫いた。
シグマムは地面に倒れ、刺された部分からは血が流れ出し、地面に赤く染まった。
「シグナムはやらせない！！」
俺が止めを刺そうとすると、ユニゾンを解除したアギトが俺の前に立ちはだかった。
「邪魔をするならお前も……」
死なない程度に上手く加減すればいい。俺がブルーウィングを振り上げた瞬間――
「アギトどうしてここに……シ、シグナム大丈夫！？」
目の前に金髪の少女が現れた。この顔どこかで見た気がする。
「まだ死んではいないだろう。出来れば邪魔をしないでもらいたいが、そうは行かなそうだな。だろ？
フェイト」
「やっぱり、エインさんだったんですね……エリオから全部聞きました」

事はこっちの事もある程度は知っている訳か。シグナムの時に使ったのも含めて、残された手も大分少なくなって来た。それにサファイアの魔力もかなり消費したし……
「アギトは医療班に連絡をお願い。あと、シャマルにも」
フェイトが着てしまった以上、シグナムを殺すのは無理みたいだな。
「分かった。でも、フェイト。ソイツはめちゃくちゃ強い。気をつけろよ！」
アギトは了承し、建物の方に飛んでいった。
「さて、時間も無い事だし、始めるか」
シグナムとの戦いだけで、三十分ほど使ってしまった。予想より大幅に掛かってしまった。
「そうですね。バルディッシュ・アサルト。セットアップ」
『Ｓｅｔ　ｕｐ』
フェイトの服装は死神を思わせる黒い服装になり、手には大きな鎌の様なデバイスが握られていた。
『フェイトさんとも戦う事になっちゃいましたね』
「ああ、だが仕方が無い」
サファイアを助けてもらったり、一緒に昼飯を食べたりしたが、目的の障害となる以上、倒す以外選択肢は無い。
「場所を変えましょう。お互い本気が出せる場所に」
多分、フェイトの本当の目的は俺をシグナムから遠ざける為だろうが、まぁいい。こっちとしても、この場所では俺も全力は出せないしな。
「分かった」
俺はフェイトの後を追い、戦う場所まで向かった。これとアイツの戦いで終わりならいいのだがな。
手を温存してフェイトに勝つのは多分無理だろう。だから、俺はこの戦い出せる全ての力を出す。

3章　過去の誓い（後編）（後書き）

主人公の過去の話も書こうと思っています。
感想、誤字脱字などがありましたら、書き込みお願いします。

4章　蒼い翼（前編）（前書き）

一週間ほど予定より遅れてしまいましたが、投稿できました。

4章　蒼い翼（前編）

フェイトの後を追い着いたのは、六課本部の屋上だった。
「ここなら、お互い本気で戦えると思います」
確かにここなら周りに何もないし、周りへの被害を考える必要も少ないな。
「ああ、確かにここなら、本気で戦えそうだな」
相手は見た感じは接近戦主体。今のままでは接近戦は不利。ならば、俺は……
「ブルーウィングバスターモード」
『モードチェンジ承認。バスターモードへと移行』
俺はブルーウィングを大型のライフルの形状のバスターモードに変更した。カートリッジはシグナムの時と変えず、ライトニングのままだ。
「そのデバイス銃にもなるんですね。珍しい構造……やっぱりそのデバイスはミッドチルダで作られた物じゃ無いかも。一体何なんですか……そのデバイスは？」
フェイトが俺のデバイスを見て、不思議そうに言った。確かに、俺も戦っていて思った。ミッドチルダで作られた物と俺のデバイス明らかに違っていた。今まで見たものは、武器の形状も大きく変化はしない。それに、カートリッジも違った。俺の物はデバイスの特性を変える物。しかし、ミッド製は一体どんな意味があるのだろうか？
「このデバイスは俺のいた世界で作られた物らしいな。残念だけど俺も詳しい事は知らない」
サファイアも何にも知らないし、サファイアを追って来た奴も、失敗作としか言ってなかったし、一体何なんだろうか？　そういえば、一度だけサファイアを誘拐に来た奴もいたな。そいつの使ってたデバイスも似たような感じではあったが。まぁ気にする必要も無

いか……
「そうですか……フェイト・Ｔ・ハラオウンとバルディッシュアサルト。貴方を止めます！」
フェイトのバルディッシュを構えた。バルディッシュからは黄色の刃作られた。その姿はまさに、死神の鎌と言う言葉が良く似合う。
「悪いがそれは出来ないな。サファイア、ブルーウィング行くぞ」
『は、はい。エインさん』
『了解。マスター』
実際のところ手は何も考えていない。それにフェイトは今まで戦った魔導師の誰よりも強い。俺が全力を出しても勝てるかは分からない。だが、勝つしかない。なんとしても……

さて、今回はどう行くか。エリオの時のように、相手の手を調べてから攻めるべきか。それとも、シグナムの時のように、序盤から攻撃を積極的にしていくか……
「はぁ！！」
そんな事を考えていると、フェイトがバルディッシュで切りつけてきた。一応回避は間に合ったが、速度はエリオ以上に早い。それに空も飛べるようだ。
「これは予想以上に厄介だな。だが」
俺は空を動き回るフェイトに狙いを付けて撃った。移動パターンは何となくだが、把握は出来た。
「バルディッシュお願い」
『Ｄｅｆｅｎｓｏｒ』
フェイトの目の前に黄色の円形の魔法障壁が作られた。俺の放った弾は障壁に阻まれ消滅した。まさか、高火力のライトニングが防がれるとはな。
「速いし、硬い。一体どうすれば……」
『エインさん……』

その後も、俺は大型ライフル形態のブルーウィングでフェイトを何度も狙うが、ほぼ当たらない。当たったとしても、さっきみたいに防御魔法で弾かれる。あの時シグナムが言っていた、テスタロッサとは多分フェイトの事だろう。ついでにフェイトは空から攻撃をしてくる。射撃以外では俺は攻撃をする事は出来ない。これは非常にまずいな。幸い、こっちも一度も攻撃を受けてないが。

「ハーケン・セイバー！」

フェイトはバルディッシュを大きく振り、魔力の刃を飛ばしてきた。速度も速く、あの鋭さでは……

「ウィンドカートリッジにチェンジ。ウィンドアクセラレイション！」

『ウィンドカートリッジロード確認。高機動モードへ移行。後に、加速開始』

俺はカートリッジを変更し、一気に加速した。とは言っても、速度的にはフェイトと同じか、やや下位のレベルだが。

『加速終了』

回避には成功したみたいが、このまま守ってばかりでは始まらない。こちらとしては、そろそろ反撃していきたいところだ。

「プラズマバレット！」

『エインさん。危ない！！』

俺が気づいた時にはフェイトから六個の球状の射撃魔法は発射されていた。周りは発射された弾で包囲された状態であった。

「何っ！？」

「ファイア！」

フェイトの指示でプラズマバレットは俺を目掛けて、一斉に飛んできた。これは、絶体絶命だ。

『大丈夫です。エインさんは私が守ります！！　魔力障壁最大展開』

俺の回りを包み込むように六層の障壁が作られた。球状の射撃魔法を一つ防ぐごとに障壁は消滅し、何とか砲撃を耐えることが出来た。ただし、ダメージ全くない訳でなく、着弾時の放電の影響で、

大分体力を削られた。
「サファイア。済まない……助かった」
『い、いえ……お役に立てて、嬉しいです』
もし、当たっていたら、多分俺は負けていた。それにしても何て強さ。
「防がれた！？　なら、これで！！」
次は一体何をする気だ？　次もサファイアに守って貰う訳にも行かないし、どうする……
「プラズマランサー！！」
フェイトから放たれた、八本の魔力の槍は俺を目掛け、四方八方から飛んできた。
「ウィンドアクセラレイション！」
加速無しでは回避は無理だろう。サファイアの魔力量も気になるが、出し惜しみしている場合では無い。
「ターン！」
回避には成功したが、フェイトの言葉に反応したかのようにプラズマランサーは方向を代え、再び俺に狙いをつけ、飛んできた。
「まだだっ！」
俺は再び、ウィンドアクセラレイションで高速移動をした。しかし、プラズマランサーは再び、向きを代え、俺に襲い掛かってきた。
「くそっ、ここで終わりになのかよ！　俺の復讐はっ！！」
フェイトの放ったプラズマランサーは全て俺に直撃し、その衝撃で床に叩きつけられた。体のあちこちから血が流れ出した、出血の影響か意識も薄くなってきた。ダメなのかな？　アレだけ頑張ってきたのに……どんなに辛くても耐えてきたのに、所詮無理だったのか。二人の魔道師を倒しただけでも十分凄いよな。そうでも思わないと、今までの人生の意味が無い。でも、もう終わりだ。俺の一九年の人生はここで終了。
『エインさん。大丈夫ですか？　エインさん……しっかりして下さい！！』

『マスター！　フルドライブをお使いください。いいえ、今すぐ使ってください！！』
フルドライブ。予定では八神はやてを倒すために使う筈だったが、仕方が無いか……
「エインさん。もう止めましょう」
確かに今の状態では戦ったって、万に一つ勝てないだろうな。そう、今の状態ならな。
「……まだ終わる訳には行かない」
俺は鉛の様に重い体に鞭を打って、起き上がった。手はある。正真正銘最後の手が。
「でも、そんな体じゃ……弁解の余地はあります。私たちも全力で協力します！　だから、投降してください」
残念だが、それを聞き入れる事は出来ない。俺はまだ諦める訳には行かないからな！
「……ブルーウィング。フルドライブ」
『フルドライブ承認。リミッター解除。Wモードを起動』
俺の背中には蒼くて大きな二枚の翼が生えた。そして、俺はジャケットの胸ポケットから白色のカートリッジを取り出した。カートリッジには”ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ（ディメンジョン）”の文字が刻まれていた。
「ブルーウィング。ディメンジョンを使った場合、後何分戦える？」
『今の状態なら三分が限界です。それを超えれば、強制的にユニゾンは解除されます』
三分か。フェイト相手をこの時間で倒せるか……しかし、使わなくては勝つ事はまず不可能だろう。なら……答えは一つだな。
「ブルーウィング。ディメンジョンカートリッジロード！」
『ディメンジョンカートリッジロード確認。空間制御モードに移行』
俺はブルーウィングにディメンジョンカートリッジロードした。これも本来はアイツとの戦いに使うものだったのだが、そんな事は言っていられるほどの余裕は無い。
「恐ろしいほどに強大な魔力……そんな手を隠していたんですね」

「本来はアイツを殺すのに使う予定であったが……仕方が無い。悪いが、ここからは本気で行かせてもらう」
これが俺とサファイアとブルーウィングの本気の力。これを使う以上、時間は三分しかない。出来る限り短期間で終わらせる！

「ブルーウィング。ガンモード」
『モードチェンジ承認。ガンモードへと移行』
俺は空へと飛び、二丁の拳銃となったブルーウィングでフェイトに狙いをつけて数発ほど連続で撃った。
（サファイア、弾の制御は頼んだ）
『は、はい。分かりました』
さて、この手が上手くいくか……時間制限がある以上、無駄な行動は敗北に繋がる。
「弾の速度はそんなに早くない……これくらいなら――」
確かに速度は無い。だが、俺の狙いは別だ。
「消えた！？」
俺の放った弾は次々と消えた。空間制御能力のあるディメンジョンカートリッジの力を使えば、この程度の事は可能だ。
「ディメンジョンバレット。ランダムシュート」
フェイトの周りに一つ一つ消えた順番に現れ、フェイトを目掛けて飛んでいた。殆どはフェイトに命中したが、数発は回避されてしまった。
「やはり全弾ヒットとは行かないか……」
変則的に出現させたのだが、避けられるとは……まぁ、これで決められるほど甘い相手だとは思っていないけどな。
「危ない所でした。それなら、私たちも！　バルディッシュカートリッジロード」
『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』
フェイトはバルディッシュに二本のカートリッジをロードした。

今までの戦いから察するに、この世界のカートリッジが魔力一時的に高める物と言うのなら、それを使わずにあれだけの力が出せるフェイトがカートリッジを使ったら、一体どれほどの力があるのか想像できない。
「トライデントスマッシャー！」
黄色色の魔方陣から強大な砲撃が発射された。砲撃は三ツ又の矛の様に別れ、俺の方へと迫って来た。この一撃で落ちる事は無いだろう。しかし、こちらにはタイムリミットがある。
（空間移動……使った場合どうなる？　ブルーウィング）
これを使うと負担がかなりあると前に聞いた事がある。今の状況使って良いかの確認は必要だ。
『一回使用するたびに稼動時間は十秒ほど減ってしまいます。後、連続で使用するとマスターの体に大きな負担が掛かりますので、ご注意を』
なるほどな。使うたびに貴重な時間を消費してしまう訳か。それに、連続使用はよほどの事が無い限り避けておいた方がよさそうだな……まだ時間は三十秒ほど経過した位だろうから……
「ブルーウィング。ディメンジョンムーブ」
『了解マスター。空間移動開始』
砲撃が当たる直前、俺の体は青色の光に包まれた。目的の座標はフェイトの背後。そこから一気に決めにかかる。
「あれ？　いない……」
移動が終了した俺はフェイトの数十メートル後ろにいた。フェイトは状況を把握できていないみたいだ。これはチャンスだな。
「ブルーウィング。ブレイドモード」
『モードチェンジ承認。ブレイドモードへと移行
俺はブルーウィングを刀へと変えた。刃は前のシグナムとの戦いで破壊されたので、魔力で生成した。そして、一気にフェイトの方へと接近していった。
「バルディッシュ。ザンバーフォーム」

『Ｚａｎｂｅｒ　Ｆｏｒｍ』
俺が切り付けようとした瞬間、バルティッシュの形状は鎌から大きな両手持ちの剣へと変わった。刃の部分は鎌の時と同じで魔力で生成されているみたいだ。そして、フェイトは大剣へと変わったバルディッシュで俺の斬撃を受け止めた。
「決まると思ったのだがな。そう上手くはいかないか……」
「負けられませんから。はやてちゃんの為にも」
残された手も、時間も、魔力も大分少なくなってきた。さて次は……
「それはこちらも同じだ。俺はアイツを仕留めなければならない。誰の為でも無い、自分自身の為に！だから……ブルーウィング。デュアルブレイドモード」
ブルーウィングは二つの刀へと変化した。刃の長さはブレイドモードの半分位。
「えっ！？　二刀流……」
俺は右に持ったブルーウィングでフェイトのバルディッシュを受け止め、左に持ったブルーウィングでフェイトを切りつけた。
「くっ……このままじゃやられる」
フェイトの腹部には大きな切り傷があった。しかし、致命傷では無い。左手での剣の扱いに慣れていないのが原因だろう。
「次で決める」
時間的には後一分三十秒程度の時間がある。しかし、出来れば早めに決めておきたい。
「……バルディッシュ行くよ」
『Ｇｅｔ　Ｓｅｔ』
この状況で一体何をする気だ？　だが、これで終わりだ。
「オーバードライブ。真ソニックフォーム」
『Ｓｏｎｉｃ　Ｄｒｉｖｅ』
俺がフェイトに止め刺そうとした瞬間――
「消えた……」

ほんの一瞬だが、黄色の光が見えた気がするが……それ以外は何が起きたかさっぱり分からない。
「ブルーウィングの刃が……」
気づくと、右の持っていたブルーウィングの刃の部分が何か鋭利な刃物で切られたように滑らかに切断されていた。それに左手と右足。そして、頬に切り傷があった。もしかして、これはフェイトが……
「やはり貴方でも、これは完全には見切れなかったみたいですね」
フェイトが俺の数十メートル手前に突如現れた。
「ああ、流石にこの速度じゃ対処は出来そうも無いな」
ほんの数秒の間に俺はフェイトに四回は切られた事になる。
「だけど、一回は防がれました。ですが……」
『Ｒｉｏｔ　Ｚａｍｂｅｒ』
バルディッシュは二つに別れ、二組の剣へと変わった。刃の長さは元と一緒。一つの時は防ぐ事は出来たみたいだが、二つとなると防げるかどうかは……
「ここからは本気です。エインさん。貴方を絶対にはやてちゃんの所には行かせない！！」
時間ももう半分以上切ってしまった。片方は刃が殆ど残っていないブルーウィングでこの状況下をどう対処する。射撃形態ではまず当てられないだろうから、このままで戦うしかない。ただ、フェイトを倒せば、後はアイツを仕留めるだけだろう。さてどうする……
『エインさん……』
「大丈夫だ。サファイア。俺は勝つ」
まだ手は完全に尽きた訳じゃない。まだ希望は一応ある。たとえ、それがどんなに小さくたって、俺は諦める訳には行かない！

4章　蒼い翼（前編）（後書き）

予想より長くなってしまったので、前後に分けることにしました。
誤字、脱字、感想などがあったらお願いします。

4章　蒼い翼（後編）（前書き）

少し早めですが、書き終えましたので投稿します。

4章　蒼い翼（後編）

「さて、頑張らないと……残り時間も半分位過ぎたし」
頬から流れ出る血を手で拭った。言うまでも無いが戦況は俺が圧倒的に不利。フェイトは人間が反応出来る速度を凌駕したスピードで攻撃をしてくる。それに、バルディッシュの刃には高圧電流が流れている。掠る程度なら問題はあまり無いが、直撃すればダメージだけで無く電流の影響で体の動きが鈍る。そんな事になれば敗北は確実だ。予想だが、フェイトは魔力の全てを速度に使っている。その分、防御は薄いはずだ。斬撃を一発でも当てれば勝てるだろう。
ただ、問題なのは俺が対魔法コーティングされたマントとブルーウィングの刃の部分をシグナムとの戦いで失っている事だ。マントの方は無くてもそれほど問題が無いとしても、刃が無いのが致命的すぎる。
速度と魔力消費量の面で考えると、ウィンドカートリッジを使いたい場面である。フルドライブの状態の今なら瞬間的速度だが、フェイトと同じ位の速度は出せるだろう。それに、ディメンジョンと比べれば、魔力の消費量も大分少ない。だが、ウィンドでは魔力で刃を生成する事は出来ない。射撃タイプを使えばいいのだが、俺の射撃の腕ではフェイトに当てる事など億に一つ無いだろう。
それに、この状況下ではライトニングカートリッジを使う意味は殆ど無い。ライトニングの動きを鈍らせる能力も意味は無い。魔力消費量も多少ライトニングの方が少ない程度。
となると、このままディメンジョンを使って戦うしか方法はなさそうだな。総合的な性能では他の二つよりも遥かに強力だ。だが、今回は万が一の為に――
（ブルーウィング。悪いがアレの準備を頼む。最悪の場合使う事になるかもしれない）

『了解。マスター』
頭をフル回転させ今後の手を考えてみたが、完璧な解決策は思いつかなかった。フェイトの魔導師としての能力があまりにも高すぎる。仕方が無いが、アレ使う事も考えざるを得ない。もちろん、使わずに済まさられるのが一番だがな。正直使いたくない。あんなもの……
もちろん、考えている間もフェイトの攻撃はあった。体感的には五秒間の間に一秒間平均九回は切りつけて来たであろう。大分慣れてきたとは言え、剣で受け止められたのは五十％位。右は殆ど成功しているのだが、逆に、左は殆ど成功していない。刃が切られたのも大きいが、何より左手での剣の扱いに慣れていないのが主な原因だ。せめてもの救いは直撃が今のところ無い事だ。
「真ソニックを使ってもまだ立っている。あれだけの攻撃を半分は受け止められた……エインさんやっぱり貴方は強い。今まで戦ってきた中でも上位に入る位に」
フェイトが俺の五十mほど前に現れた。微かながら息の乱れがある。一応、反撃のチャンスではあるが、気づかれてしまったら俺があの剣の餌食になる可能性が。
「いや、そんな事は無い。剣の腕に少し自信があるだけさ」
俺もあの事件があったから、あの人に剣を教えてもらったのだと思う。一つの約束を守る事を条件にな……あの事件が無ければ、俺は元の世界でぐーたらと無気力に毎日を生きていたと思う。
「エリオとキャロ。そして、シグナムを倒した後でこれだけ戦えるのだから凄いです。でも、私だってみんなを傷付けた、傷付けようとする人を許すことは出来ません！！」
フェイトの顔は少し怒った感じの顔になった。恨みを買うのは仕方の無い事。そんな事を気にしていたら、復讐など出来ない。
「確かに俺はそいつ等を斬って来た。それは変えようの無い事実だ。だが、復讐の邪魔をする以上俺は、たとえ誰であろうと倒して行くしかない。それが子供であろうと、優しい人であってもな……」

俺は虚空を右に持ったブルーウィングで横に一閃した。傍から見れば意味の無い行動に見えるが、もちろん意味はある。
「えっ！？」
右手に持ったバルディッシュは地面へと落下し、鈍い金属音が響いた。フェイトの右手の甲は手袋ごと、滑らかに切り裂かれていた。傷口からは血が流れ出した。それに気づいたフェイトは苦悶の表情を浮かべた。
「少し深くまで斬り過ぎてしまったか……だが、悪くは思わないでくれ。こっちも後が無い」
力を入れすぎれば、最悪手を切断してしまったかもしれない。弱すぎれば、傷をつけるだけで終わっていた。デバイスを使って戦う事も余り多くは無いのだが、ディメンジョンを実戦で使うのはこれが二回目。完璧に使いこなすのは流石に無理そうだな。
「その能力は一体……まだそんな手を隠していたなんて……」
「悪いが、教える訳には行かないな」
当たり前だが、敵にこちらの情報を教えることなど出来る訳が無い。ちなみに、さっきの原理は目の前を斬ったのでは無くフェイトの右手の甲の部分の空間を切り裂いた。だから、離れていても大丈夫だし、何であろうと等しく切る事が出来る訳だ。
「もう後が無い。でも、私は負けられない……バルディッシュ・ハーケンフォームでお願い！！」
『Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ』
バルディッシュは鎌の形へと姿を変えた。フェイトはそれを右手だけで持っていた。
「一体何をする気だ？」
相手が行動を起こす前に一気に終らせに行くのが得策なのかもしれない。ただ、お互いに一撃でも攻撃を食らえばそこで決着は付いてしまうだろう。やはり、ミスが絶対に許せない俺の場合、出来る限り慎重に行くべきか。それとも――
「消えたか……」

先に相手に動かれてしまったみたいだな。多分、さっきと同じの超高速移動。速度的には常人の反応出来るだろう速度を軽く超えてるレベル。ただ、フェイトは武器を鎌に変えた。それなら、まだ防げる自信はある。

後はどうやってフェイトを倒すかだな。この高速移動は見た感じ、全く疲れない訳ではなさそうだ。しかし、俺も残り時間は一分十秒。持久勝負をするには流石に厳しすぎる。やはり、多少無茶をしてでも、一発当てるしかなさそうだな。

「ん？　今の攻撃は……」

突如、前方から魔力の刃。確かハーケン・セイバーが飛んできた。さっきの時と比べると速度は全然速くない。俺は楽々と回避をした。何か怪しい感じがする。

「今度は後ろからか！」

再び、ハーケンセイバーが飛んできた。スピードはさっきと比べるとかなり速い。今までの中で一番のスピードかもしれない。左腕を少し掠りはしたがなんとか避ける事は出来た。

「……っち、これがフェイトの本当の狙いか」

気づくと、俺の周りを六個黄色の球状の魔法弾が包囲していた。これは普通の方法では回避は不可能そうだな。なら手は――

『エインさん、私が……』

（サファイア。防御はしなくていい）

確かにサファイアの防御魔法なら防げるだろうし、稼動時間もそんなには減らないだろう。でも、着弾時に発生する電気が厄介だ。あの時はダメージを殆ど受けていなかったが、今はそのダメージでもかなり致命的だ。

『あ、ご、ごめんなさい……』

少し元気の無い感じの声になるサファイア。コイツは誰かを傷付ける事も、誰かが傷つく事も嫌な奴何だよな……分かっていたよ。

それなのに俺は……
（いや、気にしないでくれ。気持ちだけでも有難いよ）
さて、貴重な時間を消費してでもこの状況を突破するしかなさそうだな。
「ブルーウィング。ディメンジョンムーブ」
『了解。空間移動開始』
相手が何処にいるか分からない以上、移動先は正直そこまで気にする必要は無さそうだな。ただ、これだけでは結局戦いに勝つ事は出来ない。手もまだ見つからないし……
「さて、本当にどうするか……」
このままでは、最初みたいに防戦一方に後戻りだ。そんな事には絶対になる訳には行かない！
「今度は雷の槍か！？」
俺は移動完了したと同時に、魔力の槍プラズマランサーが俺に襲いかかってきた。数は三十本近くある。八本の時でも苦戦したのに、この数など対処出来る訳が無い。
「……仕方ない。ブルーウィング。もう一度ディメンジョンムーブだ」
体に負担が掛かってしまうのはしょうが無いと思うしかない。使わなければ、避ける事は出来ない。
『……了解。空間移動開始』
今度は適当な位置では無く、あの槍から出来るだけ遠くに移動する。ただ、あの槍には対象を追尾する能力があるみたいだから移動後一気に対処するしか方法は無さそうだな。
「やはり、追って来たか」
移動が終わると、予想通り三十本の槍全てが俺を目掛け進路を変更した。槍と俺との距離はまだ大分離れている。
「うっ……」
口の中に血の味がした。口内が少し切れて、出血した訳では無さそうだ。流石に量が多すぎるし、少し酸味もする。消化器でも痛め

てしまったのか？　腹部にも激痛が走るし……もう連続空間移動は出来そうも無い。ここで倒れる訳には行かないからな。
（一応聞くが、アレ全てを打ち落としたい場合、どれ位魔力を消費する）
俺は血を吐き出し、ブルーウィングに尋ねた。多分残り時間は四十秒程度。大部余裕も無くなって来た。時間的にも、体力的にも。
『時間で換算すると約二十五秒ほどです。後、術者にもダメージを負わす事は可能です。ただ、これはこの戦いでは一度しか使えません。時間に関係なく』
この方法を使えば残り時間十五秒。しかし、フェイトにもダメージを与える事が出来るらしい。倒す為の手が思いつかなかった以上、これを使うしか無さそうだな。
『エ、エインさん……あ、あの……』
突然、サファイアの声が脳に響いてきた。
（どうした？　サファイア）
『いえ……何でもありません……』
本当にどうしたんだろうか？　気になるけど、今は戦いに集中しないとな。
（分かった。その手で行く。どうすればいい？）
『了解。オーバードライブモード起動。範囲指定。ブレイドモードにチェンジ。マスターそのまま目の前をお切り下さい』
ブルーウィングの形状は一本の刀へと変わった。刃の部分は少しだけだが長くなっている。何だか良く分からないが、目の前を斬ればいい訳だな。
『対象選択。虚空切斬』
俺が斬り終えると次の瞬間、全ての槍が半分に切り裂かれた。そして、消滅した。一体どういう原理かは知らないが、助かった事にはなるかな？　フェイトがどうなったかはまだ分からないが……
『なお、さっき原理は指定した空間。今回の場合は三十の槍と術者。その空間の部分を切断する物です。対象の存在する空間ですので理

論的には回避は不可能です』
なるほどな。一度しか使えない事を考えても、これは異常なほどの性能だ。また使う機会があれば、本当に本当の最後の手として考えておく必要がありそうだな。時間も後僅かしか無い。次の一撃で確実に決めなければならない。決まらなければ……

「やった……のか？」
俺は建物の屋上へと降りた。さっきの攻撃で魔力を消費しすぎたのか、背中の翼が小さくなっていた。
「もう真ソニックは使えそうに無い……それに、この足の傷も……」
フェイトがふらふらと降りてきた。かなり疲れている様子で、左足には大きな切り傷があった。勝負に出るなら今がチャンスだ。
「疾風――」
「ライトニングバインド」
俺が攻撃を仕掛けようとした瞬間、右手の近くに黄色の円形の魔本陣が出現した。その後、手首の辺りに黄色の少し電気を帯びた輪っかで動きを封じられた。同じように左手、両足も拘束された。
「くそっ！　動けない……」
これはとても破壊出来そうにない。動けない以上、攻撃のする事は出来ない。射撃モードで攻撃をしてもいいが、身動きが取れない状態では圧倒的に不利だ。多分先にやられるのは俺の方だろうし。
「貴方のデバイスもとっくに限界を超えてます。それに貴方だって……だからもうやめましょう？」
確かに自分でも立っていられるのが不思議だと思う。魔導師三人の相手し、吐血もしたしな。でも、俺は最後まで戦う。
「いや、まだ時間はある！」
『残……り稼働時間……五秒』
確かにフェイトの言う通り、ブルーウィングの調子はよくない。やはり、虚空切斬がブルーウィングに大きな負担を掛けてしまった

みたいだ。待てよ！　もしかしたらサファイアの方にも――
『私は大丈夫ですからっ！　エインさんは戦いの方に集中してください！！』
サファイアの言う通りだ。戦いの時に別の事を考えるなんて……
でも、やっぱり不安は拭い切れない。
『残リ……稼動ジカン……三ビョウ……』
何とか抜け出そうと体を動かしてみるが、外れる気配は無い。カウントをしていく度にどブルーウィングの音声どんどん可笑しくなっていく。
『ノコリ……カドウジカン……一ビョウ』
結局抜け出せなかった……もう残された手は――
『ユニゾンカイジョシ……マス』
ユニゾンが解けてたサファイアは床へと倒れ、ブルーウィングは空へ飛んでいった。床には一本の刀が置いてあった。この輪っかが魔力で出来ているならば……
「青雲……抜刀」
黄色の輪っかはユニゾンが解除されるとすぐに消滅した。俺は眼鏡を掛け、愛刀「青雲」を拾い、鞘から抜いた。青雲は普通の刀と比べるとかなり軽く、刀身部分がうっすらと青く光っている。
結局、俺は俺自身を生かしてしまったこの呪われた力に頼ってしまった訳か……使いたくはなかったのに……でも、これなら今の状態のフェイトを倒す事は難しく無いのも事実。
「え……どうして、バインドが！？」
それは俺が体に触れている魔力を完全に消滅させてしまうからだ。俺の意思に関係なく。なお、俺がデバイスを使えるのは、サファイアが俺の魔力無効化を無効化してくれるから。サファイアの魔力が無なれば、当然ユニゾンは解除される。
「それは教える訳には行かない」
俺はフェイトの方に向かって全力で走った。真ソニックほどの速度で無ければ見切れるし、斬れる。

「バルディッシュ！」
『Ｄｅｆｅｎｓｏｒ　Ｐｌｕｓ』
フェイトは二本のカートリッジをロードし、膜状のバリアーを生成した。だが、そんな物あっても無くても俺にとっては同じようなものだ。しかし、アイツは俺のこの力を知っている筈。なら、フェイトが知らないはずが無いのに何故……
「うそ……バリアーが……」
俺は青雲でバリアーを斬り裂いた。切り裂いた箇所から、亀裂が入っていき、完全に消滅した。あの時もそうだったが、魔力無効化は持っている武器にも作用する。
「これで終わりだ」
青雲を大きく振り上げ、バルディッシュを切断した。これでフェイトはデバイスを使う事はもう出来ないだろう。もう勝負は決まったも同然だ。

4章　蒼い翼（後編）（後書き）

出来るがきり更新ペース速くしていこうと思います
誤字、脱字、感想などありましたらお願いします。

5章　復讐の意味（前書き）

今回は原作キャラの出番が少し少なめになってしまいました。

5章　復讐の意味

「もう私には貴方を止める力は……ありません」
フェイトはその場へと崩れ落ちた。目から涙が流れていた。
「確かに俺は結果的に勝った。だが、純粋に魔導師としての戦いをしていたなら、俺は確実に負けていただろう。本来こんな勝ち方はしたくは無かった。この力のせいで俺は……」
俺は青雲を鞘へとしまった。もし、俺が普通の人間だったら、ブルーウィングの稼動時間が終わった瞬間に敗北が確定していただろう。
「やっぱり行くのですね？」
俺が下へと降りようと階段を目指そうと歩き出した時、フェイトが話しかけて来た。
「……ああ」
俺はそれだけ言って再び歩き出そうとした瞬間――
「やっぱり私はエインさんを許せない。皆を傷付けた、はやてちゃんの命を奪おうとしている貴方を！過去に何があったかは詳しくは知らないけど、復讐なんて事は絶対に間違ってる！！」
フェイトは涙を拭って俺を睨みつけて言った。フェイトの瞳は憎しみと悲しみに満ちているような気がした。憎しみは分かるのだが、何故悲しみを感じるのだろうか……
「勿論、俺だって自分がやって来た事が許されるとは思っていない。成功しようと、失敗しようと、俺はその報いを受ける。その結果、俺はどうなってもいいさ……」
復讐のチャンスは多分今回一度きり。どっちの結果にしろ、俺は最悪処刑されてもおかしくは無いだろうな。サファイアも俺に協力してしまった以上、何らかの処罰を受けるはず。
俺はどんな結果だろう構わないが、サファイアは出来る事なら何も罰を受けずに、普通の女の子みたいにこれからも生きていって欲

しい。とっても虫のいい話だとは思うが、これが俺の最後の願いだからな。それに、俺のしてやれる最後の事だと思うし……

「エインさん。やっぱり……でも貴方にはサファイアちゃんもいる。なら、こんな考えになる筈は絶対に……でも、それならあの無茶な戦い方も――」

俺が喋っているトーンや表情で気づかれてしまったのか、フェイトが複雑な、いや、何かに気づいていてしまったような表情をして話し始めた。俺の本当の考えばれてしまったのか……サファイアに知られるよりはまだマシではあるが……しかし、下手に何か言ったところで余計に疑われるだけだ。ここはさっさとこの場を立ち去るのが最善の手だろう。

「さて、そろそろ行くか。ブルーウィング。サファイアの事を頼んだ」

『了解しました。マスター』

ブルーウィングの調子も大分よくなったみたいだな。これで安心して行ける。

「エインさんまだ話は終わってません」

「……」

俺は逃げるように屋上から出て行った。後は最後の仕上げをするだけだ。これで何もかも終わりだ。そう何もかも……

屋上を後にした俺はひたすらアイツを探して、あちこちを探し回った。一体何処にいる。早くアイツを……早く。

「やはり貴方はここまでたどり着きましたか。まぁ、予想通りですけどね」

数分ほど歩くと、目の前に赤い仮面を付け、全身を黒いローブで覆い隠している男が立っていた。声から判断すると多分男だろう。腰の右側に赤い鞘の刀が差していた。

「やはりとはどういう意味だ？　まさかお前も俺の邪魔をする気か」

俺は青雲を鞘から抜こうとした。正直な所アイツ以外と戦うのは辛いものがある。アイツとなら全てを賭けてでも戦える。しかし、それ以外の相手にそんな事は出来ない。それに、この仮面の男の技量も分からない以上、戦う事はできれば避けたい。

「いえ、私は貴方の復讐を邪魔するつもりはありません。私はやるべき事は終わりしたしね。それに、今の私としては今の貴方と戦うのは得策ではありませんしね」

仮面の男の手には紫色の小さな結晶が握られていた。つまり、この男の目的は紫の結晶の回収。俺が警備の魔導師と主力の三人を倒したから、警備はほぼ無いに等しいレベルだろう。なら、他に誰かが侵入してきてもおかしくは無い。おかしくは無いのだが、この違和感は何だろうか。まるで仮面の男は俺がここを襲撃し、ここまで辿り着く事は知っていたかのような……

「それは一体……後、お前は何者だ？」

急ぎたい気持ちもあるが、あの結晶の事がどうも引っ掛かる。考えすぎかもしれないが、五年前に八神はやてが持っていた赤い結晶と似た雰囲気がある。それに、この仮面の男も怪しい。正体を隠すような服装もだが、言葉の一つ一つに何か含みがある気がする。

「貴方が知る必要はありません。それに、こんな所で時間を使っている場合では無いのではありませんか？　貴方には今日やらなければならない事があるのではないのですか？」

確かにこの仮面の男の言うとおり、俺には八神はやてを殺すという目的がある。今日は五年前に村を襲われ日。何としてもこの日に終わらせたい。だが、この男を放っておいていいのだろうか？　確かに今は俺の妨げにはならない。だがもしかしたら、いつかこの男と戦う事になるかもしれないな。何となくだが……

「悪いが、そろそろ行かせてもらう。時間もなくなってきたしな」

時間もあんまり無いのに俺は何をしているんだ。もしかしたら、俺を少し足止めする事がコイツの狙いかもしれないな。しかし、何の為に……考えすぎか。

「それは申し訳ありませんでした。最後に一つだけ言わせてもらってもいいでしょうか？」
俺が仮面の男の横を通り過ぎようとした時にいきなり話しかけてきた。
「貴方は貴方の進みたい道を進んでください。誰かの為でなく自分の為に」
「それはどういう意味だ？」
俺は立ち止まった。この仮面の男は何を考えているか想像できない。だが、今はそんな事を考えている場合ではないのも事実だが……
「貴方がこの世界に来る事は想定していました。その結果、良くも悪くも貴方が命を落とす事になっても……」
俺は後ろから微かに聞こえたような気がするが気にせず進んでいった。

「さて、無駄な時間を使ってしまったし、急ぐか……」
再び俺は数分ほど建物を歩き、ドアを開けた。そして――
「貴方がもしかして今回の……」
ドアを開けた先には、茶色の髪をした短髪の少女が机に座っていた。あの時とは服装は違うが、この少女の顔を俺は一日たりとも忘れた事は無い。ついに会えた……どれだけそれを待ち望んだか……
……
「やっと……やっと見つけた……八神はやてっ！！」
村を氷漬けにし、ナタリーの命を奪い、俺の人生を狂わせた堕天使の様な姿をしていた少女――八神はやて。後はコイツを殺せば終わる。

5章　復讐の意味（後書き）

少し何時もより短めです。
感想、誤字、脱字などありましたら、お願いします

5．5章　蒼玉の少女～伝えたい本当の思い～（前書き）

一ヶ月以上更新できませんでしたが、何とか投稿出する事が出来ました。

＊この話はエインのユニゾンデバイス「サファイア」の視点での話です。また、
この話は本編の内容に殆ど関係はありません。

5．5章　蒼玉の少女～伝えたい本当の思い～

私は今から三年位前に試作型のデバイス【ＰＶＤ００２－烈空（プロト・ヴァリアブル・デバイス）の蒼翼（そうよく）】を使用する為に必要なユニゾンデバイスとして研究所で生まれました。

八ヶ月ほど経った頃、私の前に作られた試作型のデバイスが暴走し、大きな被害を起こしてしまったので、私はその穴埋めの為、名誉挽回の為に毎日辛くて、痛い実験ばかりで心が壊れてしまいそうでした。

その後も、私は誰ともユニゾンが成功する事はありませんでした。ユニゾンした人は魔力に耐え切れなかったり、暴走したりして皆死んでしまいました。

半年位すると、ユニゾンさせられる人はみんな私を恐れ、中には泣き崩れる人や暴れ出す人もいました。そんな人たちも研究員の人に無理やり私とユニゾンさせられて……そして、私は失敗作と研究員に言われるようになりました。

私はもう限界でした。本当は誰が傷つくのはイヤなのに、私は傷つけて殺してしまう。もう私の事は失敗作と認めて処分してくれればいいのに……

同じ年の冬に研究所は誰かに襲撃されて、壊滅的は状況になりました。実験や私とのユニゾンの為に集められた人たちは誰か助けられたみたいでした。私もその混乱に紛れて研究所を抜け出しました。ですが、研究員数名が私を捕まえようと追ってきました。

私は何とか逃げ切る事が出来ました。そして、私は小さな村に辿

り着いて、小さな家の前で意識を失いました。

目を覚ますと、目の前に青色の髪をした男の人がいました。その人は眼鏡を掛けていました。とても悲しい雰囲気のする、でも、ほんの少し優しい感じ人でした。その人が手を差し伸べた瞬間、追っ手の研究員が家の前に来ました。もう逃げる気力など残っていない私はここで捕まって、あの生活に戻るのだと思いました。本当はイヤですけど、もう仕方無い事です……

でも、その人は出会って数分しか経っていない私を、失敗作で多くの人の命を奪ってしまった私を庇ってくれました。その時はとっても驚きました。でも、その人は数日前に愛用の武器が壊れてしまったそうです。

それでも、その人は私の前を退こうしないで、私を守ってくれました。しかし、研究員の一人がその人に魔法で攻撃をしました。

でも、その人に触れた瞬間、魔力の塊は一瞬で消滅しました。研究員の人はとても驚いた様子でした。でも、諦めずに研究員の一人がナイフを取り出し、その人を切り付けました。私はもう見ていられなくなって、その人に「もう、私の事はいいですから、貴方が逃げてください」と言いました。

の人は逃げようともしないで、私が一番聞きたくなかった事を言いました。もちろんその人は私とユニゾンに失敗したら死んでしまう事も知った上での言葉です。ですけど、その人は「そんな事どうでもいい。お前の力を貸してくれ」と言いました。最初は断り続けました。でも、最終的にはその人とユニゾンをしました。

奇跡が起こったのか、その人と私のユニゾンは成功しました。そして、慣れないながらもデバイスを使って追っ手を追い払いました。本当はまた失敗すると思ってとっても怖かったです。でも、今回は

成功しました。こんな私でも誰かの役に立てるのだとこの時初めて思いました。

この一件以来、私はその人の家で一緒に住まわせて貰える事になりました。

その人に出会ってからは、最初の頃はちょっと私が心を閉ざしてしまっていた時期もありましたけど、毎日がとっても、とっても楽しいです。

その人は、本当はとっても優しい人。

その人は、とっても強い人。

その人は、私の唯一のローダー。

そして、その人は、私の大好きな人。

出来る事ならいつまでも、その人と一緒にいたいです。

でも、その人は、もうすぐ遠くに行ってしまうような気がします。

本当はその人を助けてあげたい。だけど、私に何ができるのでしょうか？

……

……

やっぱり、私には何も出来そうもないです。さっきのフェイトさんとの戦いで気づいてしまった。その人は復讐が終わってしまったら――

「サファイアちゃん……大丈夫かな？」
優しい音色の声で私は目を覚ました。
「あっ、私は……」
私は自分が地面に寝ている事に気づきました。さっきの戦いの時に魔力を使いすぎてしまったのが原因だと思います。
「サファイアちゃん、やっと目を覚ましたね」
私は上半身だけ起こして声のする方を見てみると、金色の髪をした綺麗なお姉さんがいました。
「フェイトさん……」
その金髪の人はフェイトさん。キャロちゃんをぶつかってしまった私を心配してくれた、お昼ご飯を一緒に食べたとっても温かい人。でも、私たちはそのフェイトさんと戦った。そして、勝ってフェイトさんにも怪我をいっぱいさせてしまった。それに、他の人にも……
そんな私をどうしてフェイトさんは優しくしてくれるんだろう……
「どうしたの？　サファイアちゃん」
「あ、いえ、まだ起きたばかりで少し頭が……それに少し疲れてしまいました」
フェイトさんとの戦闘の時にユニゾン強制解除するほどの、いえ、それ以上の魔力を使ってしまったので、まだとっても眠いです。それに、体の方も本調子では無いです。
「サファイアちゃんとっても疲れているように見えるけど大丈夫？
一人で立てるかな？」
「あ、はい。大丈夫です。あっ！」

私が立ち上がり終わった時に体勢を崩してしまい、地面に倒れてしまいそうになったところをフェイトさん抱き抱えられました。
「大丈夫っ！？　怪我とか無い？」
「あ、ありがとうございます。フェイトさんのお陰で怪我は無さそうです」
あのまま地面に倒れていたら、きっと、とっても痛かったと思い。フェイトさんが居てくれてよかったです。
「サファイアちゃん少しお話しない？　私、さっきの戦いでちょっと疲れちゃったしね」
「えっ！？」
私が驚いた表情をすると、フェイトさんは優しげな表情で言いました。
「ごめんね。ちょっといきなりすぎて吃驚させちゃったかな。会った時からまた会えたらもっとお喋りしたいと思っていたんだけど……ダメかな？」
「い、いえ、そんな事無いです。私もお話したいですっ！」
エインさんには少し申し訳ない気もしますけど、今の私ではエインさんのお邪魔をしてしまうだけですし、それなら……

「あ、あの……え、えっと……」
お話をしようと思っても、私はあんまりエインさん以外とあまり話した事が無いので、言葉が中々出てきませんでした。
「本当にビックリしたよ。サファイアちゃんがユニゾンデバイスだったなんて」
私のなかなか話し出せない様子を見て、フェイトさんがにっこりとした顔で話しかけてきました。
「そうですか……本当はあんまり知られたくないんですけど……私もフェイトさんみたいに人間ならよかったのですけどね」
エインさんに出会えて少し自分の事を前向きに考えられるように

なりました。でも、やっぱりまだ私は自分の事を好きになれません。
「私も実はね、人間じゃ無いんだよ。ある人の遺伝子から作られた人造生命体。そのプロジェクトのコードネーム【F・A・T・E】そこから取られたのが、私の名前なんだ」
「えっ！？」
フェイトさんは少し苦笑いしながら言いました。私はあまりに驚いてしまったので、思わず大声を出してしまいました。
「後ね、ほんの少しだけどエインさんの気持ちが分かるんだ。私も昔、一人の女の子とお母さんの目的の為に何度も戦ったんだよ。本当はそれが良くない事だと知っていてもね……」
その後、フェイトさんは少し悲しそうな表情で話を続けました。
「フェイトさんにそんな過去が……」
「お母さんにもう要らないって言われて、心が壊れた私は一人の女の子のお陰で立ち直れたんだよ。初めて私と対等に、真っ直ぐ向き合ってくれた。何度も私の名前を呼んでくれた。何度も、何度もね……その女の子がいたから、今の私がいるんだと思う。その子と出会っていなければ私は……」
私はフェイトさんの話を黙って聞ききました。そして、とっても悲しい気持ちになりました。それに、フェイトさんと私は少し似ているような気がしました。とっても辛い時に誰かに助けてもらって、今の自分がいる。だから、あまり人とお話したりするのが苦手は私でもお話出来たり、一緒にお昼ご飯を食べられたのだと思います。
「わ、私もその人に会ったみたいです。でも……」
でも、それは叶う事は多分無いと思います。私たちはとても悪い事をしてしまいました。多くの人を傷つけてしまった私たちに……
「大丈夫だよ。きっと会えるよ。すぐには難しいかもしれないけど、絶対に会わせてあげるね。エインさんも……一緒にね」
「ほ、本当ですか！？」
私はその言葉をきいてとっても嬉しい気持ちになりました。でも、最後の方の反応はもしかしたら、フェイトさんも気づいているから

……
「うん。約束するよ」
フェイトさんは笑顔で言いました。私はその日がとっても、とっても楽しみです。何時になるか分かりません。もしかしたら二度と来ないかもしれませんが、そんな日が来たらいいなと思っています。

「結構お話したね。サファイアちゃん」
私はあの後も数十分ほどフェイトさんと話ました。好きな食べ物の事とか、今までの思い出とか色々な事を喋りました。
「あ、はい。とっても楽しかったです」
あんまりエインさん以外と喋らない私にとってこの体験はとっても貴重な体験だったと思います。それに、とっても楽しかったです！
「こんなタイミングで悪いんだけど……エインさんやっぱり止められないのかな？」
その後、少し静かな時間が出来て、フェイトさんが少し言いにくそうに言いました。
「そ、それは……多分無理だと思います。エインさんは復讐だけが生きる意味だと思います。どうして私を助けて、今まで一緒に居てくれたのかは分かりません。でも。きっと復讐をやめてしまったり、終わってしまったら、きっと……」
「サファイアちゃんは本当にそれでいいの？」
フェイトさんは真剣な表情をして、私を見つめました。そんな事言われても、私には……出会って少し経って、うっすらと気づいていましたが、エインさんはいるも明るく優しく私に接してくれました。だか
ら、今まで恐ろしくて、とても聞く事は出来ませんでした。
「えっ……でも、私じゃどうする事も出来ません。私なんかいなくても、エインさんはきっとフェイトさんたちを倒せたと思います。その為に五年間の殆どの時間を使ってきたんです。そんな人を止め

られる訳無いです……私だって、私だって……イヤです。絶対にイヤで……す……エインさんとお別れしたく……ありません！」

私は感情が高ぶってしまい、涙が目から溢れ出てきました。手で拭っても、また流れてきます。

「サファイアちゃん泣かないで。サファイアちゃんのエインさんへの気持ちはよく分かったから、その想いをエインさんに伝えよう。もしかしたら、エインさんも分かってくれるかもしれないよ」

フェイトさんの掛けてくれた言葉で私は落ち着きを取り戻しました。私の想いを伝える……そんな事でエインさんは……でも、伝えないよりは全然いいです。

「伝えます。私の想いを……エインさんに」

結果がどんなものでも、私は受け入れます。たとえ、その結果がどんなものであってもです。

「そろそろ、私は行くけど、サファイアちゃん立てる？」

「あ、大丈夫で――」

私が立ち上がろうとした瞬間バランスを崩し倒れそうになったところをまたフェイトさんに受け止めてもらいました。

「サファイアちゃん、本当に大丈夫なの？」

フェイトさんがとっても心配そうな顔で言いました。フェイトさんはとっても優しい人です。だから、これ以上心配させてはいけないと思います。

「はい。大丈夫ですから、フェイトさんは行って下さい。お話してくれてありがとうございました！」

私は何とか一人で立てました。少し足がふらつきますけど、手を振ってフェイトさんが屋上を出て行くのを見送りました。

「サファイアちゃん。また会おうね！」

「はいっ！」

そういって私たちはさよならの挨拶をしました。そして、フェイトさんは屋上からいなくなりました。

「何とかフェイトさんに気づかれない様にしてきましたけど、もう無理みたいです」
私の体は大きく揺らぎました。体勢を立て直す事は出来ずに地面へと倒れ込みました。実は立っているのも本当は辛かったのですけど、気づかれたくありませんでした。フェイトさんとのお話を楽しみたいと思ったからです。でも、今はすぐに直ると思います。今はですが……
「あの時使った『虚空切斬』本当は三十本の槍とフェイトさんを全部切れるほどの技ではありません。ですけど、私とブルーウィングの力を最大以上まで引き上げれば可能です。ですが――」
私は立ち上がろうとしましたけど、足に力が入りません。やっぱり影響が出てきました。
「ごめんなさい……エインさん。もうすぐ私は今までのようには……」

5．5章　蒼玉の少女～伝えたい本当の思い～（後書き）

初めて主人公以外の視点を書きましたが、変になってないといいですが。

誤字、脱字、感想などがありましたら、お願いいたします。

6章　復讐の時（前書き）

遅れてしまった分を少しでも取り戻すために投稿をします。

今回もオリジナル色が強くなってしまいしたが、お楽しみ頂ければ幸いです。

6章　復讐の時

「貴方の目的は何？　どうしてこんな事を……」
はやては立ち上がり、少し震えた口調で言った。目的？　そんなものはただ一つ。
「お前の命を奪う事だ。だが、最後に一つだけ聞きたい事がある」
俺は、はやての喉元に青雲を突きつけて言った。最後にこれだけは聞いておかなければならない。そうでないとと死んでいった人達が浮かばれない。
「い、一体なんや？」
「どうして五年前の今日に俺の住んでいる世界に来て、俺の住んでいた村を襲い、村人を全員殺した？
一応確認の為に言っておくが、時刻は夕方位。勿論忘れたとは言わせない。あまりふざけた回答なら、俺は……」
俺にとって忘れる事など出来ない出来事。俺の人生を大きく変えた事件。多くのものを失った日。理由がどうであろうと八神はやてを殺す事に変わりは無いのだがな。シグナムの様な態度を取るようならば殺すだけでは許しはしないだろうな。
「わ、私は知らない。その日の夕方はミッドチルダ北部臨海第八空港で起きた大規模火災の消火活動の手伝いをしていた。その時の記録もあるし、話し合えばきっと分かってもらえるはずや」
そういえばシグナムも火災がどうとか言ってた気がするが、そんな事はどうだっていい。最初から話し合う気など無い。ただ、俺はお前さえ殺せればそれで良い。
「……言いたい事はそれだけか？　ならもう……終わりにする」
俺は青雲を振り被った。これで俺の目的が終わる。そう、これで俺は……
「リィンもおらへんけど、仕方あらへん……」
「デバイスのセットアップなどさせない！」

はやては十字の形をした金色のペンダントを取り出した。俺はそのペンダントを青雲で一刀両断した。ペンダントは、はやての手を離れ床へと落ちた。ただし、破壊には至らなかった。セットアップされたとしても、魔力に頼った攻撃は俺には一切効かない。この呪われた力のせいでな。

「次で終わりだ」

俺は再び剣を振り被った。その瞬間、窓の外から男の声が聞こえた。

「残念だけど、そうはいかないッスよっ！」

窓を突き破り、一本の短剣の様な物が俺の右目辺りを目掛けて飛んできた。間一髪で防ぐ事が出来たが正直危なかった。下手したら右目に刺さっていただろう。俺の右目を狙ってきたって事は……考えすぎか。

俺は、はやてとの距離を一旦取り、次の攻撃を警戒した。そして、窓を突き破り一人の男が部屋に入ってきた。

「いや～危ないところッスよ。後数秒でも来るのが遅れてたら、依頼失敗で報酬無しだったッスよ」

窓を破って来た男は安堵の表情を浮かべながら言った。その男は茶色の少し長めの髪をし、瞳の色は濃い赤色。服装は闇に溶け込む様な黒色の服で、見た所武器は所持している様子は無い。頭には不思議な形の帽子の様な物を被っていた。その帽子には「忍道」と言う文字が書いてあった。

「お前は一体何者だ？」

「貴方は一体誰や？」

俺とはやてはほぼ同じタイミングに同じ様な事を黒い服装の男に聞いた。はやての様子を見る所、この男とはやては面識が無い。だが、どちらにしろ予想外の展開だ。悪い意味でな。

「俺ッスか？　俺はクラウン・シャドーフォールって名前ッス。ある人の依頼で八神はやてって言う、茶色の短い髪をした、不思議な口調の女の子を守るように言われているッス。多分、この人で当たりッスね。あっ……こう言うのって喋っちゃまずかったッスかね？」
確かにこういった情報は他人に、ましてや、敵である俺に教えていい物では無い。それにしても、クラウンと言う男はよく喋る奴だ。後、お前の口調も十分不思議だと思うがな。だが、雰囲気で察するにコイツはかなり強い。この狭い部屋で戦って勝てるのであろうか……決めるなら今か？　俺とクラウンの距離は大分離れている。なら、あの技で行くか。
「疾風一じ――」
俺がクラウン目掛けて動こうとした瞬間にクラウンは地面に何かを投げつけた。そして、部屋中は黒い煙が充満し、俺の視界を奪った。
「残念だけどその技は使わせる訳にはいかないッス。その技の特性は知っているッス！　その技、疾風一刃は相手と自分の距離が離れているほど、速度と威力の出る技。さっきの距離なら使われたら多分回避は不可能だったと思うッス」
煙の中からクラウンの声が聞こえてきた。まさかこの技の特性が完全にばれているとは……これはかなりまずい事になった。他の技の情報は知られて無いとは思うが、どうだろうか？
突如、煙の中からさっきと同じ物が二本飛んできた。一つは俺の右目を、もう一つは左足を狙って飛んできた。両方とも体に当たる事は無かったが、眼鏡の右フレーム部分を少し掠ってしまった。
「次は本気で行くッスよ！」
またクラウンの声が聞こえてきた。さて、どうする？　この視界では下手に動く訳には行かない。それに、クラウンの位置を捕らえることが困難な以上、攻撃も出来ない。はやてを狙うにも、こっちも正確な位置は分からない。それに、その途中にクラウンにやられる可能性もある。このチャンスを逃がす訳にもいかないし、まずは

視界を取り戻す事が先決だな。
「旋風衝波」
俺は青雲を思いっきり振り上げた。それによって起きた衝撃波で煙を吹き飛ばした。しかし、部屋の中に人の姿は無かった。
「一体何処へ行った」
はやてには逃げられたとしても、クラウンが居ないには少し違和感がある。俺を仕留めておくのがベストな筈だろう。依頼を遂行する以上、俺の存在は邪魔だろうしな。
「後ろがガラ空きッスよ！！」
背後からクラウンの声がした。俺は咄嗟に後ろを振り向いた。クラウンの手には小刀が握られていた。声が無かったら絶対に気づく事は無かっただろう。気配がほぼ感じられなかった。
「ちっ、流石に間に合わないか」
俺は攻撃を回避しようとした。だが、クラウンの斬撃がメガネの右レンズ部分を大きく切り裂いた。その後、俺はクラウンとの距離を空けた。
レンズが傷ついてしまい、右目はまるで霞がかかった様にぼやけている。やはり、俺の右目の事は知っていたみたいだ。まだ、左腕の事。それと。もう一つの事は知られて無いだけ、まだ良いとするか。
「まぁ、三人の魔導師を君は”魔導師”として相手をしたッスから、かーなーり疲れている筈ッス。いくら、デバイスが高性能だとしても、君はデバイスの扱いに慣れてないッスからね。そもそも、魔導師相手なら君はデバイス使わなくても負けないッス。魔力無効化の能力があるッスからね。むしろ……」
正直な事を言ってしまったら、確かに俺はデバイスを使わなくてもフェイト以外には苦戦はしなかったと思う。しかし、それは出来なかった。誰かの為に自分の力を使いたいのに、そんな願いが叶わない。寧ろ、人を傷付けてしまうそんな一人の少女サファイアと出会ってしまった。どんな形でも、俺はサファイアと一緒に居られる

時間を作ってやりたかった。そんな自己満足的な事しかしてやれない自分が情けない。そして俺はもうすぐ……

クラウンの話を聞いていたら、途端にサファイアの事が気がかりになった。自分でも矛盾している事は分かっている。だが、サファイアにもしも何かあるようならその時は……

「だけど、その能力は魔導師以外との戦いではそんな物は関係無いッス。今の君なら俺はきっと勝てると思うッス。君は万全な状態じゃ無いッスからね。それに、さっきの話の後から何か動揺しているみたいッスけど、大丈夫ッスか？　やっぱりサファイアって子の事が気になるんッスか？」

俺の様子を見て不思議に思ったのか、クラウンは心配そうな表情をした。サファイアの事まで知っているとはな。ここまで俺の情報が知られてしまっている以上、今の状況では完全に不利だ。

今、俺が使える技は使ってない物で残り一つ。ただ、その技はクラウン相手に使うようなものではない。しかし、俺の情報が何処まで知られているかを確かめる事は出来そうだ。

「仕方ない、やってみるしかなさそうだな」

俺は青雲を素早く逆手に持ち替えた。そして、持った手を左後ろへと動かした。

「その構えは確か……いや、でも、このタイミングで使うような技では無い筈ッス。一体何を考えて……」

色々な考えを張り巡らせているのか、クラウンは真剣な表情をし、一歩も動いていない。この反応からするに、クラウンはこの技の事を知っているみたいだ。

「突風砕牙」

俺は地面を蹴り、クラウン目掛けて踏み込んだ。そして、青雲で突き刺そうとした。「突風牙閃」は本来、両手を使う技。しかし、俺は五年前のシグナムとの戦いや、病院での色々な事で左腕が使い物にならなくなった。だから、独自の方法（勿論師匠にアドバイス

は貰ったりしたが）でこの技を元と余り変わらないように使う方法を考え出した。
なお、フェイトとの戦いの時、左手で剣を扱えたのは、サファイアのお陰だ。ユニゾン中は右目の視力も、左手が使えないのも回復する
そういう意味ではデバイスを使うメリットも無くは無い。ただ、その状態だと普通より多く魔力を使ってしまう。だから、エリオ戦とシグナムの前半の部分は眼鏡を掛けず戦った。後の事を考えて、魔力を温存しておきたかったからな。
しかし、俺の攻撃はクラウンにあっさりと回避されてしまった。本来、この技は堅い装甲などを貫く為の剣技。勿論、軽装なクラウン相手に使う様な技でもなく、使用後の硬直時間も長い。それに、疾風一閃ほどのスピードも無い。俺もクラウン相手に最初から直撃するとは俺も思っていない。狙いは別の所にある。あんまり使いたくは無いが仕方が無い。
「さて、次は何処から来る……」
攻撃を避けられた後、再びクラウンの気配は感じなくなった。まだ相手の行動パターンを予想するには情報が少なすぎが、来るとしたら前と同じ背後からか、視力の殆ど無い右側のどちらかだろう。少し安易過ぎるかもしれないが、この程度の予想しか今は出来そうに無い。
「もらったッス！！」
クラウンの声が聞こえたのは、俺の左後ろからだった。勿論、振り向いて防御する時間も無い。前の時と比べて、速度は速くなっている。
「あれ？　確実に当たった筈……ッス」
クラウンは困惑の表情を浮かべていた。小刀は床に突き刺さっていた。俺は攻撃が当たる瞬間に気づかれないように気配を消し、素早く移動した。本物の暗殺者の様に完全に消す事は出来ないが、一応可能である。

クラウンとの距離は大分ある。ここは勝負に出る時だ。
「疾風一閃！」
俺は一気に距離を詰め、クラウンの武器を青雲で切り裂いた。クラウンは一瞬だけ驚いた表情をしたが、すぐに元の表情に戻った。
「まさか、アレだけの戦闘後にここまでやるとは予想外ッス。やっぱり、命を奪う事は出来ないんッスね。そういう、約束で剣術を教えてもらったッスから、まぁ当然ッスけど。相手をするって意味なら気楽ではあるッスけどね。後、出来れば、武器は壊さないで欲しかったッス。結構高いんッスから」
「それは悪かった。だが、俺も本気なんでな。本当に俺の事を何でも知っているみたいだが、一体誰に聞いた？」
まさか、俺が師匠から剣を教えてもらう条件まで……クラウンの依頼主は只者では無さそうだな。
「勿論、教える訳にはいかないッス。手持ちの武器はもう無い……致し方無いッスけど、この勝負預けるッス！！」
クラウンは地面にあの時と同じ物を投げつけた。辺りは再び煙で覆われた。
「逃げられたか。まぁいい……」
煙が晴れる頃には、部屋には人はいなかった。俺の目的ははやてに復讐する事。その対象に逃げられた以上、ここに長居する意味は無い。次の為の作戦も考えないといけないしな。クラウンのさっき言った勝負を預けるという発言。つまり、アイツを殺す以上、俺は再びクラウンと剣を交える事になりそうだな。奴は本気を出していなかっただろう。まぁ、それはお互い様か……
とりあえずは屋上に居るサファイアを迎えにいかないとな。ブルーウィングもいるし、きっと無事な筈だろう。
俺は、はやてのいた部屋を出て、屋上へと急いで向かった。

6章　復讐の時（後書き）

もう少しオリジナル展開になってしまうと思います。

誤字、脱字、感想などありましたら宜しくお願い致します。

7章　自分の弱さ（前書き）

今回も速めなペースで更新する事が出来ました。

7章　自分の弱さ

「はぁ、はぁ……急がないと」
急いで屋上へと向かう途中に俺は、はやての部屋を探している時に会った黒いローブの仮面付けた男に出会った。正直な所、俺の体力もそろそろ限界だ。よりにもよってこんなタイミングに……
「眼鏡が無いみたいですが、どうかしましたか？　その様子だと、目的は達成できなかったみたいですね。まさかあんな乱入があるとは……予想外でしたね」
仮面の男は俺の顔を見るなり話しかけてきた。だが、何故ここにコイツがいるんだろうか。
「今度は何の用だ？　やるべき事は終わったと言ってなかったか？」
正直あまり会いたいと思う奴ではない。何を考えているか全く分からないからな。何故俺が失敗したか知っているかは気にしないでおこう。
「どうしてもしなければならない事が出来てしまったので、戻ってきたのですよ。全く、最近予想外の事が多すぎて困ったものです」
確かに予想外の事が多いのは俺も一緒だ。まさか、あのタイミングで邪魔が入るなんて。
「それには同感だが、たとえ予想外の事が起きたとしてもそれに対処するのが普通では無いのか？」
「確かに貴方の言う通りではありますが、私としては予想通りに物事が運ばないと気が済まないものでしてね。完璧な筈でしたが、まさか……」
仮面の男は少し残念そう言った。完璧と言っていたが、結局は上手く行かなかったのなら、それは完璧な物で無かったと俺は思うけどな。
「何となくだが、俺とお前は色々と合わない気がする」
「そうですね。それだけは私も同じ考えです」

自分でもよく分からないが、そんな感じがした。二度しか会った事は無いけど何故だろう？
いけない、こんな所で時間を使っている場合では無いのに。
「そろそろ、俺はサファイアを迎えに行かないといけない。無事だと良いのだが……」
本来はこんな事をしている場合では無かったな。仮面の男など無視して屋上に向かうべきだった。
「……そうですか。ですが、私には分からないのです。どうして道具であるユニゾンデバイスをそこまで大切にするのか」
俺が歩き出そうとした瞬間に、仮面の男が不思議そうに言った。コイツもサファイアがユニゾンデバイスだと知っているのか。それに、俺の事もよく知っている。まさかとは思うが、コイツがクラウンの依頼主なのか？
「俺はサファイアのローダーになった以上、最後まで守る義務があると思う。普通そういう物ではないのか？」
俺はあの時サファイアを助けた。逃げ出すという選択肢もあったが、あの時の俺は色々な事があった後でな……
「確かに、そういう考えの人も多いと思います。ですが、そうでは無い考えの人もいるのではないでしょうか？」
俺もそういった奴とは一度しか出会った事は無いから何とも言えないが、ソイツもユニゾンデバイスを道具だと思っている奴には見えなかった。考えすぎかもしれないが、コイツも……
「お前がそうだと言うのか？」
「さぁ、どうでしょう？」
仮面の男は素っ気無く答えた。いけない、また時間を食ってしまった。だが、最後にこれだけは確認しておきたい。
「まさかと思うが、お前がクラウンの依頼主か？」
俺は鞘から青雲を抜こうとした。もし、依頼主ならこの場で斬り捨てる。勿論、命まで奪うつもりは無いがな。
「いえ、私ではありません。貴方が……いえ何でもありません」

「知っているなら教えろ。教えなければ……」
俺は青雲を完全に鞘から抜いた。依頼主からは色々と聞き出したい事があるからな。
「それを貴方に教える訳には行きません。それに、今の私と貴方の距離なら、私は貴方の大切な宝石を壊す事が可能でしょう。あまりしたくは無い手ですが仕方ありません」
仮面の男の口ぶりからすると、下手な事をすればサファイアを殺すって事か……依頼主の事も非常に気になるが、ここは仕方ない……
「分かった。これ以上は聞かない」
俺は青雲を鞘に収めた。俺はサファイアの事になると考えが甘くなってしまう。本来はこう言う考えは非常に問題だろうが、やはり、捨てきれない。
「分かって頂けて何よりです。それにしても、貴方の考え方は私には到底理解出来ません。貴方には復讐と言う、叶えなければならない目的があるのでは無いでしょうか？　その目的の為に必要無い物は切り捨てるべきと私は思いますがね……まぁ、その考えのお陰で助かったのですけどね。貴方が本当に大切に思うのならば、きっと守り通せるでしょう……ね」
「そうか。今度こそ俺は行く」
俺はさっさと屋上に向かった。コイツとこれ以上話していたら埒があかないだろうし。

「サファイア。済まない遅くなってしまった」
俺は階段を足早に上がって行った。サファイアは地面に横たわって、ピクリとも動いていなかった。
「サファイア……大丈夫か！？」
サファイアの元に駆け寄って、俺はサファイアを抱きかかえた。見た感じ、規則正しく呼吸しているみたいだ。だけど、やはり心配である。

『マスター。サファイアはフェイトとの戦いなどで魔力を消費しすぎて、一時的に意識を失っているだけです。すぐに目を覚ますと思いますので、あまり心配してなくても大丈夫です』
俺がサファイアの事で気をもんでいると、ブルーウィングが飛んできた。所々傷ついている部分はあるが、フェイト戦の最後の時みたいに声が変な感じでは無く、正常な音声になっていた。
「ブルーウィング。大分調子が良くなったみたいだな。良かった……後、済まないが、青雲を預かってもらえるか？」
『いえ、本当は動くのがやっとで、デバイスとして機能は殆ど使える状態ではありません。マスターには申し訳ありませんが、私はマスターの力になる事は出来ません。ですが。青雲の方はお預かりします』
今後、戦いになった場合、俺一人で何とかしなければならなくなったか……クラウンと戦う事になるのであれば、デバイスを使用して戦った方が有利になると思ったのだが、残念だな。
青雲は青い光に包まれて消えていった。この世界で刀を持ち歩くのは流石にまずいだろうしな……
「目的も達成したし、ここから出ないとな」
サファイアと無事（かどうかはまだ分からないが……）合流できた事だし、はやてに逃げられてしまったい以上この建物にいる意味は無い。
『サファイアの方は私が下まで送っておきましょうか？　マスターもお疲れの様子ですし……』
ブルーウィングが俺の体調を気遣ってか、言葉を掛けてくれた。確かに気持ちは嬉しいのだが……
「いや、俺が運ぼう」
正直な所、俺もあれだけの戦いで体力の殆どを使ってしまった。だけど、俺はサファイアのローダーとして、少しでも一緒にいてやりたい。仮面の男が言った事を少し気にしすぎかもしれないけど……
『分かりました。マスターにお任せします。それでは、私は失礼致

します。後、マスター。この建物にはもう人の気配はありませんのでご安心ください』

そう言うと、ブルーウィングは夜空の向こうへと飛んでいった。そういえば、ブルーウィングからスペアの眼鏡をもらい忘れてしまった。戦う事はもう無いだろうし、大丈夫だろう。（空港から出た時の曲がり角でサファイアとキャロの衝突を防げなかったのはあるが、あの時は眼鏡を掛けてなかったしな……）

「さて、行くか」

俺はサファイアを両手で抱き上げて、階段を降りていった。

「無事に外に出る事は出来たが……」

俺は十分ほど歩き、建物から出る事が出来た。だが、まだサファイアは目覚める気配は無い。その姿は精巧に作られたアンティークドールと見間違えそうな位だった。

「やはり、何処か安静に休ませてやれる場所を探さないとまずいな」

ブルーウィングは正常な感じではあった。だけど、フェイトとの戦った時に使った「虚空切斬」今思えば、何もかもが不自然だった。異常なまでの性能も、使った後のブルーウィングの状態も、使う前のサファイアの反応も……俺の悪い癖かもしれないが、やはり気になってしまう。

俺が再び歩き出そうとした瞬間――

「あっ……エインさん。でも、こんなに顔が近くに……えっ！？私、どうして」

まさに俺が足を動かそうとした時にサファイアが目を覚ました。そして、自分が置かれている状況（俺に抱きかかえられている）非常に吃驚しているみたいだった。

かすかに頬が赤くなっているが、大丈夫なのであろうか？　心配だ。

「サファイア起きたのか。体調の方は良くなったか？」

「はい。少し眠ったらよくなりました。あ、あの……エインさん疲れてませんか？　私重たくありませんか？」
「いや、別に大丈夫だよ」
俺も確かに今回は結構疲れた。多少視界がぼやけているが、それは眼鏡が無いせいだろう。それに、サファイアは別に重くは無かった。見た目は十一歳位の女の子にしか見えないからな。別にユニゾンデバイスだからといって、特別重たいとかそう言うのは無さそうだ。何にしても体調の方も大分回復したみたいだし、ほっとした。
「サファイア。ベンチで休むか？　後、何か欲しい物は無いか？」
俺はサファイアをベンチに寝かし、俺はサファイアに尋ねた。
「あ、少し喉が渇いてしまいました。でも、私は……」
「分かった。飲み物だな。待っていてくれ。すぐ買ってくる」
俺はサファイアの言葉を聞き終わる前に、急いで飲み物を探しに走り出した。
「あ、あの、エインさん……」
後ろからサファイアの声が微かに聞こえた気もするが、今はそんな事を気にしている場合では無い。早く飲み物を買ってこないとな。

「とは言ったが、飲み物は何処に売っているんだ？」
行く時は無我夢中で、飲み物を買ってこなければと言う気持ちだったが、冷静に考えてみると、俺は何処で飲み物を買えるか知らない。探すにも眼鏡が無いのは結構致命的だ。あんまりサファイアを一人にさせるのもマズイだろうし、さてどうしようか……
「あの……どうかしましたか？」
右往左往している俺に一人の女性が話しかけてきた。その女性は短めの金色の髪をし、瞳の色は茶色。茶色の服の上から白衣を羽織っているおっとりとした感じの人だった。
「いや、飲み物を買いたいのだが、何処に売っているか分からなくてな……」

「それなら私も今から買いに行こうと思っていた所なんですよ。一緒にどうですか？」
これは願ってもない事だ。多分一人で探しても見つかる確立はゼロだろうし、答えはただ一つだな。
「お願いしてもいいか？」
「はい。じゃあ、行きましょうか」
俺は金髪の女性の後を付いて行った。一時はどうなる事になるかと思ったが、助かった……
「着きましたよ。ここです」
数分ほど歩くと、目の前に不思議な物があった。それは大きな四角い箱の様な形をし、上の部分は様々な飲み物が透明な板越しに並べられていた。下の構造はゴチャゴチャしていてよく分からなかったが、確かに飲み物が買える事は確かだろう。しかし、どうやって買うのだろうか……
「あ、あの……どうかしました？」
俺が不思議そうに四角い箱を凝視していると、金髪の女性が心配そうに声を掛けてきた。
「いや……もしかしたら、非常に変な質問をするかもしれないが……」
この世界の人なら誰だってこの程度の事は分かるだろう。だけど、別の世界から来た俺は、どう考えても解決策が見つかりそうにない。これは聞くしか無さそうだな……
「はい。なんでしょう？」
「これはどうやったら買えるのだ？」
「えっ！？」
金髪の女性は呆気に取られた様な表情をした。こんな展開は予想はしていたが、ここまで驚かれてしまうとはな。
「この世界に来て、まだ一日も経っていないので……この世界の事がよく分からなくてな」
「そうだったんですか。ごめんなさい。まず、右にある銀色の穴に

所にお金を入れて下さい。後は欲しい飲み物の下にあるボタンを押せば買えますよ」
　なるほど。そうすればいいのか。俺は言われたとおりの部分にお金を入れた。大きい透明な容器に入っているのが百五十円で、小さい缶の様な物に入ってるのと、小さめの透明な容器は百二十円って事か……金銭的には特に問題は無さそう。なら、大きい奴にしておくか。
「さて……どれにしようか」
　俺はお茶にするにして、サファイアは何にしたらいいのだろうか？　サファイアの事だからお茶よりは甘い物の方が喜ぶだろうし……悩む所だ。
「どんな飲み物がいいんですか？」
「そうだな……甘いのは確定として、何か変わったのは無いか？」
　理由はどうであれ、他の世界に来た訳だし、少しでも思い出になりそうな物の方が良いだろう。
「そうですね……このソーダ何てどうですか？　炭酸飲料と言って、普通のジュースとは違った刺激が楽しめると思いますよ」
　金髪の女性が薦めてくれたのは、青色の飲み物だった。刺激が楽しめると言っていたけど、サファイアが気に入ってくれるだろうかちょっと気になる所だ。でも、物は試しに――
「そうだな。それにしようかな」
　俺はボタンを押した。ガシャンと言う落下音の後、金髪の女性は下の蓋を開け、中から青色の飲み物を取り出した。
「はい。どうぞ」
「あ、すいません」
　俺は青色の飲み物を金髪の女性から手渡された。なるほど。買った飲み物はあの部分から出て来る訳か。
「ごめんなさいね。飲み物何処から出てくるか教え忘れちゃって」
　金髪の女性が少し申し訳無さそうに頭を下げた。寧ろ、丁寧に買い方を教えてくれてこっちが感謝したい位だ。

「いえ、飲み物の売っている場所を教えてくれるだけで無く、色々と教えてくれて本当に有難うございました。俺はそろそろ行きます」
「どういたしまして」
俺はお茶を買って、金髪の女性に一礼した。そして、サファイアのいるベンチまで歩き出した。

「まずいな……頭がクラクラするし、ちょっと気分も悪い」
あの場所から少し歩くと、俺にいきなり眩暈の様な症状が襲ってきた。
「少し無茶をし過ぎたか……」
体に鞭を撃ち、前へと進むが、どんどん視界が歪んでいく。さっきまで何ともなかった筈なのに。
「急がない……とな……サファ……イアが……待ってい――」
俺は意識を失い、地面へと倒れこんだ。こんな所で倒れている場合では無い。まだ『復讐』は終わっていないのだからな。

7章　自分の弱さ（後書き）

最近は更新速度も大分速くなって来ました。出来る限り、速めに投稿できるようにさらに頑張っていきたいと思います。

誤字、脱字、感想などありましたら、よろしくお願い致します。

8章　動き出すもう一つの影（前書き）

一ヶ月ほど空いてしまいましたが、やっと投稿できました。

今回もオリジナル色が強めになってしまいました……

8章　動き出すもう一つの影

色々な事に耐えられなくなった俺は深夜にこっそりと病院から抜け出した。その後、数人の盗賊に襲われた。

その時の俺は右目の視力の殆どを失い、左腕は動かせられる状態では無かった。そして、精神的にもかなり不安定な状態で、正直な所このまま殺されてもいいと思っていた。

生きていても辛い事ばかりだし、夢も目的も無い。その時はそう思っていた。

だけど、俺は止めを刺されそうな所をある人に助けられた。最初はその人の圧倒的な強さに俺は恐怖すら覚えた。だけど、それとは別に希望も感じた。これほどの強さがあればアイツらを倒す事が出来るのでは無いかと。あの時の俺は無気力で弱かった。だから、何一つ守れなかったのだから……

数日後、俺はその人に弟子にして貰えないか頼んだ。最初は断られたが、何度もお願いをして一つの条件を守る事で弟子にしてもらえた。その条件は「復讐したい奴以外は絶対に殺すな」と言うものだった。

その条件の理由を聞いてみたら、過去に一人の弟子が人を斬り殺す事で快楽を覚えてしまう人になってしまったそうで、そんな事は二度と起こさない為にとの事。詳しくは知らないけどな……。

俺は八神はやてにさえ復讐出来ればそれで良い。それ以外の事など正直どうでもいい。だから、俺はこの条件を迷う事なく了承した。

そして、俺は大きな教会のある町を去り、遠くへ旅立った。そして、修行の日々が始まった。何度も死掛けたし、何度も諦めようと思った。だけど、俺は修行を続けた。ただアイツに復讐する為に……

その人の名前は「黒川隼人」俺の住んでいた世界で最強クラスの剣士の一人だと後に知る事になった。

「……エインさん、目を覚まして下さい。イヤです……エインさんがいなくなったら私は……お願いです……一人にしないで下さい」
俺は微かに聞こえた、でも、どこか聞き慣れた声で目を覚ました。
「あれ……俺は……あの時に」
目の前には星の綺麗な夜空と、不安そうに覗き込むサファイアの顔があった。俺は確かサファイアの為に飲み物を買いに行ったんだったな……
「エインさん。やっと目を覚ましてくれました！！　体調の方は良くなりましたか？」
サファイアがほっとした表情を浮かべた。この状況から察するに、やはり俺はあの時倒れたのか……頭が少しクラクラするところも考えるとそうとしか考えられないな。あれだけ無茶な連戦をすれば、倒れるのも不思議では無いのかもしれないな。
「もう大丈夫だよ。少し横になったら楽になった。でも、一体誰が俺を……」
まだ少し辛いが、俺は体を起こした。サファイア一人で俺をここまで運んでくれたというのは、まず無いだろうし。
「短い金髪の女の人や赤い髪の女の子が一緒に倒れていたエインさんをここまで運んできたんですよ。本当にあの時はとっても……とっても心配しました」
「そうか……サファイア有難う」
今にも泣き出しそうなサファイアを俺に俺は優しく話しかけた。短い金髪の女性……もしかしたら、飲み物を買う時に会ったあの人なのかもしれない。今度会う事があったのなら聞いてみるか。
「あ、そうだ。サファイア飲み物を買ってきた」
渡すタイミングが無かったから中々言い出すタイミングが無かったが、俺はその為にあちこちを歩き回っていたんだったな。
「あ、ありがとうございます。エインさん」

俺が買ってきた飲み物をサファイアの渡そうとしたが――
「中身が無い？　そんな筈は無い。確かに買った時は……」
瓶を確認してみると、青色の液体は殆ど無くなっていた。瓶の側面を見てみると、小さな亀裂が入っていた。ここから液体が漏れたのだろう。倒れた時の衝撃が原因なのか？　そんな事は無いと思うが、それしか考えられない。
「ど、どうかしましたか？　エインさん」
「サファイア済まない。飲み物をダメにしてしまって……代わりにこのお茶を飲んでくれ」
俺はサファイアに俺が飲む予定だったお茶を手渡した。
「でも……エインさんの分が」
やはりサファイアの性格を考えるとやはりこうなってしまうか……炭酸飲料と言う物をダメにしたのは俺のせいなのに。でも、その部分がコイツの良さでもあるんだけどな。
「俺の事は気にしなくても良いよ」
「ですけど……」
「ならサファイア。こうしないか？」
下手したら永久ループに入る可能性があるので、ここで俺は一つの提案を考えた。
「何でしょうか？　エインさん」
「まず、サファイアが飲みたいだけこのお茶飲んでくれ。その後、俺が残りをもらう。こんな感じでどうかな？」
多分この方法ならサファイアも納得してくれる筈だ。サファイアの事だから全部飲み干す事は無いだろうからこの方法でも安心だろう。あくまで俺の憶測だが。
「あ、はい。分かりました」
俺はサファイアにお茶を手渡した。蓋を開け、サファイアはお茶をこくこくと飲み始めた。
「美味しいか？　サファイア」
サファイアはこういった甘みの無い飲み物を飲む事が少ないので、

気に入ってもらえるかは分からないけど、どうだろうか……
「は、はい。美味しいです。普段はあんまりこういった物は飲まないので少し新鮮です」
「そうか。気に入って貰えてよかったよ」
そう言うと、サファイアはさらにお茶を飲んだ。どんどんお茶が減っていくが大丈夫なのだろうか？
「エ、エインさん……」
「どうした！　サファイア？」
いきなりサファイアが困ったような声を上げた。一体何が起きたのだろうか？
「ご、ごめんなさい。エインさん。全部飲んでしまいました……」
サファイアはしょんぼりとした表情で言った。まさか全部飲まれてしまうとは……まぁいいか。
「いや気にしないでくれ」
実際のところ、俺も喉は渇いていたが、脱水症状になるほどでは無い。なにより、サファイアが元気になったのなら、俺はそれだけで十分だ。
「あ、はい。ありがとうございました」
サファイアは深く一礼した。別にそんなにかしこまらなくてもいいのにな。
「さて、これからどうしようか……」
実は今後の予定は一切決まっていない。今から宿を探すのは困難だろうし、野宿という手もあるが、サファイアもいる事だし出来れば避けたい。
「町の方に行ってみたらどうでしょうか？　エインさん」
俺が今後の状況を考えていると、サファイアが一つの案を出した。
「そうだな。そうするか」
「は、はい」
サファイアの言ったように町にとりあえず行くのがいいだろう。

そうか……復讐は失敗してしまったんだな。だが、俺はまだ諦めない。明日こそは……

「そういえば、サファイア一人で寂しくなかったか？」
数分ほど歩き、俺はサファイアに尋ねた。
「い、いえ、さっき話した赤い髪の小さな女の子がお話してくれたので、寂しくはありませんでした。その女の子はちょっと気の強そうな子でしたけど、話してみると、とってもいい人でした。後、犬？さんも連れていました」
なるほどそんな事があったのか。その子も俺を運ぶのを手伝ってくれたみたいだし、会う事があったならお礼をしないと。犬の部分が若干変な感じではあったが、今は気にすることでも無さそうだな。
「そうか。それならよかった……」
それはそうとして、ベンチを後にしてから何者かの気配を感じるのだが、だが、一体誰が……
「どうかしましたか？　エインさん」
サファイアが心配そうに話しかけてきた。
「隠れて無いで出てきたらどうだ？」
「おや？　見つかってしまいましたか……それなりに気配は消したつもりですがね」
俺の声に気づいてか、茂みから一人の男が現れた。その男の服装は黒い背広を羽織り、同色のネクタイをしていた。後、手袋をしている。見た感じ執事の様な格好の男だ。クラウンほど気配を消すのが上手くはなかったから、特別意識しなくても気づく事は出来た。
「サファイア。下がってろ」
「は、はいっ！」
相手の正体がまだ分からない以上、サファイアに危険が及ぶ可能性もある。それは避けなければならない。

「お前は一体何者で、俺たちに何の用だ？」
「私は貴方と同じ世界から来た者です。目的はこのミッドチルダを私たちの世界の物にする事で、その為に集められたメンバーの一人です。まずは六課メンバー倒し、聖王教会を潰そうと考えている訳ですよ。一度は聖王教会を襲ったのですが、失敗してしまって……なので貴方の力を貸していただきたいと思いましてね」
なるほど……まさか、俺たち以外にもミッドチルダに来ている奴等がいたとはな。それに、俺のいた世界でこんな計画が進んでいたとは知らなかった。だが、知っていたとして俺が協力していたかと言うとそれは別の問題だ。話を聞いた限りでは聖王教会とやらを襲撃したが失敗に終わってしまった集団な訳だしな。
「悪いが断らせてもらう。俺の目的は六課メンバーを倒す事でも、聖王教会とやらを潰す事でも無い。八神はやてを殺す事。ただそれだけだ」
俺の目的はこれ以外には無い。今まで戦った奴だって邪魔をしたから倒した。それだけの事だ。
「それは知っていましたが、残念です。折角、六課メンバーの情報などを教えてさしあげようと思っていたのですがね」
黒い服の男は残念そうに言った。だが、まだ諦めてはいないみたいだな。でも、何故コイツが俺の目的を知っているんだろうか？
「そんな物必要無い」
そう言ったものの、実際の所は情報が欲しいところだ。一度は失敗している訳だしな。だからと言って、コイツ等に協力する気にはなれない。
「では、こうしましょうか？　私たちが泊まるホテルに貴方たちも止めて貰える様にお願いします。ただ、その間大分時間があるのでお話をしましょう。さっき言った情報もお渡ししますし」
確かに俺たちは泊まる所が無くて困っていた。それにさっきの情報も貰える。その代わりに話、つまりあの建物での出来事を話せということだろう。さてどうする……少し虫のいい気もするが。

「あっ……」
俺が考えていると、後ろからサファイアの声が聞こえた。その後、地面に何かが倒れる様な音がしたが、まさか……
「どうしたっ！？　サファイア」
後ろを振り向くと、地面に横たわるサファイアの姿が目に映った。意識は見た感じ無さそうだ。イヤな予感が当たってしまったか……やっぱり無理してたんだな。それに気づいてやれなかったのは俺の失態だ。ローダーとしてはあってはならないのに……
「どうしました？　お連れのお嬢さんが倒れてしまったみたいですが、大丈夫ですか？　サファイア……何処かで聞いた事あるような気がします」
もしかしてサファイアの事も知っているのか。それも気になるが、今は気にしている余裕では無い。こうなってしまった以上、仕方無いか……
「分かった。付いて行こう。その代わり刀を持たせて貰うが、いいか？」
付いて行くと言っても完全に信用した訳では無い。せめて身を守れる物くらい持っておきたい。刀無しでは俺は自分の身すら守れないからな。
「構いませんよ。後、遅れ申し訳ありませんが、私の名前はウォーレスと申します。以後お見知りおきを」
「分かった。一応覚えておく」
どんな情報でも、もしかしたら役に立つかもしれないからな。これも師匠の教えてくれた事の一つ。
「ブルーウィング。青雲を頼む」
『了解。マスター』
俺が呼びかけると、虚空を切り裂いてブルーウィングが現れた。そして、青雲を持って俺の方へと飛んできた。
「そろそろ行きましょうか」
「ああ」

青雲を受け取った俺はサファイアを左手で抱え、ウォーレスに付いて行った。何より早くサファイアをゆっくりと休ませてやらないと。

8章　動き出すもう一つの影（後書き）

誤字、脱字、感想などありましたがよろしくお願い致します。

9章　消せない過去の罪　（前書き）

少し予定より遅れてしまいました。
まだ、オリジナルキャラのみかつ、設定メインの展開ですが、お楽しみください。

9章　消せない過去の罪

「ホテルまでは一時間半ほどで着くと思います。それまで、くつろいでいて下さい」
　ウォーレスに連れられて来た場所には大きな黒い乗り物に乗った。ウォーレスは前に座り、俺たちは後ろに座った。乗り物の中は予想より広く、テーブルもあり、飲み物も用意されていた。
「分かった。だが、そっちとしても早く俺から情報を聞きたいのではないのか？」
「別にもう少し後でも無くてもよかったのですが。そうですね……まず貴方が戦った六課のメンバーとその結果を教えて頂きたい」
　なるほどな……ウォーレスは俺がどれだけ六課（はやてが指揮していた部隊）のメンバーを倒したか聞き、六課の戦力がどれ位残っているか知りたい訳か……確かにこの情報はコイツ等にとっては重要な情報だろうしな。
「エリオ、キャロ、シグナム。そして、フェイトは倒した」
　ここではクラウンの名前は伏せておく。奴には謎が多すぎるからな。
「ライトニングを全滅させるとは……黒川隼人の元で五年修行したのですから、そう驚くほどでもありませんけ。何と言っても、私たちの世界最強の殺人剣術の使い手ですからね」
　俺の結果を聞いたウォーレスは冷静な感じであった。でも、どうして……
「何故お前がその事を知っている？」
　この事を知ってのは、サファイア、黒川師匠を含め少数の筈なのだが……
　勿論、俺は師匠が殺人剣術の達人だと言う事は勿論知っていた。”あの制約”があるから、俺にはほぼ無縁の剣術ではあるが……
「いえ、黒川が弟子を持ったと言う噂を四年前位に耳にしたのです

が、その時はそれが誰かまでは分かりませんでした。他に気になって事があったのでそれを調べていたら偶然、貴方が弟子だという事も分かったんですよ」

「他に気になった事とは何だ？」

師匠との関係がばれてしまったのはもう仕方ない。この様子だと、コイツは何か隠していそうだ。言わないというなら、最悪は……

「少し探し物をしていましてね……やはり、”コレ”が【ＰＶＤ０（プロト・ヴァリアブル・デバイス）０２－烈空の蒼翼（そうよく）】のユニゾンデバイスと言う訳ですか……あの頃と雰囲気が変わっているので、見違いかと思いました。よく見てみると、あの時の失敗作のようですね。貴方がローダーでしたか……数年前に使用状態を目撃されたと言う情報もありましたが、それが貴方だったみたいですね。それに……魔力無効化能力を持つ貴方でもデバイスが使えるのかと、最初は驚きましたが、サファイアには”魔力無効化を無効化する能力”があるので使えたとしても、ある意味不思議ではありませんね。でも貴方ならこんな物を使わ――」

「それ以上は言うな。まさか、そんな事まで調べられているとはな。だが、サファイアをコレ扱いは止めくれ。その言い方はコイツが一番傷付く事だ」

殆ど俺の事は知られてしまっているみたいだな。魔力無効化の事まで知られているとは。俺が元の世界でブルーウィングを使ったのは数回だけだ。それを目撃した奴が情報を流したのだろう。

だが良かった。もし、サファイアにこんな事を聞かれたなら酷く落ち込んでしまっただろう。さっきアイツが言おうとしてた事も聞かれたらなお更だ。サファイアは今も目を覚ます気配は無さそうだから、良かったのかもしれないな。

「それは失言でした。私たちは【ＰＶＤ０００－起源なる大海（たいかい）】と【ＰＶＤ００１－時空の紅翼（こうよく）】の二つを暴走事故で失ってしまい、後が無い状況下でした。だから、サファイアには色々と辛い目を合わせてしまいました。でも、結局は誰ともユニゾンに成功しない失敗作にしか出来ませんでしたが。それに、”貴方”が襲撃したため

逃げられてしまました。デバイスの製造から私たちは手を引く予定だったので、今となってはもうどうでもいいのですけどね」
今までの事から考えるに、コイツはあの研究所の研究員の一人だったみたいだな。俺が研究所を襲撃か……確かに間違ってはいない。

三年半ほど前に、俺は過度な修行などや生活費などを集める為の依頼のしすぎで体調を崩してしまった。師匠に休養も兼ねたある依頼を受けて来いと言われた。
その依頼の為に訪れた町は大きな教会のある町だった。その町には俺が入院し、地獄の様な日々を味わった病院があった。そして、依頼主はアルシアだった。一度は俺を殺そうとしたナタリーの妹。でも、その面影は無く元気になっているみたいだ。
アルシアはナタリーが通っていた魔法学園に入学したらしく、毎日が大変で、学費とかも自分で出来る限りは払ってる。そのために、休みの日や放課後はバイトをしていると言っていた。
依頼の内容は魔法学園の生徒が失踪する事件が最近多発しているらしく、その犯人を捕まえて欲しいと言う内容の物だった。そう苦戦する事無く依頼は達成できた。相手が魔法を使う奴等だったからな。
しかし、その半年後、アルシアが俺の家を訪ねてきた。来た理由は、ある理由で学費が払えなくなってしまったらしいので、少し助けて欲しいと言う内容だった。過去には色々あったが、アイツの妹だ。それに、俺以外で唯一生き残った奴だしな……俺のできる範囲で手伝う事にした。
とは言ったが、俺も自分の生活費などで一杯一杯だった。だから、依頼の量を増やしが、結局はあまりは意味は無かった。そんな時にとある依頼が舞い込んできた。でも、その依頼は俺にとってな……

それだけじゃない。この頃の俺は人間としたら最低だったんだなと思う。この事件すら、ほんの一部の事にすぎない。

お金を集める事に必死になりすぎていた俺はその依頼を受けた。内容は盗賊などから子どもを救出するだけの物だった。ただそれだけで、普通に依頼と比べると破格の報酬だった。だけど、その依頼の本当の目的を知ってしまった。

助けた子供は裏でどこかの研究所に送られていた。そこでは、非人道的な研究がされているらしい。勿論知った時には遅かったけどな……

俺はその研究所の位置を探し出し、子ども達を助けに行った。もう手遅れなのも、許されない事も分かっている。だけど、せめてもの罪滅ぼしの為にな。だが、建物の中ではさらに意外な事が待ち受けていた。

俺が建物中に入って見たのは、囚われた魔法学校の生徒の姿だった。その中にはアルシアの姿もあった。生徒たちを逃がし、子ども達を探しに行った。途中、研究員や警備の兵士が襲ってきたが、一切苦戦する事は無かった。その時の俺は”本気”だったからな。

結果的には俺は子どもたちを救出する事は出来た。しかし、アルシアに子どもたちを研究所に実質、送っていた事がばれてしまい、今まで魔法学校に学費の手伝いの為に貯めたこの金もほぼ無駄になってしまった。

それ以来、俺はアルシアと会う事は無かった。こんな事をしてしまった以上、仕方ないのかもしれないがな。それに、黒川師匠にこってりと絞られたしな……やりすぎだと。その時の俺は大切な事を忘れていたんだと思う。

その時は気にしなかったが、この事件は規模の割に公になる事は無かった。今思えば、少し不思議だな……

「なるほど。やはりサファイアはあそこにいたのか……確かにお前等からしたら襲撃だったかもしれないが、俺のとっては”自分の罪を償い”に行っただけだ」
その事実を知らなかったと言え、そのケジメはつけないといけない。それは師匠から教わった事。
「貴方が一生懸命子供を連れてきてくれたお陰で研究はとても捗りました。ですが、ユニゾンは一度も成功しませんでしたけどね……」
ウォーレスは心の底から嬉しそうな表情で言った。気に入らないが、どうやら俺はコイツ等に利用されていた訳か……
「ただの研究員にしては詳しすぎるな。本当にお前は何者だ？　後、こんな事をしてまで、ブルー……いや、烈空の蒼翼を完成させようとした？」
今までの話を聞いてそう思った。ウォーレスは色々と詳しすぎるような気がする。
「いえ、私はただの研究員ですよ。その頃から私たちはこの世界ミッドチルダを狙っていました。貴方の持つデバイスも、他の消滅したデバイス、その為に作られた物です。多少犠牲は出てしまいましたが、全ては私たちの世界の為です。その為に必要だったのです」
「なるほどな……」
まさか、ウォーレスと意外な接点があったとは。ミットチルダを手に入れる計画が裏で進められていた事は初耳だ。それに俺の魔力無効化の事も詳しい……正直ただの研究員と言う言葉は信じられない。
乗り物内に時計を見てみると、もう三十分、いや、ホテル到着の時間を考えるとまだというのが正しそうだな。黙っているのも時間の無駄だろうし、それに、コイツからは色々な情報が引き出せそうだしな。
……コイツのせいでアルシアは危険な目に会い、子どもたちは……この事を知って、俺はコイツを許せるのだろうか？　サファイアの事も失敗作と何度も言ってるし、サファイアがどんな思い出いた

か知って
るだろうか？　どうせ、ウォーレスたちにとってはそんな事はどうでもいいだろうが。
少し冷静に考えてみるか……

「お前は俺たちの世界で作られたデバイスについて詳しいみたいだな。なら、少し聞きたい事がある。俺たちの世界で作られたデバイスは何故、形状が大きく変化する？　それに、大きく違うカートリッジの事もだ。何か知っているか？」
俺は飲み物をコップに注ぎながら、ウォーレスに尋ねた。
フェイトにも言われたが、確かに俺たちの世界で作られたデバイスと、ミッドチルダで作られたデバイスは大きく違っていると思う。後、それ以外にも一つ気になる事もあるしな……
「やはりそう感じましたか。一つ目の疑問も、二つ目の疑問も大体の答えは一緒です。三年半前、最初に作られた【起源なる大海】は一つの事に特化した物で、カートリッジの種類も一つでした。それは古代ベルカの技術を参考にして作成しました。ですが、ある書物が見つけたのです。著者も題名も不明ですが、そこに書いてあった内容は、私たちの作っていた物とは大きく違い、私たちの物よりも遥か優れたデバイスの設計方法が書いてありました。それを元に私達は【時空の紅翼】と【烈空の蒼翼】を作ったのです。どちらも失敗してしまいましたがね――」
ウォーレスはさっきよりも口早に喋り出した。その間、俺は取り出した飲み物（お茶）を飲んでいた。しかし、よく喋るな……この手のタイプは喋らせておくと、止まらない気がする。一旦話を強引にでも、中断させるのが良さそうだな……
「悪いが、質問の内容に答えてくれないか？　俺が聞きたかったのは、俺達の世界で作られた物とミッド製何故違うのかと言う点だ」
飲み物も飲み終わったので、俺は再びウォーレスに尋ねた。

「おっと、これは失礼しました。ＶＤ（ヴァリアブルデバイス）。つまり、私達の世界で作られたデバイスの意味を知っていますか？　武器形状とカートリッジを有効に使い、臨機応変に戦う。それがＶＰです。さっきも言いましたが、これらはミッドチルダを手に入れる為に作られた物。その時の技術では、トータル性能でミッドのデバイスに勝つ事は出来ないと判断されたため、対応力の高いデバイスを作る事にしたのです。その反面、最大限の力を使うには使い手を選んでしまうのですが。私達の世界では魔法の属性を重視する文化がありますので、カートリッジの方はその名残が強く残っています」

なるほど。そういうコンセプトで作られたという訳だったのか……

俺が知りたかった点は聞くまでも無く、相手が喋ってくれた。聞きたかった事はミッド製との性能差の部分だ。戦っていてその部分が気になったからな。属性と言う部分はよく分からんが、ウィンド、ライトニング、ディメンジョンとかの事だろう。よくは知らないけどな。

「ちなみにですが、【起源なる大海】は射撃に特化した物で、【時空の紅翼】は一対多数。【烈空の蒼翼】は一対一を想定し、その状況下で最大限の力を発揮出来るように作られた物です」

「なるほど……」

やっと俺の知りたかった情報を聞き出せた。それにしても、本当にデバイス関係の事になると、ウォーレスはよく喋るな……余計な事まで。

ブルーウィングは一対一用の物だったのか。それは始めて聞いた。広範囲に攻撃できる物も少ないが、長期戦も可能だった。そういった意味を踏まえてみると、さっきの戦いは全て一対一だったから、よかったのかもな。サファイアやブルーウィングにもかなり無理をさせてしまったがな。後、フェイトとの戦いの時、俺は吐血をした。体に負担がかかる事を知ってなお、連続空間移動をした。その後は復讐の事で頭が一杯だったが、冷静に考えてみると、痛みが一切無いのは不自然だ。これもデバイスの作用なのか？　まぁ気にするこ

とも無いか。後でサファイアに聞いてみれば良い。
「後一つ聞きたい事があるのだが、いいか？」
時計を見ると、一時間ほど経過していた。後少しでホテルに着く。だが、サファイアは一向に目を覚ます気配が無い。本当に大丈夫なのか心配になってきた。
「構いませんよ。何でしょうか？」
「もしかして、六課の本部に何か細工したのはお前等か？　俺らは一切影響は無かったが、何かあったみたいだしな」
シグナムと戦った時に俺がミスでビルから落ちた後に現れたアギトが言っていた事を思い出した。連絡が取れないとか言っていた気がする。その同時期に聖王教会がウォーレスたちに襲撃されていたと考えると、コイツらが六課の方でも何か行動を起こしていたかもしれない。その点の真相も知っておきたい。
「やはり、気づいてましたか……魔力のジャミングの事を。特に通信系を大きく妨害する術を建物の周りに施しておいたのですよ。サファイアの力で貴方方は何の影響も無かったみたいですね。一応、そちらの建物にも警備の魔導士を装った私達の仲間も居たのですが、貴方が来ると分かっていたなら、聖王教会の方に殆ど回せれたのですがね……そうすれば、貴方に倒される事も無かったですしね」
そう言う事だったのか。やはり、ウォーレスたちが細工をしていた訳か。なら。警備の魔導士が多かったのも納得だ。少し悪い事をしてしまった気がしないでもない。
「そうだったか。それは済まなかった」
「まぁ、それはこちらとしては損害ですが、ライトニングを全員戦闘不能にさせてくれたのですから、それで今回の件は御相子とします」
とは言ったものの、ウォーレスの顔は嬉しそうに笑みを浮かべていた。仲間がやられてしまっているのにな。
「了解した」
何より大事にならなくて良かった。さて、そろそろ着く頃だろう

か……サファイアはピクリとも動かないが、きっと、ホテルでゆっくり休めば目を覚ましてくれるだろう。
「さて、着きましたよ」
ウォーレスがそう言うと、乗り物は減速していき、止まった。その後、ウォーレスはドアを開け、乗り物から降りた。
「……さて、俺も出るか」
俺もドアを開け、”サファイアを抱えずに”外へ出た。

「おや、サファイアは連れて行かないのですか？」
サファイアがいない事を不思議に思ったのか、ウォーレスが声を掛けてきた。
「いや、用事が済んだら連れて行く」
俺は冷静に言葉を返した。
「その目……やはり、貴方は私が許せないのですね」
自分では分からないが、俺の目は相当殺気だっていたのかもしれない。正直、今すぐにでもコイツを……
「ああ。確かにお前はホテルを用意してくれた。感謝もしている。だけど、子どもの事と、アルシアと言う魔法学校の生徒の知り合いがいてな。あの研究所に連れて行かれていた」
俺は青雲を鞘からゆっくりと抜いた。
「私に刃を向けるという訳ですか……」
ウォーレスはまるで仮面の様に表情を変えず、冷静な感じであった。何か秘策でもあるのか……
「ここでお前を斬っても何の意味も無い事は分かっている。サファイアの事も考えると、体が勝手に……な。失敗作と言うお前の発言も許す事は出来ない」
サファイアも研究所に居た時の事は本当に辛かったし、出会った当初のサファイアは見てられなかった……
「別に私を斬るのは構いませんが、車内にサファイアがいる事はお

忘れなく」
ウォーレスの発言を聞くと、俺はほぼ反射的に青雲を鞘に戻した。やはり、俺はサファイアの事となると、ダメだな。甘くなってしまう。
「済まなかった。許してくれ」
「いえ、気にしてませんよ。私も敵が多いもので、慣れましたよ」
コイツもコイツで苦労しているみたいだな。仕方ない事だと思うが。
「寛大な対応感謝する」
と言葉では言うが、やはりウォーレスを許すことは出来ない。復讐対象の八神はやて以外は殺せないから、コイツの命は奪えないけどな……
「さて、ホテルに向かいましょうか」
「ああ。今行く」
俺はサファイアを両手で抱き上げて、ホテルへとウォーレスの後を着いて行った。

9章　消せない過去の罪　（後書き）

次の章と、8．5章で主要な原作キャラは全て出ると思います。
誤字、脱字、感想などありましたら、よろしくお願い致します。

１０章　休息の時（前書き）

実は日曜０時に投稿しようと思いましたが、間に合わず……
また長くなってしまいましたが、お楽しみください

１０章　休息の時

「部屋の方への案内は少し待っていてください。私も色々と準備がありますので……資料の方は後で渡しに行きます」
そう言うと、ウォーレスは受付カウンターの方へと歩いていった。
俺たちの泊まる事になったホテルの周りは森で囲まれていた。ホテル内はとても広く、かなり高級な感じだった。名前はホテル・アグスタと言うらしい。
「分かった」
多分そんなに時間が掛からないとは思うが……何より早くサファイアを休ませてやりたい。それに、色々な事がありすぎて俺も疲れている。今日は俺もさっさと寝て疲れを取りたい。だけど、その前に考えておかなければならない事もある。
（復讐の計画も考えないといけない。それに、ウォーレスからもらう六課の情報も一通り目を通しておきたいしな）
今はまだ可能性は低いだろうが、明日になったら確実に俺たちは追われる身になる。あれだけの事をしたんだからな。顔だって見られている。だが、失敗したといって諦められるようなものではないからな。多分、その時には本気のクラウンや他の六課メンバーと戦うだろう。その為にも、万全を期さなければならない。今度こそ最後のチャンスだからな。
（次は俺一人でやるのがいいだろう。サファイアは今日の様子を見る限り相当疲れている。ブルーウィングも今日の戦闘でかなりダメージを負った。それに、ウォーレスの言おうとしていた事。それは確かに……ある意味当たってはいるが――）
ふと、サファイアの顔に目線を動かしてみると……
「あっ……エインさんの顔がまた近くに……あの時に私は……ごめんなさい。エインさんに迷惑を沢山かけてしまって……」

サファイアがゆっくりと目を開けた。だけど、少し元気が無さそうだ。
「いや、気にしないでくれ。俺も倒れたのだから、お互い様さ。まだ体調が良くなさそうだが、大丈夫か？」
一日に二度も倒れたのだから、心配にもなるさ。やはり、今までの戦い、特にフェイトの時に無理をさせてしまっただろうし……
「大丈夫です……一人で歩けますから、降ろしてくれませんか？」
「お前がそう言うなら……だけど、辛いと思ったら言ってくれ」
俺は不安に思いながらも、サファイアをゆっくりと降ろした。
「ありがとうございます。あっ……！」
降ろし終え、少し歩き出した時にサファイアは体勢を崩しかけた。
「本当に大丈夫なのか？」
ギリギリの所でキャッチに成功はした。やはり、眼鏡が無いのはキツイな。そういえば、また眼鏡の事を忘れていたな……
「だ、大丈夫です。少しバランスを崩しただけなので」
そう言って、サファイアは再び歩き出した。大丈夫なのか？　かなり心配だ……
「ママ……どこいったの？　ママ……」
ふと、視界に五歳位の女の子が入ってきた。金色の髪をし、右目は緑色、左目は赤色と珍しい瞳の色をした女の子だった。しかし、こんな夜遅くに子どもが一人で、しかも、今にも泣き出しそうな顔をして、ママと言っていたから――
「あ……」
突然、金髪の女の子が転びそうになった。女の子との距離は大分離れているが、間に合わないレベルではない。ただ、今の状態では確実に助けられるとは言えない。
「だ、大丈夫ですか！？」
サファイアが金髪の女の子を何とか受け止めた。俺はその様子をただ眺めるしか出来なかった。
「う、うん。だいじょうぶ……ありがとう。おねえちゃん」

「それなら良かったです。どうしたんですか？　夜遅くに一人で歩いていて」
　サファイアはほっとした表情を浮かべた。だけど、金髪の女の子は泣き出しそうだった。
「ママと……はぐれちゃったの」
「ママはどんな感じの人ですか？　それが分かれば、私たちも一緒に探せると思いますし……」
　サファイアが何時も比べるとしっかりしている気がする……そういえば、俺が忙しい時は孤児院に預けていたから、そのお陰で幼児と話す時は緊張とか人見知りとかしないのかもな。口調は何時ものままなのが、サファイアらしいとも言えるがな……
　その孤児院には、あの事件で助けた子どもを引き取ってもらったりと色々と俺もお世話になっているだけどな。アルシアの為に集めた金もほぼここに寄付した。
「ママはね……栗色の髪をしてて、身長は１６０位。後、スバ……青色の短い髪のおねえさんと、オレンジ色の髪のおねえさんと一緒にいるとおもう」
「分かりました。エ、エインさん。一緒のこの子のお母さん探してくれませんか？」
　なるほどな。身長は俺（１６９ｃｍ）より少し低い位か……栗色の髪の人がどれ位の割合かは分からないが、こんなに夜遅くだから人も少ないだろう。それに、二人の少女と一緒にいるみたいだから、探すのは大変ではないと思う。
「それは別にいいが、用事が終わった後でいいか？」
　そろそろ、ウォーレスも色々な準備が終わっている頃だと思うから、部屋の番号などを聞いておきたいしな。
「は、はい。私は別に構いませんよ」
「うん。わかった」
　二人とも納得はしてくれたみたいで良かった。さて、行くか。

「ウォーレス。少しいいか？」
受付カウンターに着くと、ウォーレスがまだスタッフと話していた。
「どうかしましたか？　もう少しで終わるので、その後で部屋への案内をしようと思っていたのですがね」
「部屋への案内はいい。悪いが、部屋の番号と鍵を渡してもらえるか？」
本来はウォーレスに案内してもらう予定だったが、あの金髪の女の子の母親を探さないといけなくなったからな。
「それは構いませんが、どうしてですか？」
「母親とはぐれた子どもがいるから、その子の母親を探す事になってな」
「なるほど。その金髪の珍しい瞳をした子ですか……分かりました。部屋番号は『３５８』で、これが鍵です。後ついでに、こちらも」
ウォーレスは金髪の女の子を見て、納得したように言った。そして、俺は鍵と六課メンバーの情報を受け取った。部屋番号は「３５８」だな。忘れないようにしないと……
「悪いな。用事に付き合ってもらって。さて、お母さんを探――」
俺が歩き出そうとした瞬間に、女の人の大きな声が聞こえてきた。
「ヴィヴィオ～、何処行ったの？　なのはママはここだよー！！」
その女の人の声を聞くと金髪の女の子はとても嬉しそうに手を振り始めた。
「なのはママだっ！！　ママ～。ヴィヴィオはここだよ～」
金髪の女の子ヴィヴィオの声を聞いたのか、栗色の髪をした俺と同じ歳位の少女がこちらに向かって走ってきた。その様子を見て、ヴィヴィオも走り出した。
「ママッ！！」
「ヴィヴィオ！！」
二人は涙を流しながら、抱き合った。何にせよ、無事に出会えて

のだから良かった。
「良かったですね。無事にママに会えて」
二人の元にサファイアは足を運んだ。
「貴方がヴィヴィオの面倒を見ててくれたの？」
「い、い、いえ。わた、私とエインさんで……」
やはり、歳上だとうまくは喋れないか。まぁ、分かってはいたが……フェイトの時に普通喋れたのが不思議な位だな。
「いや、俺は殆ど何もしていない。サファイアがほぼ全部面倒を見てくれていた」
寧ろ、鍵とかを貰いに行くので邪魔をしてしまったくらいだ。それに、転ぶ時も咄嗟に動けなかったしな。
「そうなんだ。でも、ありがとう。二人のお陰で無事に出会えたしね。ヴィヴィオ、ちゃんとお礼言った？」
「あっ！　まだいってない。ありがとう。おねえちゃん！　おにいさん」
ヴィヴィオは深く頭を下げてお辞儀した。それにしても、歳の割りに礼儀正しいな。
「どういたしまして。本当に無事に出会えてよかったです」
「無事に出会えてよかったな」
俺たちも軽く頭を下げた。本当に俺は何にもしてないのにな……幼児だけはサファイアは本当に相手するの上手だからな。
「じゃあ、私たちはそろそろ部屋に戻ります。本当にヴィヴィオの事を有難うございました」
そう言って二人は仲良く手をつないで歩いていった。でも、あの歳で子持ちなのは、多少不思議ではあるが……気にする必要も無いか。
「さて、俺たちも部屋に行くか」
時計を見ると、もうすぐ日が変わりそうな時間になっていた。一応風呂とかも入りたいが、ウォーレスから貰った情報も早く見たい

しな。
「あ、あの、エインさん……」
俺が少し歩き出した時、後ろからサファイアに話しかけられた。
「どうした？　サファイア」
サファイアは左手を少し伸ばして、立っていた。
「ごめんなさい。何でもないです……」
サファイアは少ししょんぼりとした表情をした。一体どうしたんだろうか？
「そうか。なら良いが」
少し気になるが、追求してしまうと空気が悪くなってしまう様な……そんな気がする。

「とっても広いお部屋ですね」
数分ほど歩き、部屋に入るとすぐにサファイアがこう言った。
「そうだな。二人では広すぎるくらいだ」
下手したら、四人で泊まったとしても窮屈にならない位の広さだ。別にこんな広い部屋を用意してくれなくても良かったのにな。
「ベッドがふかふかです～」
サファイアはいつの間にか、ベッドの上で子猫の様にゴロゴロと転がっていた。
「そうか。今晩はよく眠れそうだな」
さて、それはそうとして、これから何をするかだ。もう寝るのも選択の一つだろうが、ウォーレスから貰った六課の情報も見ておきたい。だけど、風呂にも入っておきたい。流石にあれだけ動き回ったのだから、汗もかいているしな。
「サファイア。風呂はどうする？」
「は、はい。入りたいです」
なら、サファイアが入っている間に可能な限り六課の情報を見るのも手かもな。多分、風呂に入り終わったらサファイアは寝るだろ

う。睡眠を邪魔してしまうのは良くない。この方法が良さそうなのだが……

「分かった。悪いけど先に行っていてくれないか？　俺は少し用事があるからな」

「あ、あの、私一人だと迷ってしまうかもしれませんし、それに少し心細いので……で、ですので、出来ればエインさんも一緒に……」

俺だってこんな感じの答えが来る事は予想はしていた。本当はその気持ちに答えてやりたい。だけど、俺にはもうサファイアの事を第一に考えてやれるほどの余裕が無いのかもしれない。ある意味、サファイアと少し距離を取っておいた方がいいのかもな。結局、俺は誰も救えない。復讐者の俺が誰かを救えると考えている方がおかしいのだけどな……

「俺には時間が無いんだ。済まないと思っているが分かってくれ！」

俺は少し強めの口調で言ってしまったかもしれない。その様子を見て、サファイアは今にも泣き出しそうな表情になった。

「ご、ごめんなさい。我がまま言ってしまって……」

「いや、俺こそ悪かった」

サファイアに当たってしまうなんて、最低だ。サファイアのお陰で俺は人間でいられたようなものだと言うのに……サファイアに出会って、助けて、一緒に暮らして、俺は変われたのにな……出会ってなければ、きっと俺は救いようの無い屑になっていたかもしれないのに。

「ブルーウィング。悪いが、俺たちの着替えと眼鏡持ってきてくれないか？」

『了解。マスター』

俺がそう言うと、ブルーウィングは出現した。その後、青い光に包まれて、大きな二つの袋と眼鏡が現れた。その後、ブルーウィングはドアから外へ出て行った。

「では、行って来ますね。エインさん」

「ああ。気をつけてな。何か遭ったらブルーウィング経由で俺を呼んでくれ。直ぐ駆けつける」
サファイアは部屋を出て行った。さて、俺もやるべき事を終わらせて風呂入りに行くかな。

「ライトニングの情報は飛ばしても良いだろう。次戦う事は多分無いだろうし……」
俺は眼鏡を掛け、ウォーレスから貰った情報を読み始めた。
「スターズ3……スバル・ナカジマ。接近戦主体みたいだな。『シューティングアーツ』と言う格闘技法を使うか……使用デバイスはマッハキャリバー。ローラーブーツとリボルバーナックルか……後、戦闘機人であり、ＩＳは『振動破砕』共振現象を発生させる事で対象を粉砕する能力。その威力は骨まで及ぶか。これはかなり危ない能力だな……一等陸士。陸戦ＡＡ」
青色の短い髪をした少女の顔写真が印刷されていた。歳は十六歳で、少しボーイッシュな感じのする少女だった。まぁ、戦闘機人の意味は分からないが、まぁ、気にする必要も無いだろう。ローラーブーツでの機動力とリボルバーナックル、振動破砕による破壊力。当たれば一発で終わりだろうな。戦う事になったら、真っ先に倒さないとまずいだろう。陸戦と書いてあるから、空には飛べないと言う事なのだろう。これはとても有益な情報だ。と思ったが、ウィングロードと言う、道を作る魔法が使えるらしい。戦う場合けっこう不利だな……
「スターズ4、ティアナ・ランスター。こっちは遠距離戦主体だな。使用デバイスはクロスミラージュと言う二丁の銃方のデバイスか……幻術魔法が得意と言うのが厄介だが、一対一なら、そう気にするような相手でも無さそうだな。こっちも二等陸士、陸戦ＡＡランク」
次のページをめくると、オレンジ髪をした少女だった。歳は十七歳。射撃と言っても実弾を使う訳でなく、魔力による弾だ。それな

ら俺が傷を負う事は絶対に無い。後、接近戦用にナイフも使えるみたいだが、それも魔力によって生成される。それに、空を飛ぶ事も出来ない。

「スターズ2、ヴィータ。コイツも近接戦主体みたいだが、遠距離もこなせるみたいだな。デバイスは鉄の伯爵、グラーフアイゼン。ハンマー型のデバイスみたいだな。壊せない物は無い物はこの世に無いと言われている位の破壊力が自慢らしい。コイツは三等空尉、空戦ＡＡＡ＋」

次は赤い髪をした少し気の強そうな女の子だった。歳は八歳位で（表記は無かったので外見上推測）、はやての守護騎士の一人で『鉄槌の騎士』の二つ名を持っているらしい。五年前のあの時にはいなかったな……攻撃をまともに受ければ、終了。遠距離も鉄球によるもの、魔力で作られているかは分からない以上、警戒しておかなければならにない点を考えると、今までの中で一番厄介かもしれない。それに、コイツは空を飛べる。空戦と書いてあるしな。

さて、次はスターズ隊長か。これは確実に確認しておきたい情報だ。

「この人はあの時の……スターズ1、高町なのは。中、遠距離戦を得意とする砲撃魔道士。だが、近距離が苦手と言う訳で無さそうだ。使用デバイスはレイジングハート。杖の様な形をしている。一等空尉、空戦Ｓ＋。まさか隊長だったとはな……」

写っていた写真は紛れも無くヴィヴィオのお母さんの物だった。攻撃は全て魔力による物だから、ダメージを受ける危険性は無いだろう。だが、空戦と言う点は厄介だ。しかし、戦うのに躊躇いが無い訳ではない、そういった意味ではフェイトの時も同じではあったが……

もしかしたら、だが、スバルとティアナもこのホテルにいるのかもな。さっき、ヴィヴィオが言っていた二人がそうかもしれない。

「この人は……俺に飲み物の場所を教えてくれたり、助けてもらった人だな……」

次のページには六課のロングアーチ数人の情報が書いてあった。その中にあった、金髪の女性シャマル。コイツのヴォルケンリッターの一人「湖の騎士」。それがあの時、俺に色々としてくれた人だった。考えてみると、以外と六課メンバーとの関わりは多いな。他には、普段は狼？の様な姿をしているが、人の姿にもなれる「盾の守護獣」ザフィーラ。ヘリのパイロットも出来る、狙撃主ヴァイス・グランセニック。スバルの姉ギンガ・ナカジマ。陸士１０８部隊隊長で、スバル・ギンガの父。ゲンヤ・ナカジマなどの情報があった。予想遥かに超えた人数がはやてに協力している事に驚いた。邪魔をする以上、全員斬る覚悟だってある。

「一通り目を通した。そろそろ行くか」

その為にも休む時間は多く取りたい。俺は風呂場へと向かった。

１０章　休息の時（後書き）

誤字、脱字、感想などあればお願いいたします。

11章　復讐者としての自分（前書き）

少し2週間ペースより遅れてしまいましたが、お楽しみください。

１１章　復讐者としての自分

「以外と広いのだな。人がいないからそう感じるのかも知れないが」
案内を頼りにして、俺は数分ほど掛けて辿り着いた。そして、風呂に入ろうと扉を開けた。
（今頃サファイアはどうしているのだろうか？　ブルーウィングから連絡が来ない以上、問題は無いと思うが……）
サファイアの事も気になるが、きっと何も無いだろう。それに、気にしすぎるのも今後は良くないしな。
俺はそんな事を考えながら浴槽に浸かった。
「こんな時間に誰か入ってくるとは。もう少し、一人でこの広い風呂を満喫しようと思っていたのだがな」
突如、声に声を掛けられた。声質から察するに中年位だろう。人がいないと思っていたから、少し驚いた。
「それは済みませんでした。少し前にホテルに着いて、やっと風呂に入れるところでしたので」
声のした方を向くと、紫色の髪をしたおじさんがいた。威厳のある顔つきをしていて、体格もかなり良い。軍とかに所属し、指揮を執っていても違和感が無かった。眼鏡が湯気で曇ってしまっているので、顔ははっきりとは見えないが、この顔もしかして……
「そうなのか。こっちも色々と忙しくて、やっとゆっくりと風呂に浸かる時間が出来たところだったからな」
眼鏡の曇りを取り、その男の顔をじっくりと見てみると、資料に載っていたゲンヤ・ナカジマの顔そのものだった。俺の正体はばれていないだろうから、警戒する必要は無いと思うが。
「大変なのですね」
「ああ。今日は何時もと比べて本当に大変だった」
その原因の５０％は俺が起こしただろうな。後の半分はウォーレ

スたちがやった事だろう。そういえば、ウォーレスたちは失敗したと言っていたが、その内容は詳しく知らない。明日にでも聞いてみるか。もしくは――

「差支えが無いようなら、何かあったか教えてもらいたいのですが……」

この場でゲンヤから少しでも聞き出しておくのも手の一つだろう。ただ、慎重に行わないとな。

「詳しくは言えないが、二つの主要な施設が何者かの襲撃を受けた。まぁ、明日になれば報道されるだろうけどな」

やはり、そう上手く情報を口にしたりはしないか。もう少し頑張ってみるべきか……

「あの――」

俺が話し出そうとした瞬間、ゲンヤは立ち上がった。

「そろそろ、俺は上がるとするわ……まだ何か聞きたい事でもあったか？」

「いえ、大した事では無いです」

ここで変に呼び止めるのも怪しまれそうだ。ウォーレスに聞けば、表に出ないような情報も手に入るだろう。まぁ、必死なって手に入れるようなものでも無いしな。

「そうか。じゃ、お先に」

そう言ってゲンヤは脱衣所へと歩いていった。俺はもう少し入って。

（あの資料を見た感じでは、一番厄介なのはヴィータと言う奴だけど）

他の奴は魔力のみしか攻撃手段を持っていなかったり、空を飛べなかったりと勝算はある。だけど、ヴィータはその両方にも当てはまらない。スバルもそうだが、ウィングロードの対策は無くは無い。寧ろ、一番の問題は……

（クラウン・シャドーフォールの事だ。コイツは俺の事を知られてはならない事を殆ど知っていた。それに、奴はあの時の戦いは全力

では無かった。情報も無いし、何よりアイツは魔導士では無いだろう）
俺の右目の事、師匠との約束。サファイアの事もクラウンは知っていた。その反対に、俺は奴の事をほぼ知らない。
（何より勝つしか無いだろう……な）
そんな事を考えていると、誰かが風呂場に入ってきる気配がした。
「いや～やっと風呂に入れるッス。今日は本当に忙しかったッスねぇ。おっ！　誰も居ないみたいッス。一人でこんな広い風呂を貸し切りなんて幸運ッス」
入ってきた人物は何処かで聞いた事あるような不思議な語尾をしていた。まかさ――
「よく見たら先客がいたみたいッスね。こんばんは～ッス」
俺の姿を見つける、とその男は俺の方へと向かってきた。そして、挨拶をしてきた。
「まさか、お前とこんな所で出会うとはな」
その男の姿をはっきり見て、確信した。八神はやてを殺そうとした所を妨害して来た。茶髪の髪をした男、クラウン・シャドーフォール。ソイツが俺の目の前にいた。
「それはこっちの台詞ッスよっ！」
お互いに予想外な展開だろう。思わず俺たちは立ち上がってしまった。正体がばれている奴との接触は俺としてはかなり避けたいものだったのだが。
「俺はそろそろ出たいのだが、退いてもらえるないか？」
クラウンが退く気が無さそうだ。俺は少し強引に進んでいった。もしかしたら、武器を隠し持っている可能性も捨てきれないので、油断は出来ない。やはり、この場にいるのは色々と得策では無さそうだしな。
「一つだけ聞いてもいいッスか？」
俺が数歩ほどた時、クラウンに呼び止められた。口調そのものは何時もどおりだが、その言葉からは重い何かを感じた。

「何だ？」
俺は足を止め、クラウンの言葉に耳を傾けた。
「……エインにとって、”復讐”って何なんッスか？」
「生きる意味であり、叶えなければならないものだ。たとえ、どんな犠牲を払ってもな」
「そう言うもんッスか……多くの物を捨てて、関係ない人を傷付けてまでする事なんッスかね？」
「お前には分からないだろうな。俺の気持ちなんか……」
村人を全員氷漬けにされ、大切な人を目の前で殺された。そして、運ばれた病院では生きている事そのものが地獄の様な日々。そんな日々を送れば心だって壊れるさ。それに、俺は”今まであった感情”だって押し殺した。
事件前の俺は何に対してもやる気が無く、特にアルシアにはよく呆れられていたり、怒られたりしたな。最初の頃はだが、今はそんな事は感じなくなった。今の俺と事件前の俺。どっちが良かったのだろうか？
「過去の事は大体知っているッス。俺にも色々あるんッスよ。だだ、一つ言えるのは、そういう気持ちも百％分からない訳じゃ無いッスから」
その言葉を発したクラウンの瞳の奥からは、怒り。いや、違う、そんな生易しい物ではない。憎悪と言っていい感情を感じた。
「……そうか。今度こそ上がらせてもらう」
さて、やっと出られるな。予想より長く入っていたせいで、体が熱い。それはそうと、サファイアはどうしているだろうか？　風呂の外で待っていれば会えると思うが。
「……復讐をしたいと思ってのは自分だけだと思わないで欲しい……ッス」
クラウンの発した呟きに俺は気づく事は無かった。

「遅いな。サファイア……」
俺は寝間着に着替え、脱衣所から出た。それにしても、俺より早く入ったサファイアの方が遅いのはとても不思議だな。先に部屋に戻っているのかもしれないが。
「探しましたよ。エインさん」
椅子に座って休んでいると、ウォーレスが歩いてきた。
「一体何の用だ？　出来れば手短にしてもらいたいのだが」
今は何よりサファイアを探す事が最優先だ。聖王教会の事も詳しく聞きたいが、また明日にでも聞けば良いしな。
「あまり表では出来ない話なので、私の部屋に来てもらえますか？」
「明日ではダメなのか？」
「出来れば今日中に済ませておきたいと思いましてね。明日は私も忙しいですからね」
サファイアの事も気になるので、ここは断るべきか。それとも、ウォーレスの話を聞きに行くべきかな？　話の内容は多分六課襲撃の計画の話だろう。別に前みたいに一人でも、問題は無いと思うが、失敗した事を踏まえると……さて、どうするか。
「一度失敗のですから、情報は大切だと思いますよ。もう後も無いでしょう？」
痛いところを突かれてしまったな。これで失敗でもしたら、今までの人生を全て無駄にするしかないのだからな……
「分かった。行こう」
俺はウォーレスの後に付いて、歩いて行った。
「で、話とは何だ？」
フォーレスの部屋は数分ほど歩いて到着した。部屋の中は俺たちの部屋と比べると狭く、置いてある物も必要最低限と言う感じだった。
「私たちは明日の夜に再び聖王教会に襲撃をします。出来れば、貴方にも参加して欲しいと思っているのですが、引き受けてもらえま

すか？」
「悪いがそれは出来ない。俺は八神はやてを今度こそ仕留めなければならないからな」
しかし、何故ウォーレスは俺を誘う？　現段階で俺が聖王教会に行く理由など無いのにな。もしかしたら、何かあるのか……
「そうですか……六課側にこちらの切り札を送ろうと思っていたのですが、検討し直さなければなりませんね。はぁ……」
ウォーレスは心底残念そうに言った。そして、本当に悩んでいる様子だった。もしかして、切り札と言うのが悩みの種なのか？
「その切り札とやらに何か問題でもあるのか？」
問題のある物が切り札と言うのも不思議な話だけど。もしかして、失敗したとか言っていた原因なのか？
「そうなんですよ。確かに、聖王教会の魔道士は大量に殺せましたし、主要な魔道士にも致命傷は与えられました。渡した資料に書いてあった、ギンガ・ナカジマ。後、聖王教会のシスターシャッハ・ヌエラ。二人は多分もう戦える状態ではないでしょう。ただ、味方の方の被害も甚大で……」
なるほどな。そういった経緯で他の場所に送りたいという訳か。気持ちは分からない事も無いが、そんな事情は俺の知った事ではない。
「悪いな。俺にはやらなければならない事があるのでな」
「いえ、そのような答えが出るのは分かっていました。一応聞いてみただけです」
「そうか、なら俺はそろそろ――」
俺が部屋を出ようとした時、ウォーレスが話しかけてきた。
「もしかしたら余計な事かも知れませんが、ブルーワイバーン……いえ、今はブルーウィングでしたね。それの調整をしようと思うのですが、どうでしょうか？」
ブルーウィングの調子はフェイトとの戦いの後からかなり悪くなっている。今後の戦いの選択肢として、ブルーウィングが使えるよ

うになるなら大分有利になるだろう。特に、ヴィータとの戦いでは重宝するだろうな。ウォーレスもこのデバイスの制作に関わっていたので、託してもいいのかもしれない。あまり信用できる人物では無いが、デバイスの事なら任せられるだろう。
「分かった。頼む」
「そうですか。明日の朝には調整が終わると思います」
以外と早いのだな。もう少し掛かると思っていた。用も無さそうみたいだし、早く部屋に戻らないとな。
「もう用が無いなら、俺は部屋に戻る」
「いえ、もう用はありませんよ。ごゆっくり疲れを取ってください。それではおやすみなさい」
「ああ。おやすみ」
俺はウォーレスの部屋を後にし、走って自分の部屋まで戻った。しかし、断られると知っていて何故俺を呼び出したのだろうか……本題はブルーウィングの修理の方だったのかな？

「サファイアい――」
俺がドアを開けた瞬間に、女の人の声が怒った様な声が聞こえてきた。
「今まで何処に行ってたんですか！？　この子を一人にして……」
声のする方を見てみると、青髪の短髪の少女がこっちを睨みつけていた。この顔、あの資料で見たスバル・ナカジマ。だが、何故俺の部屋に……
「ちょっとスバル！　いきなりそんな態度はマズイって」
スバルの反応を見て、オレンジ色の髪の少女が慌てた様子でだった。こっちはティアナ・ランスターだな。やはり、二人はこのホテルにいたか。
「何故この部屋にいる？　返答次第では……」
あまり表立った事はしたくなかったが、相手が相手な以上仕方が

ない。
「ま、待ってください。エインさん。この人たちはお風呂で倒れた私を運んでくれた人なんです」
俺が二人に敵意の視線を送っていると、その前にサファイアが危なっかしい足取りで歩いてきた。
「サファイアいたのか！？　また倒れたって本当なのか！？」
「は、はい。少しお風呂に入りすぎてしまって……」
のぼせたって訳か……また倒れたかと思って本気で心配したのだが、一安心だ。
「そうか。それならよかった」
正直ほっとしている。サファイアに何かあったら明日の事に集中出来ない。小さなミスすら命取りになるだろう。特にクラウンとの戦いの時にはな。
「あ、あの……」
スバルが少し間の悪そうに話しかけてきた。声の感じも最初と比べてかなり弱々しくなっていた。
「さっきは悪かった。サファイアを助けてくれた人のに、あんな事を言ってしまって」
コイツらは俺の敵だが、今はサファイアを助けてくれた恩人だ。
「いえ。最初のスバルの言葉も喧嘩腰でしたし、お互い様です」
「だって～、サファイアちゃんとっても辛そうだったよ。とっても悩んでたよ！　そんな子を放っておくなんておかしいよ！！」
「だってじゃないでしょ！　もしかしたら、大事な用事があったかもしれないじゃない！！」
二人がいきなり口喧嘩を始めだした。このまま放置しておくと何時までも続けていそうな雰囲気だった。
「あ、あ、あの……け、喧嘩はやめてください」
サファイアが止めようと声を発するが。二人の耳に届いている気配は無さそうだ。ここは俺が何とかするしか無さそうだな。
「いや、青髪の子の言う通りさ。俺はサファイアに少し冷たかった

と思う。それに、今まで放ったらしにしていた。それは紛れも無い事実だ。二人とも、サファイアの事本当に有難う。」
今思っても、あの時の態度はかなりまずかった。いくら、あの資料を読むことが重要だったとしても、もう少し他の方法はなかったのでないかと思う。
「私たちはそろそろ失礼します」
「それじゃ、サファイアちゃんおやすみ～」
「スバルさん、ティアさん。おやすみです～」
そう言って二人は部屋を出て行った。その様子をサファイアは手を振りながら見送った。この二人とサファイアは仲が良くなってしまったみたいだな……さして問題は無いと思うが。

「そろそろ寝るか？　サファイア」
時計の針は一時を過ぎていた。いい加減寝ないと明日に響いてしまうだろう。だが、俺もやらないといけない事が残っているのだがな。
「エインさんは寝ないんですか？」
「俺はもう少し起きているが、お前は先に寝て方が良いと思う。また何かあれば、俺だって心配になるさ」
ゆっくりと休めば、きっと体調も良くなるはずだ。寧ろ、良くなってくれないと……
「エ、エインさん。一つ約束してくれますか？」
サファイアが真剣な口調で話し掛けてきた。一体何の約束だろうか？
「まず、内容を聞かない事には何ともいえないよ」
「あ、明日、一緒に町で……ケーキを食べてもらえますか？」
顔を赤くしながら、サファイアは一生懸命な様子だった。そうだな……復讐までの時間俺は暇だろう。それに、昼間では六課の連中も動きづらいだろうし、ウォーレスの事だって対応するだろう。多

分、問題は無い筈だ。
「ああ。分かった」
「い、いいんですか！　ありがとうございます！！」
サファイアはとっても嬉しそうだった。俺も出来る限りはサファイアと一緒にいてやりたい。
「そろそろお前は寝たほうが良い。明日には元気になる為にな」
「はい。おやすみなさい。エインさん」
「ああ。おやすみ。サファイア」
サファイアはベッドへと入り、俺は部屋の明かりを消した。さて、取り掛かるか……
「この手紙を書き終わったら俺も寝るか……」
机の灯りを付け、俺は紙を取り出した。この手紙はサファイアに当てた物。そして、これはサファイアへの俺からの”最後のメッセージ”になるだろう。

１１章　復讐者としての自分（後書き）

誤字、脱字、感想などあればよろしくお願いいたします。

１２章　意外な出会い（前編）（前書き）

何とか予定通りに投稿する事が出来ました。
今回はオリキャラオンリーになってしまいましたが、お楽しみください。

１２章　意外な出会い（前編）

「もう……朝か」
俺は目を覚まし。時計を見てみると、七時位だった。体の調子も大分良く、もう寝る必要は無さそうだな。
「サファイアはまだ寝ているみたいだな」
気持ち良さそうに、すーすーと寝息を立てているので、目覚めるまでそっとしておいた方がよさそうだな。まずは、軽く朝食でも済ませておくか。
「こんな紙、昨日は無かった筈だが……」
俺が部屋のドアを開けようとしたが、ふと違和感を覚え、部屋を見渡して見ると、視界に緑色の紙が入ってきた。その紙の内容を見てみると――
『……ホテルアグネス外の森で待っているッス。出来れば、八時位までに来て貰えると嬉しいッス。後、一人で着て欲しいッス。↑ココ重要ッスよ！！　ｂｙクラウン・シャドーフォール』
紙にはそう書いてあった。「一人で」と言う部分がかなり罠っぽい。勿論、行かないという選択視もあるが、逆にアイツを仕留めるチャンスとも取れなく無い。
「とりあえず行って見るか……」
俺はホテル外の森へと向かった。場所は紙に書いてあったので迷う事は無いだろう。だが、一体何の用だろうか……検討もつかない。
「この辺りまで来れば、人もいないだろう」
紙を頼りに歩いて行くと、大分森の深くまで来てしまったみたいだ。用心の為に武器を用意しておくか。これだけ深くまで来れば、第三者に見られる事も無いだろうしな。
「ブルーウィング。青雲を頼む」
『了解。マスター』
俺はブルーウィングを呼んで、青雲を受け取った。これがあれば

クラウンと戦う事になったとしても対応可能になる。
「おっ！　来たッスね。予想より速かったッス」
俺が来たのに気づくとクラウンは木の上から降りてきた。クラウンの服装はあの時と一緒の黒色の服で、「忍道」の書かれている帽子も被っていた。
「一体何の用があって、俺をこんな所に呼び出した？　俺と決着を付けるつもりなら、今すぐにでも……」
俺が青雲の抜こうとする様子を見てクラウンは慌てた様子だった。
「別にそういうつもりは一切無いッス！！　ただある人に少し会って欲しいだけッス」
クラウンの言葉を聞いて、俺は青雲を抜くのを止めた。なるほど、そう言う理由で俺を呼び出した訳か。だけど、一体誰が……
「ある人とは誰だ？　俺一人で来た事と関係あるのか？」
呼び出された理由は納得した。だけど、俺一人で来る理由が分からない。こっちとしては、サファイアを極力、一人にさせて置きたくないのだがな。昨日の件もあったし、時間が掛かってしまうならサファイアも心配するだろう。
「それは会ってからのお楽しみッス。一人で来てもらった理由は、まぁ……なんと言いますか、つまり、事が複雑になるって言う事ッスかね……」
「よく分からんが、ソイツは何時になったら来るのだ？」
クラウンの歯切れの悪そうな物言いから考えるに、言いづらい事なのか？　それとも、これは罠の可能性もあるのかもしれない。
「う～ん、もうちょっとしたら来るんじゃないッスか？　それまで話でもして待っているッス」
「俺はお前に話す事など無い」
一体コイツは何を考えているのだ？　敵同士の俺たちが言葉を交わす理由は無い。もう少しで来るなら、それまで何もせず待っていれば良いだけの事だ。
「そんな事言わない欲しいッス。お話しようッス！」

それでも、クラウンはしつこく俺に話し掛けて来る。
「何故お前は敵である俺と話したがるっ！」
昨日風呂を出る時も俺の事について聞いてきたが、クラウンの狙いは何なのだ？
「俺はただ、君の本当の気持ちが知りたいだけッス」
クラウンは笑顔でそう答えた。顔は笑っているが、目はまるで獲物を狙う狩人の様な目つきだ。今思うと、あの時に見た瞳の感じ、コイツも何か秘めた思いがあるのかも知れないな。
「俺の目的は八神はやてに復讐をする事。それ以外の事など何も無い」
「やっぱりそういう答えしか出てこないッスね……」
少し呆れた顔をしてクラウンは言った。俺はその為だけに生きてきたと言うのに、俺にそれ以外の何を考えろと言うのだ？
「質問を変えるッス。何故エインはあの子……サファイアと一緒にいるんッスか？」
今度は面倒な質問を。助けた理由か……色々とあるが、この場で一番適した回答は――
「俺が言うのも変な話だが、その時の俺は誰かを救いたいと思っていた。あの時は誰一人救えなかった……からな」
助けたと思っていた子どもが、実は実験体として死んでいった事。罪滅ぼしの時、自分を抑えられなかった事。アルシアの事も結局は何の力にもなってやる事が出来なかった事。それを俺はかなり気にしていた。所詮は偽善だと言う事は分かっている。俺は復讐者なのだからな。風呂でクラウンの言っていた通り、多くの物を捨て、関係ない人を傷付けてまでするような事ではない。本来は……な。
「でも、結局はその子だって救えないんじゃないんッスか？　エインの望む結末は大体想像出来ているッス」
俺は言葉を発する事は出来なかった。クラウンの言っている事は俺の一番触れられたくない部分を的確に射抜いている。あの手紙だって気休めにすらならない物だというのは自分でも分かっているさ

……でも、それ以外に解決策が思いつかない。
「エインは何も分かってないッス。自分がどれだけ――」
クラウンは何か重要な事を言おうとしてようだが、その途中で話すのを止めた。
「そろそろ来る頃ッスね。邪魔者の俺は退散するッス！」
そう言って、クラウンは森の中へと急いだ様子で森の中へと入って行った。
「おい。待てよ！！　一体何を言おうとしていた！！」
俺の声はクラウンには届いてないのか、それとも無視されているのか分からないが、クラウンからは何の返事も無かった。本当にクラウンは何をしに来たのだろうか？　クラウンの言う事が正しいのなら、もうすぐ誰かが来るのであろう。でも、誰が来るのだろうか？
「誰も来ないな……」
数分ほど経った頃だろう。しかし、誰も来ないな。寧ろ、森は静寂に包まれていて、人の来る気配が一切感じられなかった。やはり、クラウンに騙されたのか？　なら狙いはもしかして――
（ターゲットは最初からサファイア？　そうだとすれば、俺を一人で来させた理由も分かる。だが、クラウンは俺についての情報は殆ど知っていた筈。なら、わざわざこんな手間をかけてまでするような事とは考えにくい。だが、クラウンがブルーウィングの性能を知っているかはまだ不明だ。だからこそ潰してくる可能性も。でも、今からアイツを追って間に合うのか？　それに、行って何もなんでもなかったら無駄足になる。それに、俺に会いたいと言う人にも迷惑が掛かってしまうだろう……）
考えれば考えるほど疑心暗鬼に陥っていくな……何にしてもクラウンの情報が不足しすぎている。だからこそ、こういう事になってしまうのだろう。それで、本当にクラウンに勝てるのか？
弱気な考えになってはダメだな。もう少し冷静にならないと。サファイアに何かあるようなら、ブルーウィングがすぐに現れる筈だ。

いやしかし、修理中かもしれない。ウォーレスは朝には直ると言っていたが……そこは賭けになるが、仕方ないか……何よりもう少し様子見をするか。
「ここにいたか。エイン・ウィンゲル！」
突如、数人の男が木々の間から現れた。男たちは全員体格がよく、手に大きな剣を持っている。やはり、クラウンの罠だったか。
「クラウンやってくれたな……聞くのは野暮な事だと思うが、俺に何の用だ？」
「そうなの決まっているだろ？　お前の命さ。お前の事を邪魔に思っている人がいるのでなっ！！」
男たちは剣を両手で持ち、俺の方へとゆっくりと向かってきた。やはり、予想通りの返答か。クラウンにとって、八神はやてを守るという意味で、俺は一番の障害だ。俺を始末しておきたいと思っているのだろう。
「悪いが、俺はまだ死ぬ訳には行かない。目的を達成するまでは……な」
俺は青雲を素早く抜いた。相手は数人だから、一人一人対処していくのが良さそうだな。敵の技量がまだ分からないが、多分、大した相手では無い。万全な状態の俺なら負けるは無いだろう。

「疾風一閃」
まずは手近な奴から片付けるか。近い相手にこの技は余り効果的では無いが、クラウンが監視している可能性をある。出来るだけあの時使った技以外は使わない方がいいだろう。
「は、速い」
俺が斬り抜けた様子を見て、他の奴らは口を揃えてそう言った。最大速度の１５％位しか出していないが、この反応を見ると、対応は出来ていないみたいだな。やはり、恐れるような相手ではなさそうだ。だが、油断は出来ない。クラウンの事だから、何か他に手が

あっても不思議ではないからな。
「旋風衝波！」
俺は咄嗟に振り向き、剣を素早く振り二発の衝撃波を男達の方へと飛ばした。衝撃波は両方とも直撃し、当たった男達は地面へと倒れて行く。
「死ねえぇぇーーーー！！」
背後から男の殺意のこもった声が聞こえて来る。俺は男の斬撃を青雲で受け止め、振り返り様に斬り付けた。男は流血を少ししているものの、命には別状は無いだろう。
「つ、強すぎる……黒川の弟子と言うのは本当みたいだな……一旦逃げよう！！」
男たちは出血している仲間の様子を見て、散り散りとなり、逃げて行く。全員倒す事が出来るか分からないが、やるしかないな。一人でも逃がせば、増援が呼ばれる可能性がある。本来、俺はこんな所で時間を使っている場合では無い。サファイアもそろそろ起きた頃だろう。
「逃がしはしない」
俺は全速力で、男たちを追い、一人、二人、三人と次々に斬って行った。全員片付けるのが目的なので、全方位を見渡し、一番近い相手を斬る必要がある。これではかなり体力を使ってしまうのは分かっている。自分でも今の状態ではかなり無茶な事をしていると思っているが、早め終わらせたいからな。
「どんどんやられていく……アイツ本当に人間なのか？」
残り二人になると、片方が立ち止まり、そんな事を呟いた。数はかなり減ってきているが、まだもう少し掛かりそうだ。
「立ち止まっていていいのか？　次はお前だ」
「い、いつの間――」
言葉を言い終わる前に、俺は背後から斬り捨てた。急ぎすぎたか、予想より出血量が多いな。でも、命に関わるほどでは無い。
「ぎゃぁぁぁぁーーーーーー」

男は悲鳴を上げながら地へと伏せた。少し冷静にならないとな。俺は八神はやて以外の人間を殺す事が出来ない以上、神経質にもなってしまう。この約束を破ってしまったら――

「お前で最後だな？　悪いが眠っていてもらおうか」

最後の一人を峰打ちで気絶させ、俺はこの場を去ろうとした。改めてみると凄い光景だな。何人もの男が倒れ、殆どが血を流している。急所は全て外しているが、放置すれば、死人が出てしまう可能性もゼロではない。

「自分で斬っておいて言うのも何だが、コイツら如何するべきか……何より早く戻らないといけないのだがな」

ここは森の奥だから、誰かが探しに来る可能性も低い。しかし、俺が助けを呼ぶのもまずいだろう。今思うと、面倒な事を背負い込んでしまったかもしれないな。どの道追われる身だから、あまり関係の無いのかもしれないが……

「派手に俺の子分たちを可愛がってくれた……みたいだな？」

俺がホテルへ戻ろうと歩き出した瞬間、ずっしり重そうな鎧に身を包んだ大男が現れた。手には大きな斧が握られている。この大男がコイツらの親玉なのか？

「悪いが、先を急いでいる。そこを退いてもらえないか？」

外見から俺を狙っているのは分かっているが、俺もいい加減戻らないと、サファイアが心配だ。それにコイツにこの事態の後始末を押し付ければ、この状況も何とかなるだろう。

「それは無理な相談だな。俺の目的はお前の命なんでなっ！！」

大男は斧を大きく振りかぶり、そのまま振り下ろした。明らかに当たれば即死級の威力だろう。攻撃そのものは回避する事は出来たが、この大男はさっきの奴とは違い、かなりの腕だ。手の内を隠しながら戦って、勝つのは難しいだろう。重装だから、動きは相当遅い点がまだ救いか。ここは逃げると言う手もある。別に戦わなければならない理由もないしな。

（どうする？　戦うのか、それとも、逃げるのか。どちらかと言え

ば、逃げる方が得策だろう。だが、途中でクラウンに襲われる可能性もある点を考えると……）

俺は大男と距離を取り、今後の事を考えるのが得策だろう。やはり戦う意味はほぼ無いだろう。そもそも、クラウンがこんな手間をかけた後に俺を襲いに来るとは考えにくい。

「何を考えているか知らないが、逃げるなんて手は取らない方がいいぜ」

「言っている意味が理解できないのだが、俺としては無駄な戦いはしたくないのでな」

無意識に逃げ腰になってしまったのか、考えを読まれてしまったのか？　どちらにしろ、今の状態で俺が戦う意味は皆無だ。一体何を考えている……

「お前は復讐者だが……人間としての偽善的な部分、いや甘さといった方がいいかな。それがある。おい、さっき捕まえた奴を連れて来い！！」

大男の合図で二人の男が一人の気を失った金髪の少女を連れてきた。その少女を俺は知っているような気がする……

「何でお前がっ！？　いや、こんな所にいる筈は無いのだが……何故だ……まさかっ！！」

顔をよく見てみると、俺のよく知っている人物だと言う事に気づいた。でも、ソイツはミッドチルダにいる筈が無い。ソイツは今も俺のいた世界で……クラウンが言っていた会わせたい人って、もしかして――

「……アルシア。どうしてお前がここに」

囚われている金髪の少女はアルシア・スプリングフィール。五年前の八神はやての襲撃の時、俺以外の唯一の生き残ったナタリーの妹。その後、病院で俺を殺そうとした奴でもあるが。でも、その後は元気になり、バイトをしながらも、魔法学校に通っていた。確か去年で卒業した筈だと思う。まさかミッドチルダに来ていたとはな……何より自体は最悪だ。逃げ出すなんて事は出来る訳が無い。色

々とあったとは言
え、大切な人である事に変わりは無いからな。

１２章　意外な出会い（前編）（後書き）

久しぶりに戦闘描写を書いたので、変になっていないといいのですが……

誤字、脱字、感想などあればよろしくお願いいたします。

クリスマスコラボ（前編）　平穏な聖夜（前書き）

本当にギリギリですが、何とか２５日中に投稿できました。
ですが、時間の都合上、前編後編という感じで分かれてしまいました。まだ登場していない先生方のオリキャラもいますが、後編では必ず出します。
前奏曲先生、イツキ先生、星光の殲滅者先生、ご協力有難うございました。

クリスマスコラボ（前編）　平穏な聖夜

「寒くなってきましたね」
　雪が降り積もる道を一人の少女が無邪気に歩いていた。その少女は青玉の様に透き通った長い髪。同色の瞳。身長は百三十ｃｍほどで、少し気弱な雰囲気のする顔立ち。服装は青と白のワンピース。首には白いマフラーをしている。少女の名前はサファイア。
「ああ。そうだな。だけど、いきなり立ち止まるのは危ないぞ。サファイア」
　サファイアが立ち止まり、振り返る様子を見て、一人の青年がサファイアに話し掛けた。その青年も青い髪、瞳をしている。身長は百七十ｃｍほどで、眼鏡を掛け、研ぎ澄まされた刃の様な冷たさ、近寄りがたさを感じる、でも、寂しさも感じる顔つきをしている。腰に六十センチほどの刀を差していた。それも相まって、青年を威圧的にしているのかもしれない。その青年の名前はエイン・ウィンゲル。
「あ、はい。ごめんなさい」
「今度から気をつけてくれよ」
　エインは少し優しげな表情で注意をする。
「は～い♪」
　サファイアはにっこりと笑いながら返事をした。
「そういえば、後一週間でクリスマスですね。あ、あの……エインさん今年もケーキ作るんですか？」
　数分ほど歩くと、エインはサファイアに話し掛けられた。ケーキという単語を口にしてから、サファイアの目はまるで星の様にキラキラしている。
「どうだろうな。去年は特に依頼も無かったから作れたけど、今年はどうなるか――」
「つ、作ってくれないんですか……」

エインの返答を聞いて、サファイアは今にも泣き出しそうな表情になった。
「わ、分かった。出来る限り頑張るからっ！！」
サファイアの様子を見て、エインが咄嗟に声を張り上げた。
「とっても楽しみにしていますよ。エインさん♪」
そう言ってとても嬉しそうにサファイアは再び歩き出す。
（そうか、もうクリスマスなんだな……）
エインは動こうとせず、辺りをゆっくり見渡した。空からは雪が降り、木々は雪化粧をしている。町並みも、クリスマスシーズンへと移る準備をしていた。
エインにとってクリスマスはもう一つ特別な意味がある。その日は十八回目の誕生日の日だからである。
（クリスマスを祝うのも二年前からか……五年前の”あの事件”から俺は大きく変わって、壊れてしまったのかもしれないな）
エインの表情が僅かに曇る。だが、瞳からは憎悪すら感じるほど鋭くなっていた。
（今はまだ足取りは掴めていないが、いつかは――）
「エインさんどうかしたんですか？」
数十メートル先からサファイアが心配そうに戻ってきた。その様子を見て、エインは優しげな表情になる。
（サファイアと出会えて少しは変われたのかも……しれないな）
サファイアの顔を見たエインはふとそんな事を思った。
「いや、何でもない。すぐ行く」
二人は白銀の道を歩いき、家まで帰っていった。
「エインさん。お手紙が届いていますよ」
先に家に入り暖を取っていたエインの前にサファイアが赤色の手紙を持ってちょこちょこと歩いてきた。
「サファイア済まないな」
エインはサファイアから手紙を受けとり、封を開ける。そこには差出人は不明だが、クリスマスパーティーの招待状が入っていた。

「……クリスマスパーティーか」
招待状を見つめ、難しい顔をしながらエインはつぶやいた。
「クリスマスパーティーがどうかしましたか？　エインさん」
エインのつぶやきが聞こえたのか、サファイアが興味ありそうに尋ねる。
「手紙の内容がクリスマスパーティの招待状みたいでな。だけど、差出人不明の部分が怪しいから、俺は行くつもりは無いが……」
エインがこのクリスマスパーティの参加をしないと判断した理由は差出人不明な点がやはり大きい。
もしかしたら、誰かの罠かもしれないと言う疑念があるからだ。
「あ、あの、その招待状見せてもらっていいですか？」
「ああ。いいよ」
エインはサファイアに招待状手渡した。サファイアが招待状を見た瞬間に頬をゆるませるが、エインの顔を見ると、がっかりした表情になる。
「あ、あの……エインさん。このクリスマスパーティにさ、さ、参加し、しませんか？」
「どうしてだ？　サファイア」
サファイアの弱々しい言葉にエインは表情一つ変えずに返答した。
「こ、これを見て下さいっ！！」
少し顔を赤くしながらサファイアが招待状をエインに再び見せる。
「……なるほどな」
エインはサファイアがクリスマスパーティーに行きたいと言った理由を理解した。招待状には『ケーキ食べ放題』の文字が書いてあったのだ。クリスマスパーティの招待状だと言う情報だけを見て、それ以外の事に全く興味を持たなかったエインは勿論、他の事まで目を通す事は無かった。
「ダ、ダメでしょうか？」
サファイアが上目遣いでエインを見つめる。その様子を見て、エ

インはまるで”兄”が”妹”に掛ける様な笑みを一瞬浮かべるが、すぐに、冷静な顔へと戻す。
「駄目と言う訳ではないが、サファイア。悪いが、招待状をじっくりと見せてくれ」
「あ、は、はい」
サファイアから招待状を受け取り、エインは真剣な眼差しで目を通した
（……場所的にはそう遠くは無い。二日ほどで着くだろうが、その辺りの地理は分からないから、時間がある時に調べておくか。問題はどういう面子が参加するかだな）
「あ、あの……」
サファイアの声をエインは聞こえてはいたが、反応はしない。今のエインはこのパーティーに参加する為にどんな問題があるか真剣に考えているからだ。
（規模も分からないし、万が一戦う事になる可能性も０ではない。殆どの事は対処出きるだろうが、最悪の場合……やはり、危険だと判断した場合は逃げればいいか）
数分ほど思考すると、エインは口を開く。
「分かった。行こう。サファイア」
「本当ですかっ！？　ありがとうございます。エインさん。”ケーキ楽しみにしていますね♪”」
しょんぼりとしていたサファイアの顔に笑顔が戻った。最後に言った『ケーキを楽しみにしている』と言う部分をエインは気がかりに思い、再び招待状を見る。そして、見逃していた最後の文の内容を見てエインは納得した。
（そういう事だったか。何処でこの事を知ったか分からないが、俺はケーキ作成の手伝いをしなければ
ならないみたいだな。別にそこまで嫌いではないのだから、そう気にする事も無いが）
エインにとって戦闘が絡む依頼はよくしていたが、こういった類

の事はまず来る事は無い。内心では嬉しかったのかもしれない。たまには息抜きが出来るかもしれないと……

・新暦７５年　１２月２５日　１２：３０

「少し早く着いてしまったみたいだな。少し余裕を持ちすぎたか……」

エインたちは船を使って、孤島に着いた。その後、招待状を頼り数分ほど歩くとに目的の場所へと向かうと、エインたちは大きな建物が視界に入ってきた。

「さ、寒いです……」

サファイアは体を建物の周辺は森に囲まれていて、雪も豪雨のように降り注いでいた。サファイアも厚着をしていると言っても、エインの予想以上にこの土地は寒かったのだ。

「サファイア。これを着ていろ」

エインは自分の着ていたジャケットを脱いで、サファイアに被せた。

「あ、ありがとうございます。でもこれだと、エインさんが寒いんでは無いですか？」

「全く気にならない訳ではないが、別に平気だよ」

サファイアはエインを心配そうに見つめる。それにエインは微笑みながら答えた。勿論、本当はエインもこの肌を突き刺すような冷気に体を震わせていたのを隠すのに精一杯であった。

「そうですか……とっても暖かいですよ。エインさんっ♪」

サファイアは満面の笑みで浮かべる。元気になったの様子を見て、エインも安堵した。

「あの、貴方たちもクリスマスパーティの参加者ですか？」

背後から聞こえた声に反応し、エインは振り向いた。目に映った

のは、栗色の髪をした少年であった。身長は１６０ｃｍほどで、年は一五歳前後。腕には白い腕輪をしている。
「ああ。そうだが」
エインは冷ややかにそう答えた。
「あ、あの……会場はまだ空いてないんですか？」
栗色の髪の少年はエインの人間味がない冷たい感じに押されたのか、弱々しくに尋ねた。
「そうみたいだな。多分その内開くとは思うが――」
「だから、言っただろ。もうちょっと後の船で来ればって」
エインが話している途中、吹雪の中から一人の少年が歩いて来る。
その少年は緑色の髪をしていた。身長は栗色の少年より少し高い位で、年は多分同じであろう。この少年は指輪を付けている。
「う～ん。やっぱり一つくらい後の船で来ればよかったかな？　久しぶりのお菓子作りだから、楽しみでつい……」
栗色の髪をした少年は少し悩んだ感じで答えた。
「あ、あのっ！！　お菓子って事は、ケ、ケーキも作るんですかっ！？」
エインの背中の裏で隠れていたサファイアは”お菓子”と言う単語に誘われて、ひょっこりと顔を出した。
「うん。作るよ。でも、僕のお菓子、皆に美味しいって言ってもらえるかな？」
栗色の髪をした少年はにっこりと答えた。後半の口調からは不安のような物も感じる。
「あっ……」
サファイアは顔を熟れたイチゴのように赤くなり、エインの背中に再び隠れてしまった。
「逃げられちまったな。でも、お前の実力なら大丈夫なんじゃない？　なんせお店に出しても大丈夫って言われている位だしなっ！」
緑髪の少年は栗色の髪の少年を励ますように言った。
「そうなのか。なら、俺の出る幕は無いかもな」

エインのお菓子作成の技術はサファイアにせがまれて覚えたショートケーキの作り方以外は殆ど分からない。ケーキ以外にもは幅広く作れる、それも、お店に出せるレベル位の相手ではエインは勝負にならないと、自分が出る意味は無い。そう判断した。
「そ、そんな事無いですよ。エインさんのケーキ、わ、私大好きですよっ！！」
「僕はお菓子作りは実力だけじゃないと思います。誰かに美味しいって思ってもらいたい、嬉しい気持ちになってもらいたい、そういう気持ちも大事だと思います」
二人の応援の言葉にエインは元気を取り戻した。
「そうか……そうだよな」
エインはサファイアがいくら美味しいと言ってくれていても、自分の腕が大した事が無いのは分かっていた。店で売っているケーキと食べ比べても、明らかに劣っている。でも、だからと言って、頼まれた事を放棄する理由にはならないと。エインはそんな単純な事に気づいたのであった。
「大丈夫。味見なら任せてくれ。舌には自信があるからっ！」
「ああ、頼んだ。扉も開いたみたいだから、入るか」
突如扉が開き、二人の少年は建物の中へと入っていく。その後に続き、エインたちも建物の中へと、足を進めた。

「すげぇ豪華だな。それにめちゃ広いじゃん！！」
「本当だね。まるでお城みたいだ」
建物に入った瞬間、二人の少年は嬉しそうに声を上げた。
「エインさん。見てください！　とっても広いですよ～」
サファイアもニコニコとしながらエインに話し掛けてきた。
「ああ。そうだな」
エインは冷静に答え、建物の見渡し始めた。建物の内装は絵画などで綺麗に飾られ、沢山の蝋燭で彩られていた。奥には大きな扉が

ある。辺りにはエインたち以外に人の気配は無い。
「そういえば、まだ名前を聞いてませんでしたね。僕はコルト・リバディって言います」
「俺はブルズ・アルフィード。よろしく～」
二人の名前を聞いたエイン。栗色の髪をした少年がコルト・リバディで、緑髪の少年がブルズ・アルフィード。
「そう言えばそうだったな。俺はエイン・ウィンゲル。よろしく。」
「サ、サファイアって言います。よ、よろしくです……」
エインも自分の名前を名乗り、サファイアは小さく会釈をする。
「さて、これからどうしましょうかねぇ？」
「奥の扉を開けて、人を探したほうがいいんじゃないかな。エインさんはどう思いますか？」
ブルズのそんな提案にコルトは答え、エインに意見を求めた。
「迂闊に動くのは危険な気もするが、まぁ、じっとしているよりはいいだろうな」
エインはクールに対応した。クリスマスパーティーの招待状を見た時からエインは警戒していた。その対象は隣にいる二人の少年にも向けられている。
「よしっ！　なら進もうか！！」
ブルズが先頭に立ち、扉を開けて前に進んでいく。その後ろにエインたちは着いて行った。
「ここが会場みたいだね」
扉の先の光景を見たコルトがつぶやいた。テーブルが数十個あり、その奥には大きなステージがあった。
「俺らが一番乗りみたいだな」
ブルズは満足そうに言った。ブルズの言うようにこの部屋にはエインたち以外の人はパーティの受付スタッフらしき人しかいない。
「まずは受付を済ませておいた方が良さそうだな」
部屋内の様子を見てエインは言葉を発した。
「そうだな。あのーすいません」

ブルズは大声を出して、スタッフを呼ぶ。その声に気づいたのか一人の女性がこっちに向かってきた。
「はい。何でしょうか？」
「あの、クリスマスパーティの受付って何処ですればいいんですか？」
コルトが女性に尋ねる。
「それでしたら、ステージの前にいる係りの人に招待状を提出してください」
「分かりました。ありがとうございます」
コルトは一礼し、エインたちはステージ前へと向かう。
「エイン・ウィンゲル様。コルト・リバディ様。それに、サファイア様。ブルズ・アルフィード様ですね。招待状受け取りました」
エインたちは招待状を係の人に渡した。
「僕たちはお菓子作りに行ってきますね」
エインとコルトが厨房を目指し歩き出そうとする。その様子を見て、サファイアはエインの後ろについていこうとするが――
「すいませんが、お菓子作りをする方以外のキッチンへの入場はお断りしています」
スタッフのその一言でサファイアは今にも泣き出さんばかりの表情になった。
「……エ、エインさん。わ、わた、わた、私はどうすれば……」
サファイアは明らかにパニックに陥っていた。周りのスタッフも心配そうに見ている。
「サファイア。落ち着いてくれ　大丈夫。俺はケーキを作り終わったら、すぐに戻ってくる。それまで待っていてくれないか？」
エインはサファイア優しくなだめる。コルトたちから見れば少し無愛想に見えるかも知れない。だけど、これがエインの出来る最大限の事である。
「……エインさん」
「出来るよな？」

サファイアの助けを求める様な視線にエインは少し躊躇いながらも、少し強めの口調で言った。
「は、はい。頑張ります」
サファイアが納得した様子を見て、エインはブルズへと視線を移す。
「済まないブルズ。俺が戻ってくるまでサファイアの事を頼めるか？」
「そ、それは構わないけど……」
ブルズは少しエインの眼力に押されつつ、頼みを承諾した。
「あの……そろそろキッチンに向いませんか？」
「ああ、そうだな！」
エインとブルズはキッチンへと向って行った。

「大分人も増えてきましたね」
エインたちが建物に入ってから三十分ほど経過した。建物内にはざっと見ても二、三十人ほどの人がいる。
「ああ、そうだな」
「あ、あの……良かったんですか？　サファイアさんも連れてこなくて」
コルトの言葉にエインは一瞬動揺したが、何時もの冷静な表情に戻した。
「そういう決まりなら従うしかない。サファイアには寂しい思いをさせてしまうは少し気になるが……な」
エインは表面上は冷ややかな感じを出しているが、内心ではサファイアの事を心配していた。
「優しいんですね」
コルトの何気ない一言にエインは面を食らったような表情をした
「少なくとも、俺は人に優しいなんて言われるような人間であると思った事は無いんだけどな……」

言葉を発するエインの表情からは氷の様な冷たさを感じた。コルトもフォローの言葉を入れようとしたが、結局は言葉にする事は出来なかった。

「あの――」

コルトはこの空気を何とかしようと話題を変えようとするが、目の前を歩いてきた人に視線を奪われた。

歩いてきた人は性別は男。だが、中性的な顔たち、細身な体も相まって女性に間違われても不思議は無い位だった。烏羽色の髪、紫紺の瞳をし、身長は１８０ｃｍほどの青年だった。ト音記号の形をしたペンダントをぶら下げている。

烏羽色の髪をしたの青年とエインたちがすれ違う瞬間、エインとその青年は目が合った。

「……気のせいか」

「どうかしましたか？」

エインの呟きにコルトは尋ねた。

「いや。何でもない」

何でもないと言ったものの、エインはすれ違いざまに見た烏羽色の青年の瞳。そこから戦意に近いような物を微かに感じた。

（少し疑いすぎかもな。今の所は特に何も起きていない。コルトもブルズも多分危険は無さそうだ。それで無ければサファイアを任せるような事は出来ない）

「ここがキッチンみたいですね」

エインが考え事をしていると、キッチンまで到着をした。そして、扉を開け、二人は中へと入っていく。

クリスマスコラボ（前編）　平穏な聖夜（後書き）

時間の都合で前編に出せなかったオリキャラが出てしまった事をお詫び申し上げます。

初のコラボ＆三人称視点でおかしな部分が多々あったと思いますが、読んでいただき有難うございます。

誤字、脱字、感想などあればよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1721o/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 〜蒼き復讐者〜

2011年12月25日23時51分発行